

幕末武士の英雄譚

レッドブルモンスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

B A ☆ K U ☆ M A ☆ T S Uスタイルの能力を持つた主人公が闘う話。

注意！主人公はビビリです。

5／7 ルーキー日間20位入り

1

次

番外編	9話	8話	7話	6話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
夜に誘われて				後編	前編					
第1話										
—										
129	120	111	93	78	69	56	41	28	22	10

番外編	夜に誘われて 第3話	188	181	173
10話	—	155		
11話	—			
12話	—			
5話	—			
やがて集いし者たち	—			
12.	—			
203				

プロローグ

俺は確かに刺激のある人生を望んだ、普通ではありえないこの世界は確かに楽しい。俺自身も普通とは呼べないような力を持つている。だがしかし、これはさすがにやりすぎだ。

『さあ！次の試合は今回、初出場の日向慶一郎！ランクBの選手で実力は未だ不明！この試合をどう戦うのか大変見ものです！』

「はあ…こんな事になるんだつたら辞退すりやよかつた…」

俺こと日向慶一郎は非常に参っていた、何せこれが初試合で緊張してゐるのもそうだが、しかし相手が相手だつた。

「どうぞ、よろしくお願ひします。」

「あ、どうもこちらこそ。」

相手はあの学園最強にして生徒会長「東堂刀華」だつた。普通に考えたら絶対に勝てない、一が百に勝ることがないのと同じだ。

(一番の問題は何が出るかなんだよなあ…。俺の伐刀絶技つて気まぐれだから何が出るか全くわかんないし…。)

ノーブルアーツ

そんな事を考えていると東堂が話しかけてきた。

「先に言わせてもらいます。がこの試合、私はあなたに容赦するつもりはありません。もし棄権なさるなら私はそれを受諾しますがいかがですか？」

そう言つてくる。それもそうだなんせ相手は格下、将来の人望を壊すような行為だつて本人だつてしたくないはず。

現に過去の試合でも何人か棄権していたのだから。とはいえた向も受けてしまつたからにはやるほか無い。

「確かにそうですね。ですがせつからく試合に出たのですからやれるだけやろうと思いますよ。」

「…わかりました。これ以上の言葉は不要ですね、私も全身全霊でお相手します。」

そう言い、それぞれの固有靈装こゆうれいそうを出現させる。

「散らせ、『月華』」

「轟け、『鳴神』」

日向のまわりに小型の竜巻が発生し、風が止むとそこには装飾もないシンプルな刀が手元にあつた。

「…それは？」

東堂が気になつたのは彼の刀ではなく日向の背後に白く大きな漢字で描かれていた

『龍』という文字が浮かび上がっていた。

(おいッ!? なんで『龍』なんだよ! 絶対狙つてやつてる、やっぱこの刀自我持つてるんじゃないのか!?)

「…俺の伐刀^{ノーブルアーツ}絶技のおまけみたいなもんですよ、いつも最初にでますが気にしないでください」

「…気になりますが、戦えばわかりますね」

お互い獲物を構える。そして

『Let's Go Ahead!』

試合開始の合図のファンファーレが鳴り、対峙していた二人が同時に駆ける。

先に攻めたのは刀華、雷を帯びた居合斬りを仕掛ける。当たれば感電によるショックで動けなくなり、受け止めても痺れが発生する牽制技だが日向は月華で受け止めた。

『おーとッ! ほんどの選手は避ける攻撃を真正面から日向選手が受け止めたーッ!』

「ツ! どうやらあなたも私と同じく電気系統の使い手でしたか。」

「さあ…? どうですかね。」

(違います、『龍』の文字の効果でそうなつてるだけなんです。)

お互い剣で鍔迫り合いになるが、男である日向の筋力に負けそのまま弾き飛ばされる。

「ふッ！」

次に攻めたのは日向、月華から発生した衝撃波を刀華に向けて飛ばす。弾き飛ばされて態勢を崩していた刀華だつたがすぐに立て直し、居合斬りで相殺する。

その隙に接近し、畳み掛ける。

「はあッ！」

「くッ！」

素早い動作で刀華を斬りつける。刀華はガードするも剣圧に僅かながらに押されている。しかしそれでも学園最強、斬撃の嵐を掻い潜り居合で再び斬りかかる。それを予感していたのか日向はジャンプして後退し、お互ی距離をとつた状態となつた。

（速い…、同じく電気属性ですから相殺されてしまう、ならここは剣技で対応を…ん？）

刀華はここである違和感に気付いた。

（『龍』の文字に…色が付いている？）

そう、先程試合開始時に日向の背後にあつた『龍』の文字が部首までオレンジ色に塗られていた。

（あれは一体なんなのかしら、試合前は真っ白だつたのにいつの間にか色がついてる…、あれが全部染まると何が起きるのか…。）

そんな事を考えている刀華、一方日向はというと、

(うおおお！こえエエエエ！一撃一撃殺意MAXだよあれ！)

外面では全く動じないようにして、内心ではビクビクしながら闘っていた。

(どうかあれば、画数溜まるの早すぎない!? もう半分だよ、これ下手したら…。いや、ありえないだろうなそんな事。)

悶々と頭を悩ませていると刀華が話しかけてくる。

「お強いんですね」

「え、ええ。学園最強のあなたに褒めてもらうなんて光榮ですよ」

「何故それだけの実力を持つているのに、あなたはどうして今まで出場しなかつたんですか？」

「…その話はまた後にしましょう。今は試合中ですよ？」

「そうでしたね、それでは！」

再びダツシユで居合斬りで斬りかかる刀華、再び受け止めようとしたが先程とは比べものにならない重さが日向にのしかかつた。魔力を帯びた体で今度は刀華が圧倒していく。

(ぐう！こりややばい、本気モード入っちゃつたよ!?)

そう考へながらもなんとかガードするがこのままではいずれ崩されてしまう。そうはさせまいと日向も魔力を体で全体に循環させ、そのまま斬り合いへと発展させる。互

いに斬り、それをいなす。その繰り返しが暫く続いたが刀華が大きく上段で斬りつけようとする瞬間

（今だ！）

「ハア！」

「何？！」

日向の体に循環していた魔力を電気に変化させ、放電させるように放つ。同属性である彼女には効果は薄いようだがそれを受けてしまった刀華に僅かな隙が生まれた。

日向は月華に魔力を流し込み、長い刀身を作り上げた。

「活心奥義、醒龍！」

そのまま長い刀身を刀華へと叩き込む。

「キヤア！」

（ふう、怖かつた…。）

刀華はなんとかガードするも完全にはガードできずそのまま吹き飛ばされてしまつた。

内心ビクビクしながらもなんとかこの状況を打破することができて少しホツとしている日向だったが

「…やはりあなたは強い。正直に言つて悔つていました。」

(あれ…これってもしかして…)

そう言いながら鳴神を納刀し、魔力を一点に集中させる刀華。

「ですから日向くん、私はあなたの実力に敬意を持つて全力でこの技で挑みます！」

(あ、終わった)

日向には彼女が何をしようとしているか理解していた、恐らく彼女の持つ最強の、『雷切』を放つのだ。

(無理無理！あんなのに勝てねえって！?だつて画数だつて…たま…つて…。)

そのまま刀華は日向へと駆け出し、己の持つ必殺技で挑む。そして

「《雷切》ツ!!!」

しかしこの時彼女は勝ちに急いで大事な事を見落としていた。

日向の背後に浮かんでいた『龍』の文字が輝いていたのだ。

「俺を本気にして、てめえを呪いな。」

「!?

彼は己の持つ月華を突如として上に放り投げた、その刀から光が発され黒い雲が生み出された。そして

「てめえが雷を斬るというならこいつを斬つてみな！活心最終奥義！」

『青龍』 ツ!!

雲から雷切を超える青白い稻妻の龍が刀華の『雷切』を打ち消し、圧倒した。天から降りてきた龍の景色を最後に刀華の意識は遠のいた。

会場はしんと静まり返っていた。それもそうだ、なんせ相手は初登場の無名剣士で学園最強に勝ったのだから、ジャイアントキリングもいいところである。

日向は倒れ伏す刀華にこう言い放つた。

「幕末故に致し方なし。」

（ああ：俺の人生、これからどうなるんだろうか…。）

1話

最初に言つておくが俺はこの世界の住人ではない。はたから見れば「お前は何を言つているんだ?」と言われても仕方ないだろう。

俺は二次創作である「転生」というやつさせられたが、ここで一つ間違がある。別に俺は交通事故で死んだり何かをかばつたり病氣で死んだり突然死とそういうのをしたわけではない。

あの時の俺はいつも通り大学の課題のレポートを終え、そのままベッドへ（団の団）スヤア…しただけだつた。そんなある時、突然目が覚めて周りをみると真っ白な部屋の中に居たんだ。

最初は毒入りスピード!?と驚いたんだがよく見ると部屋の真ん中にポツンと一人の男が椅子に座つていたんだ、その男はこう言つてきた。
「君は今の世界に退屈してるんじゃないか?」

と言われた。自分はそれに思わず賛同した。

まあ確かに友達が居てサークルなどに所属してはいるが確かに少しばかし退屈する事があつた。もう少し刺激のある人生というのが欲しいと思うときもある。

すると再び男が口を開き

「ならそんな君に刺激のある世界を『提供』しよう。」

そういった、あの時の俺は完全にあ、夢だな、と思い込んでしまっていた。今でもその時の自分をぶん殴つてやりたいと何度も思つたことか。

その男からの説明によればその世界は俗に言う現代ファンタジー物の世界でそこで思う存分楽しんでくれ、と言われた。しかし、何の力もない俺がそんな所にいつても瞬殺なんじやないかと尋ねたら

「もちろんそんなつま『ゲフンゲフン、可哀想な事はしないよ。君があちらの世界で生きていくために好きな能力を与えるよ。』

と言われた、途中何か言つていたように聞こえたがむせて全く聞こえなかつた。

「じゃあストリートファイターの能力で。」

「さすがに剣と魔法の世界でそれはちょっと…。」

「だつて考えてみなよ、ダルシムの腕伸びとかハカンの油塗れとかやることになるんだたがよ。」

…確かにそれは嫌だな…。

男に論され、改めて考える俺。確かにゲームの技がそのまま再現されるのはいいことだが現実でやるとまずいものだつてある。

サムスピ零の妖怪腐れ外道や首斬り羅刹の技をやるわけにはいかないしな…。念のためモータルコンバットは大丈夫なのかと聞いたら、「本当にそれでいいの?」と言われたがもちろんあんなグロテスク極まりない技なんでしたら犯罪どころの話ではない。

もういつその事F a t e系の能力しようとしたがある事を閃いた。

「そうだ、bスタイルの能力にしよう。」

bスタイルとは「m u g e n」に登場する特殊スタイルのことだ。一言で説明すると、ジヨインジヨイントキイができるスタイルだ。え、わからない? ジヤあもつとわかりやすくすると、ある条件を満たすと10割削りをする事ができる。

元々は「月華の剣士」に登場する鷺塚に幕末度を増して、魔改造した結果がこれだという。それを男に言うと、

「いいねそれ! 面白いよ!」

と椅子から立ち上がり、楽しそうにいつた。

そしてその男が俺に紙を渡してきた。これは? と尋ねるとそこに

「自分が欲しい能力とどんな武器がいいか書いて、書き終えたら自分の名前も書いてね。」

そう言われるがままその紙に自分の名前と欲しい武器と能力を書き終えた。

「さあ、ここから先は君の物語、僕達を楽しませてくれたまえ。」

その言葉を最後に周りの景色が眩しく光りだし、自分の意識は遠のいた。

そこから先はもう酷かつた。なんせ目が覚めた時には身体が縮んでいて大学生だつたはずなのに中学生にまで落とされている始末。親や友人はなんら変わりなかつたが一番おかしかつたのは世界そのものだつた。

『伐刀者』^{ブレイザー}と呼ばれる己の魂を武装：『固有靈裝』^{デバイス}

の力を操る千人に一人の特異存在。しかもその『伐刀者』^{ブレイザー}の力を比べる大会があるそうだ、しかもオリンピックにまで認められているらしい。そんな事を知つた俺はこうつぶやいた。

「夢なら醒めてくれ…。」

あのあと部屋で一人ご乱心していたがようやく落ち着き、状況を整理する事が出来た、今思い出しても見れば元凶はどう考へてもあの男のせいだろう。なんであの時自分はホイホイ胡散臭いあの男の口車にのせられたのか今でも悩む。

しかしここである事を思い出した、あの男が俺に渡した『力』の事を。もしあの男の言う通りなら俺自身もその『伐刀者』^{ブレイザー}とやらの才能があるかもしだれない。そう思いいざ

実践しようと思つたがここである事に気づく。

「…どうやつて出せばいいんだ？」

あの後、「月華の剣士」に出でくるキャラの決めポーズや仮面ライダーの変身ポーズ、挙げ句の果てには夜叉の構えなんかを鏡の前でやつてみた。はたから見れば完全に厨二病とも言えるが結局出ることはなかつた。

「こういう時は調べるのが一番だな…。とりあえず近場の書店でその手の本でも買つてみるか。」

日向は近場の書店へと向かうため、家を出た。

「…小僧、いつからそこにいた…。」

（何故だ、何故こうなつた!?）

あの後、書店へと向かう時にいつも近道のために通る人気のない道を歩いていたが

目の前で少女を誘拐する現場を目撃してしまつた。

そんな現場をバツチリ見てしまつた俺はSAN値チエック☆じやねえよ！マジどうしよう：なんか見る限り屈強そうだし戦うのは無理だよな…、だからと言つてこのまま逃げるつてのも出来ないし、というか相手がそれをさせないと思う。

「チツ、面倒だな。始末しちまおうか。」

そう言いながら男は両手を前に突き出し

「風穴を空けろ、ファニング・アウトロー」

(ファツ!?)

男の両手の周りに黒い闇が生まれ、闇がはれた後に現れたのは黒塗りの2丁のリボルバーだつた。

「小僧、貴様に恨みはないが見られたからには死んでもらう。恨むなら自分の不幸を呪え。」

(あつ、ダメだこれ死んだわ。)

そう言いながら男はリボルバーを向け、引き金に指をかけている。

俺はこんなわけのわからない世界で死ぬのか、結局自分の《固有靈装》^{デバイス}がどんなものだつたのか。

「死ね。」

バアン！

(死にたくないッ！)

そのまま弾丸は日向の額を

撃ち抜くことはなかつた。

ガキイイイイイン!!!

「何!?」

(what? 何が起きた、俺は生きてるの?)

日向は恐る恐る顔を上げる、そして日向は気づいた。己の手にいつの間にか持つていた刀が銃弾を斬つていた事を。

「小僧：
『伐刀者』だつたのか！」

(この刀つて：鷲塚のだつたよな…。)

そう、彼が持つのは「月華の剣士」に登場する鷲塚というキャラクターであり「mugen」の「bスタイル」の先人者とも呼べる人物の刀だつた。

「貴様！後ろのは一体なんだ!?」

男に言われ、後ろを振り返ると『誠』という白い大きな文字が日向の背後に浮かんでいた。

(これつて：「漢」ゲージじやん。)

そう、彼が願つた能力の要となる「漢」ゲージ。ゲームでは特殊技やコンボで画数を得ていくのだが果たして現実ではこれはどのような扱いになるの考えていると。「しかし！所詮は青二才のガキだ！ぶつ殺してやる！」

ズドオン！スドオン！ズドオン！

(うおつ!?)

突如として相手が発砲して驚いたが何故だか身体が自然に動く、まるで今まで使いこなしていたかのように。日向は銃弾を体を捻つて回避する。

「…やるしかあるまい。」

(一応、正当防衛に入るよねこれ?)

お得意のポーカーフエイスを使い、動搖を隠す。そしてこれがこの世界に来て初めての命がけの戦いをするのだつた。

「ふつ！」

軽く息を吐き、地面を大きく蹴り腰を低くしながら男に走る日向。男は日向に向か、再び銃を発砲するが

ズドオン！ズドオン！

カキイン！カキイン！

「弾いただと!?」

「他愛なし…。」

(こ、こええええええええ！)

男の放つ銃弾を真正面から刀で弾く日向。しかし内面はいつ当たるかビクビク怯え

て いる 状 態 だ。 そ し て そ のま ま 日 向 は 男 に 突 つ 込 み、

「うおおおお！」

「ガツ!?」

そ のま ま 突 進 し、 壁 に 叩 き つ け る。

「ゆくぞ！」

「グオオオオオオ!?」

日 向 は 目 に も 止 ま ら ぬ 早 さ で 男 に 連 続 の 突 き を 食 ら わ す、 男 は ガ ー ド す る 間 も 無 く や
ら れ る ば か り。

「はあつ！」

日 向 は そ のま ま 男 を 上 に 弹 き と ば し そ のま ま

『虚 空 殺』 !!!

「ガハア!!」

そ の 男 に 強 烈 な 突 き 技 を 繰 り 出 す。

「こ れ で 終 わ り だ。」

(生きてる…よね?)

そ う 言 い 放 つ が 男 は よ ろ よ ろ と 立 ち 上 が る。

「ふざけやがつて…、 飛 び 殺 し に し て や る !!」

そう言い、男は再び銃を放つが日向に狙いを定めていなかつた。

ズドオン！ズドオン！

「どこを狙つて…ガツ！」

(ぐ…いってええええ！何が：起きた!?)

男の放つた弾丸はあらぬ方向へと撃ち出されていた。しかしそれなのにそ 後方から弾丸が飛んできて日向の左腕を貫いた。

「これが俺の伐刀絶技ノーブルアーツ：リフレクト・ショットだ、弾丸を自由に跳弾させたのさ…。」

そう言いながら男は再び銃を日向へと向ける。

「テメエのせいで時間がオーバーしちまつたじやねえか：斃り殺したい所だがとつとと終わらしちまおうか…。」

(これは…だめだ。避けられない…。)

この状況に絶望している日向、これは回避も出来ないしかといつて刀で弾くには量が多すぎる。もう諦めるしかないのか、そう考えていると手に持っている刀が突如として震えだした。

(なんだ？…！そうだ、俺にはまだ！)

「惨たらしく死ねえ！」

男の銃から計12発の弾丸が放たれ、それぞれ壁に跳弾し日向を包囲し、銃弾の檻を形成し、弾丸全てが日向に命中

するはずだった。

「ツ!? 消えただと!?」

完全に包囲していたはずの日向が突如として消えた事により戸惑う男、背後に気配を感じ急いで振り返ると刀を水平に構え、突きの状態に入っていた。そして日向の背後に浮かんでいた『誠』の文字が輝いていた。

「すべては己の正義のため…貫くまで…。ウオオオオオオオオオ!!

『最終・狼牙』!!!!

「何が…おこ…た…」

日向の一撃必殺技、『最終・狼牙』を喰らい、今度こそ男は地に倒れ伏した。

「斬り捨て…御免！」

（先に攻めてきたんだからこれは正当防衛あり…だよね？）

この世界初の戦いであり初勝利をとった日向だつた。

2話

「あ。 そうだった、あの少女は！」

謎の男との戦いで忘れていたが少女は道端に無造作に置かれていた。恐らく戦闘する際に投げたのだろう、人は布団や枕ではないのに。

近づいて少女に近寄る日向。その少女は目隠しや猿轡、手錠なんかがされていてこれでもかというぐらい拘束されていた。誘拐にしては随分と慎重だなつと思つた。念のため彼女に声をかけてみる。

「えっと…大丈夫ですか…？」

「…。」

反応はないようだ、気絶してるのである。

そう思いながら手錠を刀で斬つて外す。そして

「!？」

「ん？どうやら起き^ヒグエッ!?」

手錠を外した瞬間突然起き上がりそのまま組み伏せられた日向。

「おまえは…誰だ？何が目的だ…。」

(あれ!?これって俺も犯人と疑われる!?)

「…勘違いすんな、俺はあんたを助けた通りすがりさ。」

ボーカーフエイスでキリッと答える日向、内心は冤罪でビクビクしている。

「どこにそんな証拠があるの…?」

「…」の傷を見てそんなこと言うか。」

日向は撃ち抜かれた左腕を少女に見せる。

「…自演かもしない。」

(うそん、この子疑心暗鬼すぎない?)

「だつたらなんであの男はこんなクソ熱いコンクリートの上で寝てるんだ?」

そう言いながら今も気絶している男を示す。少女はそれを見て少し考えたのかやつと日向の拘束を緩めた。

「やれやれ、まつたくひどい目にあつたな…。」

(ああ、腕が痛い…早く病院行きたい。)

「…私はまだあなたの事を信じていない。」

「そうか…。」

少女は拘束を解いたものの日向から僅かに距離を離している。今更だが拘束具を解いてやつと少女の全貌が明らかとなつた。

肌の色は褐色で、白く長い髪をまとめてポニーテールにした少女だった。日向は一目でその少女が可憐だという事を理解した。

(すげえな……こんなのが現実に存在するんだな。あれって髪を染めてるわけじゃないよな……地毛?)

「それで……あんたはあの男になんで攫われそうになつたんだ?」

「知らない……恐らく身代金目当てでしようね……。それにしてもその刀……。」

少女は日向の持つ刀をマジマジと見て いる。

「あなた……『伐刀者』^{ブレイザー}だつたのね……。よくあの男に勝てたのね……。」

「タダのまぐれさ……。」

(本当になんで勝てたのかつて自分でも思う。)

「……そう。それで、あなたの持つ刀の銘は何?」

(え、名前とかあるのこれ! 全く知らないんだけど!?)

ほとんどの『伐刀者』^{ブレイザー}は『固有靈装』^{デバイス}を出すとき、名乗りながら出すというが日向は何も言わずいつの間にか出てきたから知るはずもない。

(ええ……。どうしよう、今ここでつけようにも何かそれらしい名前とかあつたかな。……)

「そうだ!」

『月華』……月に華と書いて月華だ。」

「そう…月華…。」

日向は咄嗟に頭の中に思い浮かんだ言葉を言う。言う必要もないと思うが「月華の剣士」の名前から文字をとつたのだ。

しかしここで彼女は突然

「…魔を穿て、輝夜」

(ゑ?)

突如として彼女の手が光り輝き、止むとそこには長い和弓を持つて、腰には矢が入った筒を提げていた。そして矢を番え突如としてこちらに向けた。

「…ジツとしていて。」

「…恩を仇で返すのか?」

(え、何で?俺あの子を怒らせるようなことしたつけ!?)

日向が困惑するなか少女は矢を放つ

日向の背後を狙っていた男に對して。

「グハア！」

「む…。」

(うおつ！起きてたのかよ…。)

「…これで貸し借りなし。」

少女は男が日向に銃を構えていたのを察知し矢で射抜いたのだ。

(あつぶねえ！今頬掠つてたぞ！?)

やはり内心ではビビつている日向だつた。

「ミナ様〜、やつと探しましたよ〜。」

そんな事をしていると後ろからか女性の声が聞こえ、こちらに向かつてきている。

「あれはあんたの知り合いか？」

「そう…わたしのお付きよ。」

「ハア…ハア…勝手にどこか…行かないで…ください。」

少女の言うお付きはメイド服を改造したような服を着た大人の女性だつた。

「ちょうど良かつたいろは、警察に連絡と彼を病院に連れて行つて。」

「えつそれつてどういうことで…うわ！君大丈夫!? 腕怪我してるじゃない!?」

「ええ、まあ…。」

(やつと氣づいてくれたよ…さつきから言おうと思つてたのに！)

そのあと警察が連絡を受け、男は能力封じの手錠をされ誘拐と殺人未遂で現行犯逮捕され、警察に連れて行かれた。

俺と少女もあのあと事情徴収なんかも受けたりした。そして病院に行く際、治療費は少女のお付きが持つとのことらしい。

そこでお互い別れることになるがここである事を思い出す、

「なあ、今更だけど俺はあなたの名前を知らないんだ、もしよければ教えてくれないか。」
（別にナンパとかじやないつすよ、本当ですよ！）

「…ミナ、天野ミナ。」

「俺は日向慶一朗、それじやあな。」

ミナはいかにも高級そうな車に乗り、日向はパトカーに乗せられお互い今度こそ別れた。

あの後こちらの世界にはなかつた『IPSカプセル』というSFチックな医療器具に興奮したり、親に滅茶苦茶説教されたり心配されたりした。

今思えば俺はこの世界で命懸けの戦いをしたんだと時間が経つてようやく理解できた。あの時の俺はなぜか体が動く、確かに俺は中学から高校の間は剣道を習っていたが銃弾を切るなんてことは普通できやしない。もしあれが失敗していたら俺は…。

そんなことを考えているうちに怖くなってしまいそのままベッドへと潜り込み、眠りに落ちていった。

そして翌日、全身筋肉痛でベッドから降りれなくなつて学校を休むことになつた。

3話

(ああ、この前は本当に酷い目にあつた。)

やつと筋肉痛がほぐれ、まともに体が動かせるようになり学校に登校した日向だが、クラスに入るな否やみんなが「おまえ伐刀者ブレイザーバイオニス倒したつて本当か!」とか「どんな固有靈装デバイスなんだ。」とかひたすら質問攻めされる始末。

ホームルームが始まつて漸く一人になる事ができた。そして日向はこの前から気になる事があつた。

(ニュースで犯人は未だ口を割らず、つて報道はしてたけど男が「時間がオーバー」とか言つてたけど本当に身代金目当ての誘拐だつたのか?)

男が言つていた言葉が気になつて悶々と悩んでいると先生がクラスのみんなに喋りだした。

「みなさん、今日はウチのクラスに転校生がやつてくるんですよ。」

「せんせー、その人は男子ですか、それとも女子ですかー。」

「さあ? それは見てからのお楽しみですよ。」

(へえ転校生か。もうすぐ夏だっていうのに珍しい。【中1です。】)

「それではミナさん、入ってきてください。」

(…ん? ブツ!?)

日向はその転校生を見て思わず吹いてしまった。なぜならその転校生はこの前犯人から助け、助けられたあの時の少女、『天野ミナ』だつた。

(まさか同じ学校で会うとは思わなかつた…、漫画かよ。)

「それでは天野さん、自己紹介よろしくお願ひします。」

「…天野ミナです。3年間よろしくお願ひします…。」

霸気のない声で典型的な自己紹介をするミナ。クラスの男子の一部は馬鹿みたいに騒いでいた。

「それじゃあ天野さん、席はあそこに座つて。」

「…先生、席の指定をしてよろしいですか?」

(ゑ?)

再び男子がガタツと席から立ち上がる、おまえらじやねえ座つてろ。そんな中、日向はなんとなく嫌な予感を感じた。

「…彼、日向慶一朗の席でお願いします…。」

(な ゼ ゆ え ! ?)

まさか名指しで指定してくるなんて全く予想してなかつた日向。男子たちも膝から

崩れ落ちる者や、恐ろしい殺気を浴びせてくる者もいた。

「あらあら、まさかお知り合いだつたのかしら…。」

「ええ、まあ…。」

(確かに知り合いですけども! そこまで深い中ではありません!)

そういう、隣の人と交換されミナが席に着く。

「…。」

「…どうも。」

(無言が！ 無言が辛い！)

結局ミナはこちらに話しかける事もなくましてや顔を向けることもなく授業は滞りなく続いた。…男子からの殺気は相変わらずだつたが。

二時間目と三時間目を終え、四時間目は体育の授業。それぞれ体操着であるジャージに着替え校庭へと集合する。

(ハア…、結局あいつはなんで俺の隣の席なんかについたんだ？ 別に話しかけるわけでもないというのに…。)

そんな疑問を考えながら校庭へと歩く日向。サッカーの授業をする準備のため体育倉庫へと向かう時、ミナと先生が何やら話をしているのを目撃した。遠くだつたのでさすがに話の内容まではわからなかつたが何やら先生が楽しそうに興奮しているように

見えた。

(…なんだ?)

気になつたがクラスメイトが急かしたため途中で見るのをやめた。そして先生の集合がかかり、いざ授業が始まると思いきや

「ええ、今日は、伐刀者ブレイザーであるミナさんが同じ伐刀者ブレイザーである日向くんと模擬試合がしたいとのことなので今日はその見学としましょ。」

「「「え?」」」

(は…ハアアアアアア!?)

先生の口からとんでもない爆弾発言が発せられた。何故いきなりそんなことを、と思つたが気づいたことがあつた。

(まさかあの時話してたのってこれのことだつたのか!!)

そう、サッカーの準備をする際ミナは先生に日向との模擬試合を頼んでいたのだ。

(い、いや待て! いくら伐刀者ブレイザーとの戦いがスポーツ扱いといえどここは神聖な学び舎! 問題を起こしたら先生だつて困るはずだ!)

そう思い先生に中止を願い入れようとしたら

「あ、ちなみに何か物を壊してもミナさんが自費で持つとのことなので安心して戦つてくださいね。」

(ちっくしょう! 逃げ道が塞がれた!)

「…試合は《幻想形態》とでやる、先生達も離れていてください。万が一にも他の生徒に攻撃が当たつたら大変ですので…。」

ミナは淡々とみんなに説明する。

(えっと確か《幻想形態》って模擬試合で使われる武器の状態だつたよな…。)

《幻想形態》とは人間にたいしてのみ、物理的なダメージを与えず、体力を直接削り取る形態での武器を召喚する事。主に練習試合などで使われている方法だ、死人もケガ人も出ないクリーンな試合ができる。

(よく考えてみたらこの前の戦いつて思いつきり、実践形式でやつてたんだよな…。だけど今回はあくまで模擬戦、痛みなんかに怯えずに済むかもな。)

そんな事を考えているうちにクラス名とのみんなはいつの間にか遠いところに陣取つていて、ミナも日向から離れいつでもできる体制となつた。

「…じゃあ、始めましょう。」

「わかった…。」

(決め台詞言いながら召喚するんだが…今思えばそれってけつこう恥ずかしい!)

そんなくだらない事を考えながらも己の武器を召喚するために銘を呼ぶ。

「魔を穿て、『輝夜』。」

「散らせ、『月華』。」

後ろのほうから「おお」という声が聞こえた。それもそうだ、こんなかつこいい武器の登場のさせかたをしたらそうなるわな。

(さて、問題は『誠』の溜めをどれだけ早くできるか…ってええ!?)

日向は困惑していた、昨日戦った時に浮かんでいた「漢」ゲージが『誠』ではなく『月』にかわっていたのだ。

(ええつとどういうことなんだ、もしかして「漢」ゲージってランダムなのか、それとも連続では使えないのか!?)

全く予想していなかつたハプニングに戸惑う日向、そんな彼にミナは話しかける。

「…後ろのそれは?」

「…さあ、なんだろうな。」

(いやこれ本当に予想外だつたわ、確か『月』をもつ「bスタイル」キャラつて…守谷じやん。)

守谷とは「月華の剣士」に登場する第二の主人公、このキャラは飛び道具がないため、ゲームで使いこなすとなるとかなりの腕を要求されるキャラ。しかし一度接近戦に持ち込んだが最後、相手を躊躇することができる。

(天野のもつ固有靈装^{デバイス}は和弓、ゲームで考えたら完全にシユーテイングゲームだがここは現実、立ち回り方によつてはどう転ぶかわからないな…、それに「漢」ゲージも溜めやすいしな。)

そう考へてゐるうちに先生がホイツスルをもつて俺たちの真ん中あたりの位置に立つ。

「それでは！試合開始！」

ピィイイイ〜〜〜!!

先に動いたのは日向、素早くミナ目掛けて駆け出す。

(近づかなければ意味をなさない、まずは接近を試みて…。)

「…。」

ミナはそのばから動かず素早く自分の腰から矢を三本取り出し弓に番え、狙いを素早くつけ矢を三本放つ。

(あの時の銃弾に比べれば…。)

そう思いながらあの時のように矢を刀ではじこうとしたが

突如として矢が爆発を起こした。

ドカアアン！

「が……！」

(え……今何が……)

小規模な爆発を受け、吹き飛ばされる日向。何をされたか全く理解ができなかつた、いつたい何が起きたかと考えようとするがそんな隙をミナは与えず、間髪なしに矢を放つ。

それを察知した日向はすぐに立て直し、その場から回避する。着弾した矢は再び爆発を起こした。

「……厄介だな。」

(矢が爆発するとかどこの赤い弓兵!?)

そんなことを考へている暇もなく彼女は次々と矢を打つてくる。

(迎撃はだめだ、よけることに専念するんだ!)

今度はジグザグに走り、動きを読みずらくさせるが、ミナはそんな状態でも的確に矢を放つ。

(危なッ！……何!?)

今度は間一髪よけたが、日向の避けた先の逃げ道をふきぐように矢が待ち構えた。いつも癖でガードしてしまい再び吹き飛ばされる。

(痛……くはないが、体力がなくなつた感じがする……)

爆風で倒れてしまい思うように動けない、ミナは容赦なく日向に追撃を仕掛ける。

(なんだ、空から…嘘だろ!?)

ミナは空に向けて大量の矢を打ち、日向の頭上に矢の雨を降らせる。日向はごろごろと転がるように回避する、先ほどまで寝ていた場所は大爆発を起こしていた。

(ああダメだ！全く近づけねえ！なら…！)

今度はミナに対して大ジャンプをし、空中から攻める。

(奴は一回弓を射るのにおおよそ一秒ほど…それを上に向けて撃つならさらに時間がかかるはずだ！)

そう考えながら突っ込む、ミナも飛んでくる日向に向けて矢を放つが空中で身をひねらせ回避する。

(よし、これなら！)

「…。」

しかしここでミナは先ほどまでの矢とは違い、一本の矢を放つ。先ほど同様体をひねらせ回避するが

(あと少し…！ガツ!?)

突如として彼の背後からすさまじい痺れが日向を襲う、ミナが先ほど打った矢はホーミング式のショックアローだった。空中で無防備な彼に彼女は突如として腰の筒に

入つてある矢を何十本も取り、空中にほうり投げた。

「…ニルヤ・カナヤ」

そのまま自由落下してくる矢を番えては放ち、番えては放ちをまるでマシンガンのように高速で日向に向けて射る。それを空中でガードもできないまま撃たれ、大爆発が起きそのままちに倒れ伏した。

(…だめだ、勝てねえ。)

大の字になりながらそう思う日向、実力差がここまであるとは。

(諦めるか？…いやきつと何か攻略法はあるはずだ、考えろ！)

そしてここである事を聞いた。

(そうだ！…今考えてみれば上品な戯いをしようとしてたよな俺：クラスのみんなに見られてたからかな。)

そう考えながら刀を杖にして立ち上がる。

「…まだやるつもり？」

「もちろんだ、まだ闘志は消えてないさ。」

そう強気で答える日向。そんな彼にあきれながら弓を構えるがここで違和感を感じた。

(…?)

日向は刀を大きく上段に持ち上げていた。一体何をするつもりなのだろうかと彼女が考えていると

「うおおおお！」

「?」

彼は己の刀に魔力を流しこみ、長い刀身を作り上げそのまま

「おらああああああ!!!」

校庭へと叩きつけた。

「くう!?

日向が校庭に叩きつけた刀身は地面を大きく割り、大量の砂埃があたりを舞い視界を遮る。

「そんな!?

ここでミナに初めて動搖が走る。視界が悪い中、どこから攻めてくるか戸惑つていた。そして

「もらつたあ!!」

彼女の背後に回っていた日向がようやく一太刀を入れる。そして間髪入れずにどんどん斬りこむ。

「逸刀・月影』！」

「がッ!?」

ミナの懷に潜り連続で斬りつける、そしてそのまま
『活殺・十六夜月華』!!

先ほどとは比べ物にならない速さで突きと斬りこみを放つ。そして日向の背後に浮かぶ『月』が輝く。

ミナは攻撃を食らうも根性でなんとか耐え、矢を無造作につかみ放り投げる。先ほど
の技を繰り出すつもりだろう。そして再び高速で矢を射るが

「もう…遅い！」

「?」

日向の姿がぶれて消えた。どこかとあたりを見回すがどこにもいない、そしてミナの
背後から

「もうお前はすでに俺の間合いに入っている…終わらせよう。」

振り返りさまたちを放とうとするが時すでに遅く彼の斬撃の嵐に飲み込まれていく。

そして彼女は見た、目の前に日向がいるというのに背後にもう一人の日向が同じく刀を振るつていた。

「己の器を知れ！」

『月華練乱』 ツ!!!

二人の日向が同時に居合切りをしそれを受けたミナは倒れ伏した。

そんな日向は彼女にこう言い放つ。

「己の器がどれほどだつたか理解したか？。」

（ああやばい、すつごい疲れた；今にも倒れちまちまいそう…。）

4
話

俺と天野は保健室のベッドで寝ていた。ノックダウンした天野もそうだが俺の場合は体力と魔力を使い果たし、一撃必殺を放つた後すぐにぶつ倒れちまた。

先生には少し怒られたが天野のお付きのいろはさんが駆けつけて校庭の修繕費を払つたらしいとの事、やっぱ天野ン家つて金持ちなのか？そんな事を考えながらベッドで寝ていると

「ん…」

「…起きたか。」

（必殺食らわして中々起きなかつたから心配したけど…大丈夫そうだな。）

あの試合が終わつて一時間経つてようやく起きた天野、ちなみにおれは30分後だつた。

「負けたのね、わたしね…。」

「ああ…。」

そう答える日向、しかし天野はあまり悔しがつているようには見えなかつた。
そして日向は前々から気になつていた『あの事』を聞いてみた。

「…なあ天野、俺が倒した犯人って誘拐犯だつたんだよな…。」

「…うん。」

「犯人は本当に身代金目当てだつたのか？」

「…どうしてそう思うの？」

「あの男が言つていた『時間がオーバー』って言葉なんだよ。まるで別の意味のように聞こえてな…。」

「…。」

天野は何も答えないが

(これは図星だな…何かあるのか?)

「…まあ、所詮ただの憶測だ、気にすんな。」

そういうベッドから降り、保健室の扉を開け、外に出ようとすると天野が何かを小さな声でつぶやいたのが聞こえた。

「…解放軍。」

(え?)

日向はそのまま扉を閉めてしまい、もう一度中に入つて聞こうかなと思つたが、担任の先生が現れそのまま教室まで引つ張られ反省文を書かされた。

結局放課後まで残されてしまった、あの後すぐに保健室に立ち寄つたがいるはずもな

く、帰っていた。

(あいつの言つてた解放軍リベリオン…なんなんだ?)

天野の言つていた言葉を考えながら校門前まで歩いていると見覚えがある女性がいた。

(あれは…天野のお付きのいろはさん…だつたよな。)

そう、以前の事件の時に病院の治療費をもつてくれたメイド服を改造したような服を着た天野のお目付け役のいろはさんだった。

「こんにちは。」

「え? あら、君はこの前の…、この前の怪我はもう大丈夫なの?」

「ええ、おかげ様で…。」

「こうやつて話すのは初めてだつたが今見れば本当にきれいな女性だと思つた。
「どうしてここに?」

「あの、それなんですが…ミナ様を迎えて来たのですがまだ来なくて…。」

(え?)

保健室には誰もいなかつた、もうすでに帰つたのかと思つたのだが

「…あの、連絡は?」

「したのですけど電話に出なくて…。」

「…あの、今聞く事じやないと思うんですけど：解放軍、この言葉に何かご存じですか？」

その言葉を聞いた瞬間、いろはの顔色が突然変わった。

「どうしてそれを…。」

「…やつぱりなにか関係がありそうですね。」

（あれ、おれもしかして地雷踏んだ？）

「…わかりました、あなたも事件の関係者である以上、話したほうがいいですね…。」

いろはは解放軍リベリオンの事を説明した。

彼女が言うには解放軍とはを『選ばれた新人類』とし、それ以外の人間（非伐刀者）を『下等人類』と位置づけ、伐刀者による『下等人類』の支配、『伐刀者は力ない民衆を守るべし』とする社会構造の破壊を目論んでいる犯罪組織の事である。

「もしあなたの言つたことが本当だとするなら！」

「ええ、恐らくそいつらは天野の力が目的で誘拐したんだと思います。」

「ツ！だとしたら今ミナ様は！」

そう言い、ポケットから携帯を取り出したいろは。彼女は日向にこう言う。

「今お屋敷に連絡して捜索隊を出し、警察に連絡します。君も巻き込まれるかも知れまい、早く自宅に戻りなさい。」

彼は帰り道を歩きながら改めてこの世界の事を考えた。

(…そりやそろさ、『力』があるんだつたらそれを悪用する人間だつているさ…。今思えば『力』がそこら中にあるつて事は身近に『死』があるんだ…。)

前の世界では決してありえなかつた事をこの世界で2回も戦い、解放軍(リベリオン)の事を聞き改めてこの世界が危険な事かようやく理解した。

(そもそも解放軍(リベリオン)の連中は殺しのプロであるはず、たかが中坊一人で何ができるんだ？あの時だつて偶然勝つただけに過ぎないかも知れないじやないか！)

心で叫ぶ日向、自分がどれほど臆病で小さい人間かを改めて理解する。

(俺は漫画の主人公みたいに勇気があるわけでも死を恐れないような人間でもない…けど)

日向は顔をあげ

(だからといつて逃げ出せるわけないだろ！相手が殺し屋でテロリスト？知るか！臆病者なりにあがいてやるさ！)

彼は来た道を戻り走り出した。

もし犯人が天野をすでに捕まえたというなら一目のつかない場所で誰も寄り付かない場所を選ぶはず、そう考えながら向かつた先は

(…考えられるとしたらここぐらいだよな…。)

日向が向かつたのは学校や町から遠く離れた山の大きな廃業したホテル、前の世界でも同じ建物が存在したのだからまさかと思い向かつてみたが存在していた、さらに

(こんな所に車が停まってやがる…、どうやらビンゴみたいだな。)

本来こんな不気味なところに誰も立ち寄らない場所に置かれている車が不自然だつた。

(…よし、覚悟を決めろ日向慶一郎!)

そして中を探索するべく足を踏み入れた。

(やっぱ夕方でも薄気味悪いところだな…。)

前の世界でもこの廃ホテルは心霊スポットとして扱われていたらしく、いかにも何かが出そうなところだった。しかし今さらあとには引けない、そう思いどんどん中心部へと入つていく。

そして奥に進んだ先に扉から光が漏れている場所があつた。

(なんだ…?)

扉の隙間を覗くと中はホールのような空間になつており、劇場舞台のスポットライト

が光っていた。そしてそこに照らし出されていたのは

(天野だ!)

そこには縛られているボロボロの姿の天野が倒れていた。そして天野の近くに長いローブを着た人物が椅子に座っていた。

「やれやれ…ガキだと思つて少し油断はしたが無事捕まえる事が出来たぜ…。まあさすがはジユニアで優勝しただけのことはあるが経験は浅かつたな…。」

(え? 優勝つて…あいつって結構すごいやつだったの?)

そんな事を考えると男が席から立ちあがる。

「それに…おまけもついているようだしな…。」

(気づかれている!?)

その後、日向の背後から衝撃が襲う。

「グハアツ!?

そのまま吹き飛ばされ、ホール内へと入れられる。

「ん? おまえは沖原を倒した奴…だつたか?」

「沖原? そんなやつ知らないねえ…。」

(何されたんだ…今?)

痛みをポーカーフェイスで隠しながらローブの人物が何をしたかを観察していると

(あれは鎖?)

男の周りには長い鎖が広がつていてた、おそらくあれが男の固有靈装^{デバイス}なのだろう。「ふつ、誤魔化す必要はない、あの男もガキにやられるくらいだつたならあいつはその程度の男だつたのさ。」

「…あのリボルバーの男の仲間だつたか。それで、天野をどうするつもりだ。」「決まつてはいる！我らが解放軍^{リベリオン}の一員として迎えるのだ！こんなにも実力を余らすなどもつたいないにも程があるだろう！」

「なーにが解放軍だ、所詮やつてることはただのテロリストだらうが！」

日向はいつにもなく声を大きくして叫ぶ。

「ほう、威勢はいいが無謀と勇気を吐き違えるな小僧！」

ローブを脱いだ男が叫ぶ。男の容姿は金髪で上半身裸で屈強な肉体を持ち、体にはいくつもの傷がつけられていた。

「やつてみろ！ 散らせ、『月華』！」

日向は己の固有靈装^{デバイス}を手元に召喚する。そして再び背後の「漢」ゲージを見ると

(まだだ！今度は『月』から『誅』にかわつてやがる！)

背後に浮かぶ文字は『誅』に切り替わっていた。

(『誅』つてことは小次郎か。)

「月華の剣士」に登場するキャラである真田小次郎は鷺塚とほぼ同じスペックだがスピードが速く飛び道具にも優れたハイスタンダードキャラである。

「なるほど、それが貴様の伐刀^{ノーブルアーツ}絶技か、面白そうじゃないか。」

「…ゆくぞ！」

刀を構え、男に駆け出す。

「ふん！」

男の近くから飛び出した鎖が日向目掛けて飛ぶ。

「瞬塵》！」

日向は急加速をし、すべて回避する。

「ほう！・ならば・これはどうだ！」

男は地面に向けて鎖を飛ばす。

そして日向の足元から難十本もの鎖が伸び、襲おうとするが

「邪魔だ！《散華》！」

走りながら居合斬りの一閃で鎖を全て切り裂く。

男との距離もあと3メートル、そのまま繰り出される鎖をいなしながら男に突っ込む。

「喰らえ！《無明剣》！」

そのまま男目掛けて鋭い突きを繰り出す

が、男の鼻先手前で技が止まる。

「な？」

（体が…動かない！？）

技だけではない、体全体が全くと言つていいほど動かないのだ、良く見ると体に大量の鎖が巻き付いていた。

（いつの間に！？）

「俺がただ鎖を飛ばしていただけだと思つていたか？」

男は片手に鎖を持ちそのまま日向に鞭のように叩きつける。

「オラア！」

「グツ！」

（痛てええええ…）

そのまま観客席へと吹き飛ばされ、椅子にもたれかかるように倒れる。

（ああ…意識が…。）

頭を打ったのか意識が朦朧とし、景色がぐにやりと歪む。

(くそ…やつぱ関わるんじやなかつたかもな…。)

全ての原因はあの夢の男、冗談で言つたことが現実でそれがおこればこうなる事ぐら
い心のどこかで理解していた。所詮能力が強からうと戦いとは無縁の世界で生きてい
た自分が本来勝てるはずがない。

今にでもこの戦いから逃げ出したいと本能が叫ぶ、手や足が震え持つている刀を落と
しそうになるが

『諦めるには少し早すぎるなあ。』

頭の中に夢の男の声が響いたが幻聴と理解しているものの、なぜか耳を傾けてしま
う。

『これはまだ序章…チユートリアルに過ぎない。そんなので負けるのだつて僕もそうだ
し君も嫌だろ？』

そう言つてくる。ならどうすればいい？と聞くと

『簡単な話さ。あれは君にとつての敵であり障害であり壁だ、それらは君の行く手を阻
むもの邪魔なら全部

斬り捨てればいい。』

そう答えた。

『それに君が選んだ力はまだまだ高みを目指せる。進化を続けそれはやがて『最強』となるんだ。さあ、君が持つ『最強』で奴を倒すんだ!』

言葉が途切れ意識を取り戻す。

(好き勝手言いやがつて…。だけど…理解したぜ。)

日向は刀を杖替わりにし立ち上がる。

「ほう、あれを受けてまだ立ち上がるか。」

「へ、いい感じに眠つちまつたが大したことねえさ。」

(とはいって、体中バツキバキに痛いけどね。)

ようやくいつも通りの自分が取り戻せるようになつた、そして『誅』の文字の真なる力を思い出した。

「ならば永遠の眠りを」提供しよう!—これが我が^{ノーブルアーツ}伐刀絶技! 《ナイトメア・プリズン》ツ!!

男が叫び、鎖はまるで蜘蛛の糸の巣のように劇場内で埋めつくそうとする、全方位3

60度攻撃で放たれる技を見て日向は

「…凄まじいな。」

(うわ!ありややばいな。避けられないしガードもできないじやん。)

もはやお約束と呼べるポーカーフェイスで動揺を隠す。内心はビクビクしてはいた
が

(だつたら…全部斬つてしまえばいいだけの事。まあ一人じや無理だけどな。)

刀を構え、己の体に魔力を回す、彼の体がぶれそして

「終わりだア！」

男がそう叫び、で串刺しに

ならず、日向はすべての鎖を一本残らず斬った。

「なつ！なんだとおおおお？！」

男は自分の伐刀絶技を破られたことに激しく動搖した。

「なぜだ！いくら斬撃を早く繰り出そうとも『一人』での数の鎖を斬るなどありえん
!!」

「ああそうだな、だが『一人』が無理なら『二人』ならできるつて事さ！」

「なんだと？…貴様！後ろにいるのは誰だ！」

「だつてさ、出て来いよ。」

「…。」

後ろから出てきたのは『瓜二つの日向』だつた。

『m u g e n』に登場するマスター小次郎「Bスタイル」の最大の特徴は戦闘中、鷲塚を召喚ができ、同時に戦うことができる。

(とつさにやつてみたけどまさか自分が出るとは思いもしなかつたよ。)

「ええい！たとえ一人増えたところで俺に勝てるものか！じわじわと殺してやる！」

男は再びこちらに鎖を放つ。

「行くぞ！」

『…。』

本体が先に前へと出て、鎖をどんどん斬つていき、左右から襲い掛かる鎖を分身が担当し迎撃すしどんどん男に接近し

「《百舌連斬》!!」

踏み込みからの斬りこみを与え、そのままラツシユ状態へと持ち込むみ、打ち上げる。

『…。《狼牙・斜式》。』

分身が打ちあがつた男に対し、追い打ちをかける。

「（貯まつた！）合わせるぞ！」

『…。《コクン》』

日向の背中の『誅』が輝き出す。

「覚悟しろ！」

『…行くぞ。』

二人は男を挟むように対峙し、刀を水平に構え一撃必殺の突きを放つ。

『狼牙・零』 ツ!!

『最終・狼牙』 ツ!!

「バカなアアアアアア!?」

二人の一撃必殺技を受け叫び声をあげながら男は地に倒れ伏した。

日向は男に対し

「あんたも俺も、どうやらツイてなかつたみたいだな。」

(ほんとそれな。)

そう言い放つた。

5話

「ハア…ハア…。」

(やつと終わつた…。)

男が気絶した瞬間、日向の体にどつと疲労感が襲う。

(あんだけ攻撃も食らつたのもそuddi、魔力を酷使したつてのもあるな…。)

チラツと分身を見ればキラキラと光の粒子となり、消えようとしていた。

「自分に対して礼を言うつてのもあれだけよ…ありがとうな。」

『…じやあな。』

その言葉を最後に日向の分身は魔力の粒子へと還り、そこには誰もいなくなつた。

(ふう、一先ずはこれで解決したけど…問題は天野なんだよな…。)

ボロボロの状態で気絶している天野を無理に起こすわけにもいかない、だがこんな所
にいてはいずれ男も目を覚ますかも知れない。

(…仕方ない。)

日向は彼女の拘束を解き、天野をおんぶで背負う。

(イテテテテ、体のあちこちが痛い…鞭打ちとかになつてないよな…。)

痛みに耐えながらも日向は天野を背負つてホテルの中を歩いて行き、入ってきた出口へと向かう

(…、) は?

微かに意識を取り戻した天野。

(私は確か…解放軍リベリオンの男に襲われて…。)

うつろうつろとそんな事を考えていると

(…あつたかい?)

誰かが拘束を解いて自分をおぶつて背負っている、そう感じた天野。

(いろはじやない…いつたい誰が?)

恐る恐る目を開けるとそこにいたのはボロボロの姿で自分を背負う日向の姿だった。

(…どうして?)

天野は思う、どうしてそんなにまで自分を助けてくれたのか。自分と日向は少し前に

会い、互いに少し戦つただけの存在だというのに。
(どうして…私にやさしくするの?)

あの後、ボロボロの体のままなんとか入ってきた出入り口に辿り着いた。外が何やら騒がしい音がするのを感じた、まさかあの男の仲間と思い警戒したが外から出てきたのは見覚えのある人物だった。

「日向くん！ どうしてここに！ しかもボロボロじやない、どうしたの！」
「やあ、いろはさん…奇遇ですね。」

天野のお付きのいろはさんだつた。彼女をよく見れば、鉈と包丁を組み合わせたような武器を手にしていた。恐らくあれが彼女の固有靈装デバイスなのだろう。
(いろはさんがまさかのバトルメイドだつたとは…こりや驚きだ。)

「…今失礼な事考えてませんでした？」

「イイエ、メツソウモゴザイマセン。」

(なぜばれたらし、エスペーかよ。)

「それで…君はどうしてこんな所にいるの？」

「そうだつた。いろはさん、天野を…。」

「え？…ミナ様！」

日向は背負つていた天野をいろはに託す。

「まさか探してたの？ ミナ様を…。」

「いや別に？ 肝試しに入つたこのホテルで『偶然』天野と誘拐犯を見つけて、そのまま犯人に『たまたま』勝つて助けただけですよ。」

「…今はそういう事にしましよう、犯人は？」

「この奥のホールの劇場舞台でグッスリ快眠してます。起こさないでやつてくださいよ、死ぬほど疲れてるようですので。」

「わかりました、あなたは近くの隊員に治療を受けてください。私たちは犯人の確保しますので。」

そう言い、いろはと隊員を複数連れてホテルの奥に入ってきた。近くの隊員が俺を救護車のような場所で簡単な治療を施してくれた。

その少し後に拘束された男がホテルから複数の隊員に連れられ、出てきた。気のせいだろうか、男の顔がボコボコにされていたように見えたが…。

このまま病院に行くのかと思いつやお屋敷で治療をすることでの俺といろはさんが車に乗せられて向かう事になつた、天野は別の車に乗せられて治療を受けてるとのことらしい。

揺られる車の中で日向はある疑問を思い浮かべた。

（…というか、誘拐犯が解放軍リベリオンだつて知つてたのに天野はなんで身内に相談しなかつたんだ？）

そう、何故犯人が分かつていたのに誰にも助けを求めようとしなかったのか。そんな風に考えていると

「…ミナ様の事が気になりますか？」

「え？ あ、まあ…。」

隣に座つていたいろはさんが話しかけてきた。突然話しかけて一瞬言葉が詰まつてしまつたが、日向は天野の事を思い切つて聞いてみる事にした。

「あの…天野つて前からあんな感じなんですか？ 何というか他人を寄せ付けないとか、拒絶してるように思うんですよ。」

「…いいえ、昔のミナ様は明るく、笑顔を見せる方でした。ですが…。」

いろはさんの話によればミナは俺の学校に来る前、伐刀者ブレイザの教育を専門とする名門中学校に通つていた。天野は持ち前の才能を活かしてジュニア大会を優勝し、すぐさま学校一の伐刀者ブレイザとなつた。

しかしそれを快く思わない人間がいた、天野を憎み妬む者が。

天野はそこから壮絶な嫌がらせやイジメを受けた。友人に助けを求めた、だが誰も助けてくれない、ひどい話ではその友人もイジメに加わった事もあるらしい。本来生徒を守る教師も見て見ぬフリをする者もいたという。その時の天野は一人でその悩みを家族にも話さないで抱え込んでいたようで、本人曰く迷惑をかけたくなかつたようだ。

はじめにその異変に気付いたのはお付きのいろはだつたという。そこからイジメが発覚し、学校に何故イジメを受けていたのに何の対処をしなかつたのかと問うと『学園内でイジメが起きてたりしたなんて事が世間に出来れば名門の名に傷がつく。』

そう答えたそうだ。

「それを聞いてそこからは先は頭に血が昇つて、その…少々暴れてしまいまして…。」

(…それもそうだろうな。)

『力』が当たり前に存在するこの世界にだつて必ず存在する『優劣』。なら『優』を持つ者が幸せになるか? そうとも限らない、天野のように『優』を持っていたとしても、それを妬む人間が存在すればそこから起ころのは醜いイジメだ。

その後はいろはさんが暴れるだけ暴れてすぐうちの学校に転校をしたことだ。しかし天野にとつては前の学校での出来事が原因で心を閉ざしてしまい、笑顔も浮かべなくなつてしまつた。

「あの…お願いがあるんです。日向くんが…ミナ様の支えになつてあげてくれませんか？」

「え…。」

(俺が? 天野を?)

「ミナ様にとつて日向くんが転校して初めての『友達』でもあるし同じ伐刀者なんですよ
ブレイザー

?』

「ですけど…俺はあいつの事を何も知りませんよ？そんないきなり…。」

「誰だって最初はそういうものです、男の子なんですからクヨクヨしない！」

（そんな無茶苦茶な…。）

車に乗つて数十分たつた頃、ようやく天野の家についた。なんとなく予想はしてはいたがこんなにも立派なお屋敷だつたとは…。俺は別館で専属医師の人に傷を診察をしてもらい、IPSカプセルで傷を治した。

医者が言うには体の全身が打撲し、肋骨にひびが入つていたらしい、あの時は刀を持つていた方の腕を鎖から抜け出して咄嗟にガードしたのがよかつたらしい。もしあれが直撃していたらひび所の話ではなかつただろう。

天野も俺と同様治療を受け、今は近くの部屋のベッドで休んでいるとの事だ。

そして俺は今、天野のいる部屋のドアの前で悩んでいた。

（はあ…、どうしよう…。）

治療が終わるな否やいろはさんが俺を連れ出して天野の部屋に連れてきて、『がんばれ！』なんて声を掛けて行つてしまつた。

（そもそも俺は部外者なんだぞ…、そんな奴から過去の事を言われたりなんかしたら傷

を抉りだされてるようなもんだつていうのに……。)

そんな事を考えてもうかれこれ10分経過していた、一向に進展する気配はない。

(…やつぱり何も言わないほうがあいつにとつてもいいのかもしれない、帰ろう……。)

そう結論づけ、踵を返して離れようとしたが

ガチャ

(え?)

「…誰?」

扉が開き、中から出てきたのは天野だつた。日向も思わずその方向に目を向けて天野とバツチし目が合つてしまつた。

(タイミング良すぎだろ……、行けつてか?)

「…。」

天野は何も言わずにちらをじつと見つめている、対して俺もその場を動けずにいる。

(ええ……、どうしようこの空気……。)

悶々と悩ませていると

「…入つて。」

(マジで?)

天野が俺を部屋に入るよう呼びかけた。

「…。」

「…。」

(き、氣まずい！相変わらずの重苦しい空氣だなおい！)

あの後天野に言われるがまま部屋には入つたが何も言わない天野に対して俺も何も言えない状態が続いてる。

(どうするか、本題に入る前に少し気の利いた言葉でも送るか？だとするとイカした言葉を飛ばしてみるか。)

そう思い、すっと椅子から立つ、一瞬天野がビクッと反応した。

(馬鹿か俺は！何でここでネタに走つちまうんだ！そんなことをしてる場合じやねえつてのに…。とは言え立つてしまつたからには何かを言わなければ…。)

一瞬間を空けて日向は、無駄にいい声で

「今日は…風が騒がしいな…。」

(あれ？なんか…死にたくなつてきた。)

突然立ち上がり急にそんなことを言った日向に天野はポカーンとしていた。

(何だろう…恥ずかしいとかそういうのじやなくてこう…死にたい。天野だつて『お前は何を言つているんだ？』みたいな感じでこつちを見てると思う。哀れみの目で見てる

よきつと、普段死ぬのが怖いのにこういう時に限つて死にたいなんて思うほどなんだから…。)

そう思いチラツと天野の方を見ると顔を赤くしてプルプルして震えていた。

(おお!?これはまさか良かつたのか!?)

一瞬精神崩壊を起こしかけたが何とかこの重苦しい空氣を変えることができた。

「…何だよ、ちゃんと笑えるじゃねえか。」

「え…今私笑つてた?」

「ああ。」

おそらくこれが天野との初めてのまともな会話をしたような気がする。保健室での時も空気が重苦しいかったし。

「こうやつて他人と会話するのは久しぶりだな…。」

「…いろはさんから聞いたよ、前の中学での事。」

「…そなんだ。」

少しの間、沈黙が続いた。次に口を開いたのは

「ねえ…あなたはなんで私を助けたの?」

「いろはさんから聞いたろ?俺はたまたま…。」

「見捨てることだつてできたはずだよ?」

「…。」

確かにそうだ、俺はあの時何回も逃げるチャンスがあった、けど『友達』を見捨てるなんざ、出来るわけないだろ。』

「ツ！」

それを聞いた天野はボロボロと涙をこぼす。

「うお!? な、泣いてるのか!?」

突然泣き出した天野に慌てふためく日向、何か間違った事をしてしまったのかと焦るが

「うん…ありがとう…ありがとう。」

泣きながら笑顔でそう答える天野。これは歓喜の涙、天野は嬉しくて泣いていたの

だった。

やがて時間は過ぎ、彼らは高校へと入学した…。

二人の男女が桜が舞う道を歩いていた。

「正直言つてあれはやりすぎだと思うよ。試験官真っ黒焦げだつたじやない。」

「本当に悪かったと思ってるよ。だけど俺に文句を言うのはお門違いだぜ、試験官が『君

の本気を見せてもらおう！』なんて言うからこつちも手加減なしでやつちまつたよ。』『幻想形態』でやつてなかつたら相手死んでたよ？何が『黒だ…真っ黒オ!!』よ、馬鹿でしょ。』

「それは言わないでくれ：あの時はちよつとテンションが可笑しかつたんだよ…。」
そんな話をした日向と天野の姿がそこにはあつた。彼らは中学を卒業し伐刀者ブレイザーを育成する『破軍学園』へと入学していた。

「天野だつて試験官を矢で針ねずみにしてたじやねえか、お互い様だよ。」
「あ、あれは試験官がいやらしい目つきで見てたから仕方なく…。」

そんな事を話していると…：

いやああああああ!!!

ケダモノおおおおお!!!

どこからか甲高い女性の悲鳴が辺りに響かせた。

「うお!?なんだ!？」

「行つてみよう。」

「え？あ、おい！」

天野は悲鳴が聞こえた寮に駆け足で向い、その後を日向が追うような形で向かつた。

そして二人が見たものは炎のような赤い髪の下着姿の女性と上半身裸の男だつた。

「「なあにこれえ。」」

6話 前編

あの後女性の悲鳴を聞きつけた寮の警備員に痴漢として逮捕された黒鉄一輝、おまけに何故か俺たちまで理事長室に呼ばれるという始末。

「あの理事長、なんで俺たちまで呼び出しをしたんですか？」

「なに、君たちにはこの事件の目撃者だから証言をしてもらいたくてね。」

「いや、もう俺たちが着いたときには事案発生してたしもう一輝先輩のフォローは無理そうですね。」

「一輝先輩、罰金を納めれば社会的抹殺が回避されるんですが、一国の王女となるとこれは国際問題ですよね。つまりは」

「ギルティ有罪ですね。」

「いやだから本当に誤解なんですって!!」

一輝先輩の話によれば下着を見てしまつた事故を、自分も脱いで相殺しようとしたらしい。

「僕としてはファイフティファイフティで紳士的なアイデアだと思ったんですけど…。」「確かにある意味紳士的ではあるな。」

「くま吉くんリスクートとか…さすがの俺も引きますわ。」

「いや変態紳士という意味ではなくて…、まああの時は僕も混乱していたんですよ。」
途中までは己の罪を認めていたのになぜあそこで衣服をキヤストオフしたのか、まさか先輩は脱げば脱ぐほど強くなる伐刀ノーブルアーツ絶技の持ち主だったのか…。

「すぐ）いつすよねAランクと。グラフ見ても全部カンストしてますし。」

「おまけに美人で王女さまとか、まるで漫画のヒロインみたいね。」
そう、一輝がやらかした相手があまりにも悪すぎた。彼女の名前は「ステラ・ヴァーミリオン」

ヨーロッパの小国ヴァーミリオン皇国の中二皇女、留学していくのは知っていたが初日にこれとは、本当にまずい事だ、留学してそういうこんな日本のイメージが悪くなるようなハプニングが起ることは。

「とにかく一輝先輩は謝つてください、じゃないと話になりません。」

そんな事を言つていると理事長室に誰かが入つてきた、噂をすればなんとやら。

「…失礼します。」

件の少女、ステラ・ヴァーミリオンが入室してきた。今度はちゃんと学校指定の制服を着ている。

（まいど思うけど、みんな髪の色がすごいよなあ。）

天野の銀髪もそうだが、この人のは特にすごかつた。まるで炎のような色だ。

その後、一輝先輩がステラさんに謝罪の言葉を送つたが当の本人は激おこぶんぶん丸状態で腹切りを要求した。

「どうわけで先輩、介錯は俺に任せてください。」

「え、ちょっとそこは止めるでしょ普通！」

「安心してくださいよ、ちょうど俺の固有靈装^{デバイス}も空気を読んだのか『誠』が出ましたよ。これで楽に逝けます。」

「そういう問題じやない！」

そんな事を話していると何か妙な視線を感じた、振り返るとステラさんが興味深々に「漢」ゲージを眺めていた。

「すごいわねこれ！これが日本の『カンジ』というやつなの!?」

「え？ああ、そうですね。これは俺の伐刀^{ノーブルアーツ}絶技のおまけみたいなもんすよ。」

「おまけ？それってどういう…？」

「えっと…僕は許されたのかな？」

「そんな訳ないでしようがアツ!!

そう言いながら彼女は己の固有靈装^{デバイス}、《妃龍の罪劍》^{レーヴァティン}を発現させ、理事長室で暴れまわった。

結局あの後、ステラさんと一輝先輩とで果し合いをしら勝つた方が部屋のルールが決められるという話になつたのだが

「まあ、常識的に考えたら勝ち負けなんて目に見えてるものね。」

「そりやそうでしょ、AランクとFランクとじや実力差がありすぎるからね。」

俺と天野は第三訓練場ノーブルアーツにて観客席で話している。

「だけど一輝先輩の伐刀絶技は俺のみたいにある意味、初見殺しだから勝負はどう転ぶかわからないんだよね。」

「それもそうね…。あの人の最強が勝つか、それともステラさんの最強が勝つか、見ものね。」

「ああ、そうだな。」

「…もしステラさんと日向が戦つたらどっちが勝つかしら?」

「え? あーそうだな、出される物にもよるなあ。『閃』か『狂』か『誠』ならいけなくもないだろうけど…」

そんな事を話していると対戦相手であるステラさんが入場してきた。

「お、どうやら始まるみたいだな。」

「さて、あの王女さま相手に先輩はどう立ち向かうのか。楽しみだな。」

『Let □ s G o A h e a d !』

試合のファンファーレが鳴り、戦いが始まった。

そこから先は凄まじかつた、ステラさんと一輝の戦いは。最初は一輝先輩がステラさんの攻撃から逃げるように戦っていたが、途中から一輝先輩が持ち前の観察眼、ブレイドスティール模倣剣術でステラさんの剣術を見破り技術で圧倒した。

しかしステラさんもAランクの名に恥じない戦いをした。持ち前の能力と膨大な魔力を用いて放つ伐刀絶技、『天壌焼き焦がす竜王の炎』を放つ。それは幻想形態の状態であつても、あり得ないほどの魔力と熱量をまとつたその場に在るもの全てを焼き尽くす炎の剣を、たつた一人の人間に放つた。しかし一輝は伐刀絶技ノーブルアーツ、『一刀修羅』を発動、己の力を出し切り、ステラさんに勝利した。

「いや、昨日はすごい試合でしたね。一輝先輩も凄かつたんですけどステラさんもかつこよかつたですよ。」

「ありがとう、そう言つてくれると嬉しいわ。」

今俺たちは入学式を終え、大量の血を吐いた倒れたユリ先生（もといユリちゃん）を一輝先輩とステラさんと一緒に渡り廊下を歩いていた。途中一輝先輩が同じ一年の日下部加賀美という少女が先輩の腕に抱き付いて「ファンなんです！」とか「取材させてください！」とかそんなことがあった。べ、別に羨ましいとか思つてませんから！

そんなやり取りをしていると

「ようやく見つけました。」

（ん？）

背後から声が聞こえ、振り返ると柱にもたれかかった少女がいた。彼女の髪は天野と同様に白かつたが彼女のはまるで雪の色のような白さだった。一輝先輩はその少女を見て呆けていた。

そして少女はすたすたと先輩に近寄り

「お久ぶりです、お兄様。」

「珠零！見違えたよ！

（え、まさかの兄妹？）

一度、先輩には兄弟がいるという話は聞いたことがあった。しかしながら

（兄妹だと言うのに…遺伝が仕事してねえ…。）

毎度の事だがこの世界の人間は日本人なのに目が青かつたり紫だつたり赤だつたりなど、もはや突然変異レベルともいえる事だ。

兄妹との再会を邪魔しないよう遠くで見守つていると

「は？」

自然とそんな声が出てしまつた。

なぜなら妹が実の兄に対して熱いディープキスを公衆の面前で行つたのだから。あまりの出来事に日向は（。。。）ポカーンとしていた。その後、珠零と一輝のイチャイチャを見せつけられたステラは大激怒。一輝から珠零を引き離し論するが、兄妹とのコミュニケーション（キス）を邪魔された事により珠零も激怒、そのあとステラの下僕宣言に状況はますます大混乱。

日下部もテンションMAXで『俺の腕の中でMOGAKE!!鬼畜なルームメイトと奴隸な皇女の淫らな密室72時間!』という記事を出そうとする始末、コレモウワケワカンネエナ。

そしてどうどう二人が固有靈装^{デバイス}を出し、乱闘になるかと思いきや

「まつてください。」

突如としてその争いに仲裁に入る天野、ステラはともかく何者か知らない人物に邪魔された珠零はイライラしながら

「なんのようですか、私は今からこの女を始末します。邪魔をするならあなたも…。」

「珠零さん、あなたは間違っています。」

「間違っている？私が？」

突然そんな事を言い出す天野に日向は嫌な予感を覚えた。

「ええ、実は一輝さんは…。」

そういうながら俺に指をさす

「この男に【ピ】や【ピ】なことや【ピ】をされていたのです！」

その瞬間、先ほどのキス以上に空気が凍つた。

(な、何を言っているんだお前はアアアアアアアア！?)

突然天野の口からあるはずもない先輩と俺の腐関係をねつ造しやがったのだ。

「な、何をいつているんだ天野さん！」

もちろんそんな事に巻き込まれた一輝もだまつてはいられず天野に猛抗議した。

「さすがは一輝先輩、受けでも攻めでも女でも男でも行けるのですね。伊達に『両刀修羅』とは呼ばれていませんね。」

「

「天野！頼むから黙ってくれ！」

早くこいつを黙らせなければ本当に取り返しのつかないことになる、しかしここで背

後から背筋が寒くなるような冷氣と殺氣を感じた。

恐る恐る振り返ると珠雲の周りが凍り付いており、目には光が宿つておらずこちらを笑いながら睨んでいた。

「なるほど…確かにあの女よりこつちのゴミを片さなければなりませんね。これ以上お兄様を穢すような事はさせません…。いつその事去勢してしまいましょうか…。」

「ま、待ってくれ！本当にこれはあいつのでつち上げで…。」

「このまま殺し合いに発展するかと思い気やここで天野がこう言い出した。

「そういう事でしたら…果し合いでケリをつけましょう。」

6話 後編

天野の勝手な俺と一輝先輩のホモ疑惑をでつち上げられ、そのせいで一輝先輩の妹、黒鉄珠零と勝負をすることになつた。しかも俺が負けたら去勢とか…、本当に素晴らしい運がない俺は…。

最初はそんなくだらない事で訓練室を使わせてくれないだろうと淡い希望を持つて、理事長に尋ねたが「かまわん、やれ。」とノリノリの様子で答えた。ちくせう、この脳筋学校め！

そして俺と天野は今、選手控え室にて試合の準備をしていた。

「それで…なんでおまえはあんなことを言つたんだ。」

少しイライラしながら天野に問う日向。

「だつてあのままだと乱闘に発展してたわよ、それに王女様にこれ以上問題を起こされても困るし。」

「俺の事も考えててくれたつていいんじゃないかなあ！！」

天野があのまま乱闘へと発展させないためにとつた行動らしく、とつさに口から出た事だつたらしい。一応あの後、嘘だと周りいた人たち全員にちゃんと説明したらしい。

「大丈夫よ、日向なら勝てるわよ。」

「簡単に言つてくれるよな本当…、相手は多くの優秀な^{ブレイザー}伐刀者を輩出したエリート一家だぜ。」

「私もそのエリートの一人なんだけど…。」

「とはいへ、何が出るかによつて勝敗が決まるしな。」

「そうね…あ、もう時間よ。頑張つてね。」

「ああ…。」

そう言い天野は観客席へと向かい、俺は重苦しい足を引きずるようにステージへと歩く。

「来ましたね。尻尾を巻いて逃げたのかと思いましたよ。」

「…。」

(実際、今すぐ逃げたいんですが。)

内心は逃げ出したい気持ちだがそれを抑え、目の前の珠零と対峙する。しかし逃げたら負けと同じで去勢になる事は確実、それだけは何としても回避しなければ。

「それでは二人とも、幻想形態での形式で試合をする。言つても無駄だと思うが、あまり物は壊すなよ。」

理事長がそう言い、俺と珠秉は己の固有靈装^{デバイス}を召喚する。

「散らせ、《月華》」

「飛沫け、《宵時雨》」

日向は刀の《月華》を、珠秉は小太刀型の《宵時雨》を呼び出しつでも戦える状態へとなつた。日向はチラツと後ろの「漢」ゲージを見ると『誠』の文字が浮かんでいた。

(まあ無難だな…、とりあえずこれでどこまでやれるかだ。もしやばかつたら、最悪『アレ』をやることになるな。正直やりたくないなあ…、運ゲー要素になるからな。)

「…あなたのそれが何かはわかりませんが容赦しません、お兄様の貞操を守る為に死んでください！」

(やだこの子殺意高すぎ。)

観客席でその試合を見守る天野達、ステラが一輝に試合について聞いた。

「ねえイッキ、この試合どっちが勝つかしら？」

「うーん、正直わからないな…。珠秉は魔力制御が得意で水を操る能力を持つている。対して日向君は素早い動きで相手を翻弄して戦うトリッキーなタイプな戦法をするんだけど…。」

一輝は二人の戦い方を分析していると神宮寺が話しかける。

「なんだイツキ、お前は何も知らないのか？」

「え、何がです？」

「…どうやら何も知らないようだな。まあいい、お前はこの試合を見て驚くことになるだろうな。」

と、おもろしろそうに笑う神宮寺。一輝は何がどういうことなのかさっぱりわからなかつた。

『Let's Go Ahead!!』

試合が始まり先に仕掛けたのは日向、突きの構えをとつたまま珠零へと突っ込む。それに対し珠零は空中の水分を集め凍らせ、つららを放ち迎え撃つ。

『疾空殺』！」

月華から三日月状の衝撃波を放ち、つららを弾き落としていく。そのままどんどん近づき、

『狼牙』！」

肩口から体当たりするように放つ突きを珠零はこれを受け流す。しかし日向はとまらず珠零の小太刀を押し返しそのまま連撃へと発展させる。

『狼牙・直式』！」

「！」

先ほどよりも早く、鋭い突きが珠雲にヒット、さらに繋げる。

「《真・狼牙》!!」

そのまま目にも止まぬ速さで連續の突きを放つ。
が、しかし

「…これは。」

(手ごたえがない！)

彼が斬っていたのは珠雲が水と魔力を組み合わせて作り出した分身、水分身が凍り月華とともに凍り付いてしまった。そして上から珠雲が小太刀で日向目掛けて突き刺そ
うとしていた。

(やらせるか！)

「《疾空殺》！」

氷の中から衝撃波を放ち、氷を碎きそのまま上から襲い来る珠雲に対し迎撃をする。

「《虚空殺》!!」

鋭い突きを再び放つが

「チツ！」

(これも分身かよ、まったく見分けがつかん！)

今斬つた物も分身でありそのまま弾け、氷の破片が日向に降りかかるがバツクステップでこれを回避する。いつの間にか前いた珠零と距離を置き、今の状況を考える。

(ダメだこりや、まつたくどれが本物かわからんねえ。それに『誠』じやあ属性持ちに対して有効的ともいえない。ジリ貧だなこりや。)

日向の考える通り、『誠』の特性は剣術系の能力には強いが相手が属性持ちとなるとうまく立ち回れい状態となる。

(…『アレ』をやるしかないよな…。まだあいつが本気を出してない間にやらないと先にやられちまうからな…。)

悩んだ末、日向は『ある能力』を発動させた。

観客席で見守る一輝、今の状況を整理する。

(珠零に翻弄されているな…、彼の剣術は基本一人の人間にのみ効果を出すのだけれどもこれは厳しいかもしれないな…。)

そんな事を考えていると

(ん? 彼は何を…。)

日向は己の背中に浮かぶ『誠』の文字を少し見た後、

『『誠』の文字を真つ二つに叩き斬った』のだ。

「なッ！」

一輝は日向が突然自分の伐刀絶技を斬るような行動に驚いた。なぜあんな事を、と思つていると隣に座つている天野がボソッと呟いたのを聞き取つた。

「どうやら賭けにでるみたいね。」

「賭け…？」

「見ていればわかります。」

（何を？）

珠零は相手がいきなり自分の伐刀絶技を斬るような行動に理解ができなかつた、彼は一体何をしようとしているのか。そう考えていると日向がこちらに振り向き、刀を構えこちらに再び突撃する。

「うおおおお!!」

珠零は襲いくる日向に対し、先程同様氷柱を飛ばし牽制する。日向はそれを衝撃波で相殺すると思われたが氷柱を避け、そのまま珠零へと斬りかかる。珠零はそれをガード

ドするがここである違和感を覚えた。

(これは…弱くなっている?)

先程日向が放つた『狼牙』よりも弱く感じる攻撃、彼は基本の剣術で斬りかかってくるだけ。それを押しのけ水分身を出し、複数で斬りかかると日向は逃げるようにバツクステップでステージ端まで逃げる。

(まだなのか?さすがに今までばれたと思うが…。)

日向は刀を構えながら『手の平』に刻まれている書かれている『画数』に目を向ける。彼が先程行つたのは『書き直し』、自分の「漢」ゲージを斬り捨てるによつてランダムで違う「漢」ゲージを出すことができるのだが

(その間は文字の恩恵がない状態で戦うことになつちまう…、それに漢字だつて選べねえから何が出るかもわからぬ。漢字が出る前に倒されるかもしれないからこれだけはあまり使いたくなかったんだが。)

もう既に10画以上出ているので『月』は出ないことが確定している、もしくは『鳳』のような長い漢字かもしれない。それまでに何としても時間を稼がなければ、そう考えていると珠零の周りから冷たい空気が流れ始めた。

(寒!?な、なんだ?)

突然の事に戸惑つていると、

「凍てつけ！『凍土平原』！」

珠零の周りを中心にしてステージが凍り始めた。

(いや、これはヤバイな…。)

恐らく相手も日向の弱体化に気付いたのか本気で潰しに掛かろうとしている。せめて画数が溜まるまでなんとしても逃げなければ。

「『水牢弾』！」

「チツ！」

珠零は日向に向けて直径30cmほどの水球を飛ばす、文字の恩恵がない以上迎撃は難しい。体に魔力を流しこみ身体能力を上げ、氷の床を滑らないように避けていく。(まだなのか!?)

再び手の平を見るが画数はもう18画まで刻まれていた。あともう少し、そう考えていると

「?」

(あ、足が！)

日向の足が凍り付いていた、この状態では身動きが取れない。抜け出そうにも魔力で身体能力を上げても抜け出せそうにない。さらに自分の周りの景色が暗くなつたようを感じた、いや暗くなつたのではなく頭上に何かがある。そう思い顔を上に向けると

(嘘だろ!?)

巨大な氷塊が日向の頭上にあつたのだ、このままだと押しつぶされて負けになる。

「これで、終わりです。」

腕をおろし、そのまま日向を押しつぶそうと落ちてくる氷塊。

(はやく！はやく！)

祈るように手の平を見つめる、そして画数は19となつた瞬間

ドカアアアアン!!!

日向は氷塊に押しつぶされた。

「…イツキの妹が勝つたわね。」

ステラがそう答えた、彼は一体何をしようとしていたのかそんな疑問が残る一輝。

救助に向かおうと席から立ち上がるうとすると

「いいえ、まだです。」

「え？」

突然天野がそんなことを言い出した、日向は氷塊に押しつぶされ負けたはずなのに

何故？そんなことを言おうとすると

ドカアアアアン!!!

先程日向を潰した氷塊が『黒い爆炎』をあげながら碎けた。

「…間一髪だつたな。」

(あつぶねええええ!!ギリギリ！ほんとギリギリだつた！)

日向の背中には先程の『誠』の文字ではなく、『爆』の文字が浮かんでいた。
「驚きました…、今のを切り抜けるなんてね…。」

そう言い、再び小太刀を構える珠零。

「そうだな…。」

日向も同様に刀を構える、そのまま駆け出しました珠零に斬りかかる日向。

「なら…これはどうですか？」

空中に大量の水を集め、水圧カッターのように鋭くした数十の水の刃が日向目掛け
て飛んでくるが、

「《影踏》！」

「消えた！」

水の刃が日向に当たる瞬間、姿がぶれたかと思うとその場から消えたのだ。慌てて辺りを見回すが誰もいない、しかし背後から

「黒だ…真っ黒オ!!」

「ガツ!?

声が聞こえた瞬間、強烈な爆発と熱が珠雲を襲う。そのままステージ端にまで吹つ飛ばされたがすぐさま空中で態勢を整え着地する。

(いつの間に…それに戦い方も根本的に変わっている。)

『誠』の文字は華やかで真っ直ぐな剣筋だったが『爆』は荒々しく、暴力的な戦いをしてくる。

(それにある文字…色が付いている。)

『爆』の部首に色がつき始めていた、最初もそうだがあれは一体何なのか、そう考える珠雲。

『炎舞 二の型』!

珠雲に向けて火の輪を飛ばしてくる日向、それを迎撃しようと『水牢弾』で落とす。しかし、お互いの攻撃が空中でぶつかった瞬間、日向の火の輪が爆発し、ステージ全体が黒い煙に包まれた。

「ツ！ 目くらましですか！」

珠零はいつ襲いくるかわからない日向に警戒し水分身を2体出し、奇襲に備える。すると煙の向こうからさつきのよりも小さい火の輪が珠零に向けて飛んでくる、それを珠零は斬ろうとすると

「ツ！ 目が！」

斬つた瞬間、強烈な閃光を放ち思わず目をつぶってしまった。

「そこかあ！！」

そして煙の向こうから飛び出した日向が珠零に斬り込む。

「オラオラオラオラア！！」

上段、中段、下段へと凄まじいスピードで珠零を斬つていく

（このまま繋げる！）

「オラア！」

「グツ？」

そのまま爆炎を上げながら珠零を斬り上げ、空中にへと吹き飛ばす。そして居合で構え、落ちてくる珠零に

「《爆刃一掃》！」

強烈な爆発を交えた居合斬りを放ち、そのまま珠零は吹き飛ばされる。

（やつたか？）

思わず心の中でフラグ発言してしまった、そのせいかフラフラと珠雲が立ち上がり
る。

「負けたらダメ…、お兄様が見てるのに…。」

そう呟きながらこちらに敵意を向ける、まだ彼女の目には戦意は失われていない。
そして周りを凍らせていた《凍土平原》から煙が噴き出す。

(これは…霧か?)

「ツ！またか！」
《凍土平原》の氷を一瞬にして気化させ、辺り一面を濃い霧を覆う。

前の時と同じく両足が凍り付いて身動きが取れなくなる、それを割ろうとするが
(足だけじゃない!? 体も!)

足だけではなく上半身も徐々に凍りだし、体が不自由になっていく。そして四方か
ら珠雲の分身と、高圧の水を纏わせた《緋水刃》で斬りかかる。

「これでおしまいです！」

その瞬間、珠雲は自分の勝ちを確信していたが、

「ああ、終わりだな。」

「?」

『爆』の文字が輝く、日向は刀を地面に刺し

「燃え尽きろ…

『爆轟炎陣』 ツ!!」

日向を中心に巨大な火柱が燃え上がる、その勢いはドームの天井をも突き破り、珠
雲の分身もろとも炎の中に飲まれていった。

やがて火柱が収まると『凍土平原』も溶けきり、珠雲も気絶したのか倒れ込んでい
た。黒い煙を上げる刀を持ちながらこう言い放つた。
「灰にならずに済んでよかつたな…。」

（これ後処理大変そうだな…。）

7 話

あの試合の後理事長が、またやらかしたか：みたいな感じで見ながら訓練所の天井に空いた穴を能力で直していた。しゃあない、『爆』はただでさえ加減が難しいんだから。ちなみに珠零は気絶して保健室に運ばれ、今は一輝先輩と天野が見ている。観客席で飲み物を飲んでいるとステラさんが俺に話しかけてきた。

「ねえ…最初の時もそうなんだけどヒナタの伐刀^{ノーブルアーツ}絶技つてなんなの？イツキが文字が変わった瞬間、動きが全く別の別物に変わったって驚いてたけど。」

「ああ～…。」

正直どうしよう、俺の伐刀^{ノーブルアーツ}絶技のタネを明かすのってあんまり良くない気がする…とりあえず誤魔化すか。

「それより早く一輝先輩のどこに行きません？また熱いキスをかましてるかもしませんよ？」

「なっ！た、確かにありえるわね早いどこ行きましょ！」

そう言い、駆け足で向かうステラさん、俺もそれについていく。

保健室に入ると一輝先輩が起きていた珠零と話しているのが見えた天野は少し離れ

たとこでその様子を見てる、またやらかさないように見張つてはいるのだろう。俺が部屋に入つた時、まるで親の仇でも見るかのように珠零は俺を睨んでくる。まるで俺が悪者みたいなんだが…。

「…あなたがお兄様を汚していなのはわかりました。けど！私はあなたのことを認めませんから！」

まるで結婚相手のお父さんが「娘はやらん！」のような感じで言い張る珠零、ちゃんと説明したんだよな？

数日後、一輝先輩から映画の誘いを受け天野と俺は待ち合わせの場所にいた。しかし珠零も来るという、あれの後では少々気まずいがちよつかいを出さなければ穩便に済むだろう。少しして一輝先輩とステラさんがやつてきた。一輝先輩はシャツにジーンズと楽な恰好でステラさんは白いブラウスの上に明るいカーデガンというオシャレ全開の恰好だつた。しかしこうやつて二人が並んで歩く姿はまさしくカッフルだ。

別に？非リア充の方が生きやすいんですからなんら問題もありませんよ？（震え声

そんな事を考えているとようやく珠零がやってきた。珠零は小柄な体格を生かしたゴシッククロリータの服で、よく見れば美しい化粧が施されていて周りの人を魅了するような『女性』に仕上がつていた。現に先程まで『珠零に見とれない』と言つていた一輝

先輩が即墮ち二コマ並みのスピードでデレデレしていた、いくらなんでもチヨロすぎますよ…。

後ろには長身の人物がこちらに向かつて走つてくるのが見えた、そういうえばメールで珠零のルームメイトの『有栖院』という人が来るらしくその人がメイクを施してくれたらしい。本人曰く『年上のお姉さん』のような人物らしい。そしてやつてきたのは

女性の立ち振る舞いをした『男性』だった。

ステラさんと一輝先輩は茫然としていたが俺と天野は有栖院から何か妙な雰囲気を感じた。

(あれ?なんかこの感覚:前にあつた気が…。)

(身に覚えがあるような気がするけど…なにかしら?)

違和感の正体を考察していると突然俺の手を握る有栖院。

「うふふ、あなたが日向くんね。詳しい話は珠零から聞いているわ。」

「は、はあ。」

「もしかしたら私たち、友達以上に仲良くなれるかも♪」

「」

：どうやら珠零は俺を男色家に染めたいらしい。そんなにこの前の勝負が負けたのに悔しかつたのか！

学園の近くに全国展開している大型のショッピングモールで映画が始まるまでの間、フードコートでスイーツや軽食を食べて時間を潰していた。途中、一輝先輩が珠零のほっぺについたクリームを指で拭それを舐めた。それを見たステラさんが自分の口の周りにシェーピングクリームのように塗りたくり、同じような事をしてもらおうとしていたが先輩はその意図に気づかず店員さんにタオルをもらいに行つた。

俺も天野にちよつと期待の眼差しを向けるが使い捨てのおしごりを投げられた、ちくしょう。

「私がやつてあげてもいいわよ♪」

居酒屋のおっさんの如く、物凄いスピードで顔を拭いた日向だつた。

因みにどんな映画を見るつもりだったのか聞いたところ、『私は妹に恋をした＊R15』というヨスガ○ソラ的な映画を見るつもりだつたらしい、絶対反省してないだろこいつ。

もちろんそれに抗議するステラさん。彼女が提案したのは『砂漠の王女カルナ』というアニメ映画を申し入れたが却下された。その間をとつて有栖が『男たちの失楽園＊R

「15」という性別の中間をとるような映画を申し入れたが二人はこれを全力で却下した。一輝先輩が天野と俺に何かみたい映画があるかと聞かれ、こう答えた。

『戦え！企業戦士アクアビットマン！』とかどうすか。』

『MAXなんかいかがでしようか？』

「うん、どつちも世紀末だから却下！」

解せぬ。というか天野の口からそんな言葉ができるとは思いもしなかった…。

結局残っている映画が『ガンジー 怒りの解脱』というコ○ンドーとラン○ーを組み合わせたカオス極まりない映画を見ることになった。俺のと大差ないとと思うんですけど…。

映画が始まるまでにまだ少し時間があつたので俺のある用事を済ませるべく一度一輝先輩たちから離れ、書店へと向かつた。俺がここに来たのはある漫画を買いたかつたからだ。

「お！よかつた、まだ残つてた。」

俺が今手に取ろうとしているのは『世紀末に愛されて』という漫画だ。内容としてはT○LOVEるのリトみたいな主人公が女体化した北斗勢とのバトルラブコメディだ。今はターバンのガキがある秘密結社のボスで己のクローンを大量生産し、世界を支配し

ようとするがそれを止めるべく立ち向かう話の最中だ。

これも力オス極まりないがいち○味並みに売れている、そのせいでどの書店にも最新刊が品切れ状態だつた。映画が始まる前に買おうと思い手に取るが、その左端をつかむ手を見た。左を見ると長い髪を後ろで纏めた男性がいた。試しに少し力を入れて取ろうとすると相手も力を込め、渡さんとしている。

顔を見合わせこれをお互い譲らんとしていて膠着状態となつてしまつた。どうしたものか、一瞬脳裏に幻想形態の月華で斬つて奪い取るという少々危ない考えが過ぎつたが本のために人生を棒に振るうのはあまりにも馬鹿だ、ならばやる事は一つ。

「ジャンケンで決めません?」

互いの声がハモつた。どうやら相手も同じことを考えたようだ、本を一度もとあつた場所に戻し互いに拳を出す。

「ジャンケンケーン!」

「ババババババ!!!」

「おいそこの二人!死にたくないからおとなしくし!」「グー!!」「ゴハア!?」

突如大きな音が響いたと思つたら本棚に置いていた新刊が紙屑と化していた、音のした方向へと顔を向けると銃を持った男がいた。男が何やら叫んでいたがそんなの知つたこつちやない、気がついたら隣の人と同時にパンチを顔に叩き込んでいた。

理事長から連絡が入つてようやく状況が理解できた、どうやら俺たちのいるショツピングモールで立てこもり事件が起きたらしい。しかも相手はまた解放軍リベリオンとの事だ。

「またかよ…。」

『ん？ そういうえば日向は昔…。』

「ええ、それより固有靈装デバイスの使用許可はどうですか？」

『ああ、それならもう既に申請した。黒鉄達と一ノ瀬にも伝えた。』

「え、一ノ瀬？」

「あ、俺の事です。」

先ほど俺と本の取り合いをしていた少年も同じく破軍学園の生徒だつたらしい。名前は一ノ瀬幸村、Bランクの伐刀者ブレイザだ。

「勘弁してくださいよね…せつかくの休日が台無しですよ。」

「全くだな。」

そんな事を愚痴りながら俺たちは理事長の情報を頼りに、人質が集められている中央ホールへと向かう事にした。

日向と一ノ瀬は近くの柱の陰で周囲の状況を探る。数十人の一般人が中央に集めら

れ、それを見張る銃を持つたテロリストが数名いた。人質の中にはステラさんや珠秉、天野もその中にいた。

(毎度思うがお前はよく拐われるよな…。)

苦々しい思い出に浸りながらこの状況をどう対処するかを考える。下手に行動を起こしたら周りのテロリストが人質を蜂の巣にするだろう、流石に一人で全部を対処は出来ない。だが幸いにも天野達が伐刀者ブレイザーである事はバレてない。さて、どうしたもんかと考えていると

「お母さんをイジメるなあーー!!」

「!?」

テロリストが少年の母親に対し暴行を加えていたところ、少年がそれを庇おうと手に持っていたアイスを男に投げつけていた。

「このクソガキがあーー!!

それに激怒した男が自分の腰ほどもない少年に容赦ない蹴りを放つ。

「おい！人質を殺すなってビショウさんが言つてたろ！」

「うるせえ！このガキが俺の顔にアイスを投げつけやがったんだ！それにたかが一人死んだくらい大したことじやねえよ！」

男の仲間が止めようとするが頭に血が上っているのか話を聞こうとしない。一人の

女性が飛び出し、少年を庇うように抱きしめる、先ほどの少年の母親らしい。

「ごめんなさいごめんなさい！まだ子供なんですよ！どうか……」

「だめだね！豚の分際で来る《新世界》の《名誉市民》である俺様を穢した罪！死んで償えやア！！」

(やべえ!!)

男が持つアサルトライフルが火を噴き、銃弾の嵐が親子を襲おうとする。日向はさすがにまずいと思い、月華を出そうとしたが

鉛の弾頭は親子に到達する事はなく、その間に割り込んだステラの炎が煤すら残さず消し飛ばしたからだ。伐刀者である事がバレてしまつたがあの状況では俺も同じ立場たつたら助けに行くだろう。

「ちッ！。伐刀者が紛れ込んでいやがつたか！」

「撃て！撃ちまくれ！」

兵士達はステラに対し銃弾を放つが攝氏数千度の炎を纏つた《妃竜の羽衣》の前には銃弾は体に到達する前に全て溶けきついていた。ステラはここにいるのは全ての兵士が解放軍の信奉者。ならばこれだけの規模の部隊を動かしているのなら親玉である《使徒》がいるはずだと推理する。本来ならこの状況で姿をさらすのは相手に先手を取られたことになるが状況がそれを許さなかつた。なら仕方ない。

ステラはそう割り切り、兵士達に鋭い眼光で威圧しながら、こう告げた。

「ここにいる人質を代表して、あんた達の親玉と交渉させなさい。」

「な、なに言つてんだ！お前にそんな権利が…。」

「おやおやおや？これはとんでもないお方が紛れ込んでいたもんだ。」

兵士とステラの会話に割り込む声があつた。日向達も声が聞こえた方に視線を向けるとぞろぞろと完全武装をした兵士を十人連れて歩くローブを着た人物がいた。日向はそのローブに見覚えがあつた、廃ホテルの時の男が着ていたものとそっくりだつたのだ。

(間違いねえ、あいつだ。)

男は前に出て、入れ墨も入つた顔を歪ませて笑う。

「ヴァーミリオン皇國の第二皇女じやありませんか。ヒヒヒ」

「そのローブ：解放軍リベリオンの《使徒》が着用する法衣ね、つまりあんたがこのバカ共を仕切る親玉つてことで良いのかしら？」

「ヒヒヒ、まあ今のところはそうですね…。おつと申し遅れました私、ビショウという者です。お見知りおきを、お姫さま」

ビショウは恭しく頭を垂れて名乗り、そして人質を囲む部下たちにステラに向けていたモノとは違う、攻撃的な眼光を向ける。

「ヤキン！てめえ人質に手を出すなつて言つただろうが！お留守番も出来ねえ奴なのか
おまえは！」

「す、すいません！で、でもあのガキが俺にアイスを投げつけてきて…。」

「ああん!?たかがそんあことで：いや。」

（なんだ？男の様子が…。）

日向は先ほどまで部下に怒りをぶつけていたヤキンの態度が豹変したことに違和感
を感じた。そしてビショウは部下の肩をポンと叩く。

「アア、そりや災難だつたなヤキン、同情するぜエ。だからな」

懐から拳銃を取り出し、子供の母親に銃口を向けた。

「何をツ?!」

「罪には罰を 罰には許しを、それが俺のモットーとしてね。この親の躰がなつてな
かつたせいなんで俺が裁いてやるのさ」

トリガーに掛けられたビショウの指に力が籠る。瞬間、ステラは男に向かつて駆け出
していた。この男が本気で引き金を引く事を確信していたから。

「はああああああ!!」

床を蹴り、妃竜の罪劍レーヴァティーンを顕現させビショウ目掛けて斬りかかった。

それを見てビショウが薄ら笑い、拳銃を捨てた。

(誘われた!?)

だがもう遅い、^{デバイス}固有靈装を展開させる猶予なく、渾身の力で振り下ろした妃龍の罪劍レーヴアテインがビショウに迫る。

しかし

「な!?」

「ヒヒ、ざーんねん。速い、それに強い。さすがはAランクということか、だが悲しいかな、『世界の広さと怖さを知らない。』

ビショウはステラが振り下ろした刀身を左手の人差し指と中指で受け止めていた。日向もその光景に驚いた、あれだけのパワーを指だけでなんて抑えられるはずがない、本来あの剣は鉄すらも焼き斬ることが出来る。それなのに男の腕は燃えていない。

どうして? だがそれを考える暇もなく、ビショウの右拳がステラの腹部を打ち抜いた。

「がつ……！」

あまりの衝撃に膝をつく。《妃龍の羽衣》^{エンドレスドレス}の能力越しでもかなりの攻撃力だった。

(おかしい……あいつが固有靈装なしでそんな……)

「? 日向さん、あいつの手に!」

いつたいなぜ? と考えていると一ノ瀬がビショウの手の変化に気づいたようだ、日向

もそれを見ると

「あれは…指輪?」

ビショウが両手中指につけていた指輪、一見するとただのファッショニにしか見えないが、それこそがこの男の固有靈装^{デバイス}『これが俺の固有靈装^{デバイス}、《大法官の指輪》』。その特性は『罪』と『罰』、左の指輪は俺に対するあらゆる危害を『罪』として吸収し、右の指輪はその力を『罰』という魔力に変えて敵に撃ち返すことができる。』

「なるほど…つまりアタシは自分の全力で殴られたわけね」

(厄介だな…)

男の能力を知る限り、あれはカウンタータイプの能力。下手に攻めたら返り討ちにされる、もしあれを突破するなら『吸収出来ないほどのパワーを与える』か『奴が反応出来ないほどの攻撃を手を避けて放つ』この二択だ。

(可能には可能だか:『月』か『誠』が出ないと難しい。『閃』は加減が出来なくて『殺してまう』かもしれない。)

もしそれ以外が出てしまつたらパワーで押し切るしかないが『漢』ゲージが溜められない今、自分の運に任すしかないか、そう考えているとブルルッとポケットに入つている電子生徒手帳が鳴った。こんな時に一体と思いながら画面を開くと一通のメールが

届いていた、中を開くと珠零からだつた。実は映画開始前に全員でメールアドレスの交換を行つていたのだ（珠零はものすごく嫌がつていたが）

メールの内容はこのように書かれていた。

『今決壊はつてる できたらあまのさんと合図だす』：結界？』

そういうえば珠零のランクは全体的な能力値は平均程だが『魔力制御』はぶつちぎりのナンバーワンだつた事を思い出す、もし結界ができたらその隙に置みかけられる。その情報を一ノ瀬に共有させると

「あの…俺に考えがあります。」

「…信じていいんだな？」

「はい」

一ノ瀬の策を聞いたが正直わからない。だがやるしかあるまい、そう思つているとなくやら向こうが騒がしくなつてゐるのに気づく。

一体何かと思つて見ると

ステラさんが下着姿になつていた。

「「は?」」

一ノ瀬も日向も思いもしない展開に思わず変な声が出てしまったが、幸いテロリストたちはステラさんの方に注目していて気づかれなかつた。日向の内心は「『な、なんて奴らだ! なんてうらやまゲフンゲフン! けしからん事を! 許さん!』」

一ノ瀬に関しては鼻血をだらだら流して無意識にサムズアップをしていた。それに気づいた日向が一ノ瀬の肩を叩いて現実へと引き戻す。

おまえが勝利の鍵なんだ、しつかりしてくれ。そうやり取りしていると

『障波水蓮』!!

水使いである黒鉄珠雲が水の防壁を生み出し、解放軍リベリオンと人質を分離した。そしてドーム状の結界の頂点から天野がテロリストに向けて矢の雨を降らす。合図と同時に俺は柱の陰から飛び出した。

「なにイツ! ?」

突然噴出した水の壁、それと同時に降つてくる大量の矢。ビショウはそれを指輪で

ガードする。恐らくステラ以外にも伐刀者が紛れ込んでいたのだと気づいた。

「てめえらー・さつさと人質を殺しちまえ！」

ビショウが兵士にそう指示したが矢の攻撃により、パニック状態となり声が聞こえていないようだ。そんな彼らの様子に舌打ちをするビショウだつたがここで殺氣を感じ取り、そちらに視線を向けると柱から飛び出した男を目にする。

「《烈風斬》!!」

男がそう言いながら刀を振り下ろすと地を這うように飛んでくる斬撃を放ってきた。

「ヘツ！ 馬鹿が！」

ビショウは『^{ジャッジメント}大法官の指輪』でその攻撃を吸収した。

（言われた通りこつちに注意を向けさせたぞ！ 何をするかはわからんが頼んだぞ！）

日向は一ノ瀬にある頼み事をされた。

一ノ瀬が奴を一撃で仕留めるから注意をこちらに向けさせてほしいといつたのだ。そして一ノ瀬も柱の陰から飛び出す、そして日向はすれ違いにこんな声を聴いた。

「勝闘を上げろ、《戦国》」

それと同時に一ノ瀬の体が一瞬虹色に光つたと思つたら彼の両腕が突然燃え出し、そして一ノ瀬が火を振り払うと彼が手にしていたのは『三本の十文字槍』を手にしていた。そしてそのままどんどん走るスピードを上げてビショウへと駆け出していく。

「おもしれえ！返り討ちにしてやる！」

ビショウは近づいてくる日向に『大法官の指輪』でガードできるように準備する。

しかし日向は一ノ瀬の『それ』を見て驚きを隠せなかつた。

(なんであいつが…)

そしてビショウに槍を振るう、ビショウはそれを受け止める

はずだつた。

「《熱血
!!!
》」

「ガハツ！？！」

ビショウにとつて『それ』が予想外だつた。なぜなら今一ノ瀬が行つてゐることは槍を振るわずに、ビショウの腹に『飛び蹴りを喰らわせているのだから。』

大！

「《噴！》」

そう、日向はその武器を知っていた。

彼が持つている槍、それは『戦国BASA』の『真田幸村』の武器だつた、そして彼が今何をしようとするのかも理解ができた。
（まさか…あいつは俺と同じ…！）

『火アアア!!!』

足に力を込め、そのまま蹴り飛ばす。ビショウは店舗の壁やガラスをぶち破りながら遠くへと飛んでいき見えなくなり、奥の方でとてつもない衝撃音が響いた。
（この世界に飛ばされた奴だ！）

「アッパレイ！アッパレエーイ！」

：一ノ瀬は槍をぶんぶん振り回しながらはしゃいでいた。

8
話

いつの間にかいた一輝先輩と有栖院、ステラさんも加わり兵士達を鎮圧していた。
しかし今俺が気になるのは…

「やりましたぞオオ!!某はやりましたぞオオオ!!!」

さつきの謙虚な態度とは打って変わつて無駄に暑苦しくなつた一ノ瀬、なぜこうなつた

とりあえず落ち着かせるべく日向が話しかける。

「お、おい一ノ瀬…」

「日向殿！先ほどは誠に感謝致します!!」

その場で美しい土下座を披露する一ノ瀬、一輝先輩達も人質もその様子にびっくりしている。

「あー…うん、どういたしまして。それよりあの男生きてる?」

「男児たる者！あの程度でやられるような事はないでござる!!」

だめだまつたく話が通じねえ、もはやバーサーカーと化してしまつてゐる。というかさつきの技は完全に『戦国B A S A R A X』のだろうな。

『戦国BASARAX』とは、『戦国BASARA』を基にした2D格闘ゲームで俺の「bスタイル」同様、一撃必殺技が存在するのだ。しかしこのゲームはとにかくパワー・ランスが酷い。

開幕10割なんてもはや日常茶飯事、ダイアグラムも滅茶苦茶で台パンどころの話ではない。あの『AC北斗の拳』と並ぶ悪名高き格闘ゲームである。

戦国陸上：愛されボディ：戦国テニス：うつ、頭が！

日向も前の世界でプレイした経験はあるがあまりいい思い出ではないという事は確かだつた。

（どういかあれだ…もし俺の考えが正しいとするなら、他にもこの世界に同じ様な能力を持つた奴が飛ばされてるんじやないか？）

そして真っ先に思い浮かぶのは白い部屋の男、恐らく奴が主犯なのだろう。
そんな事を考へてみると

「動くなアアア!!」

突然の悲鳴にも似た怒声が人質の中から響いてきた。二人は声に振り返る。そこには銃を持ったスーツの女性が中年女性のこめかみに押し付けていた。

「うげ！人質の中に紛れ込んでいたのかよ！」

「てめえらよくもビショウさんを！」

正直これはまずい、あれだけ銃が密着されていたらこちらも下手に手出しが出来ない。

「一体どうすれば…。」

「射抜け、《朧月》」

突然頭の中に男の声が響いく、そしてどこからか突然日向達の真横から光が通過した。

「あ…」

それは光の矢だつた、矢は人質を取つていたスーツの女性に命中し、その場に倒れ伏した。ミナがやつたのかと思ったが目の前にいるし矢も番えていない。

じやあいつたい誰が。

「フフ、結局手を貸すことになつてしまつたね…。他人の手柄を横取りするような真似はいやだつたんだけね…。」

突如として空間が歪んみ、そこから一人の少年が現れた。彼が手にしているのは天野と同じ弓の^{デバイス}固有靈装だつた。だが少年のはアーチエリーようなタイプのものだつた。（気配が全く感じなかつたぞ…一体何者なんだ？）

天野の方を見ると彼女はなぜかすごく嫌そうな顔をしていた。しかし一輝先輩は少

年が何者かを知つてゐる、何しろ彼は元クラスメイトなのだから。

その後すぐに有栖院から連絡を受けた警察が駆けつけ、解放軍リベリオンを逮捕した。ちなみに、一ノ瀬に蹴り飛ばされたビショウは50メートル先の柱にもたれかかっていて、腕や足が本来曲がるはずもない方向に曲がっていたりしたが、かろうじて息をしていたという。店舗破壊の件は全部ビショウのせいにしておいた。

何も間違つてはいらないな！うん！

ようやく騒動が收まり、各々休憩を取つていた。天野はと/or>いうと、先ほどから日向の背中に隠れていた。

「なあ天野、もしかして知り合いなのか？」

そんな疑問をぶつけ、天野はコクンと頷く。

「…入学当初にいきなりナンパ紛いの事してきて…同じ弓の固有靈装デバイスだから馴れ馴れしく関わつてくるのよ」

「へ、へえ…」

名前は桐原静矢と言うらしい、こんだけ敵意むき出しにしている天野は久しぶりに見

た。よっぽど嫌いなんだろうな…、そう思つてゐるところに桐原先輩が二ヤ二ヤしながら近づいてきた。

（うわキモツ！）

「やあ天野君、今日も君は美しいね」

「…どうも」

天野にしか眼中にないようで日向の事はガン無視しながら話してくる桐原先輩、とうかその恰好風紀乱してません？それとも庵のコスプレですか？

天野の言う通り確かにこの人はキザな発言が多く、ナルシストで鬱陶しい。なぜこんな人がモテるのだろうか、この世界のモテ基準が未だにわからん。

「そうだ、よかつたらこの後一緒にお茶でもどうだい？」

「いいえ結構です」

即答で答える天野。桐原先輩はやれやれといった感じで俺に話しかけてくる。

「ねえ、確か日向君だったかな？」

（なんかめんどくさそうな予感…）

「…何かようですか？」

「君さあ…彼女のお荷物なんじやない？」

突然そんな事を言つてくる桐原先輩、それを聞いた俺は依然と表情を崩さずにいる。

(…薄々気づいてはいたけど、まさかここまでストレートに言つてくるとは)
 「もしかして天野君を脅して無理やりいさせてるんじゃないのかい？だとしたら彼女に迷惑だよ」

早い話、『おまえなんかより、俺の方が天野と一緒にいた方がいい』みたいな事言つて。いやはや、まさかここまでめんどくさい人とは…。その後も延々と自分との才能の格の違いをべらべらとしやべる桐原先輩、言いたいこと言つてそのまま女子のいる方へと立ち去つて行つた。

あの後知つたが、一輝先輩の選抜戦の一回戦の対戦相手が桐原先輩になつたらしい。
 …全力で応援しよう。

俺はあの後、天野と一度別れた。そして今はと

「…」

ド○ールで一ノ瀬と黙つて顔を合わせていた。

あの後、帰ろうとしていた一ノ瀬に『白い部屋の男』と伝えた。すると目を見開いて

驚き、話す場所を移して今に至るわけなのだが…。

(正直何から話したらいいのかわからねえ…)

本当だつたら俺と同じ境遇の人間と会えてよいはずなのだ。しかし同時に彼も被害者、望んでこんな世界に来たわけじゃないだろう。しかし何かしなければせつかく呼び止めた意味がない。意を決して話しかける。

「えつと…あなたはいつから『こちら側』に?」

「…三年前です」

「…俺もです」

一ノ瀬さんは前の世界では一ヶ月も経つてない新入社員だつたらしく、飲み会で酔い潰れたらしくその時に『あの男』とあつたらしい。

「最初は変な夢だなつて思いました、『刺激が欲しくないか?』って言われて思わず頷いちゃつたんですよ…」

その後は俺と同じ様に特典を選ばされ、こつちに飛ばされたらしい。

「それであんたの特典は…」

「…『B A S A R A X』家庭版も含めたキヤラ能力です」

「やつぱりかー」

ということは毛利様や小十郎や祭りボーイなんかもいるのか、はつきり言つてチート

並の強さだ。俺もこの世界に来た経緯と能力について話した。

「…何というかお互い災難だな」

「…本当です」

「そういえばあんたなんで、真田の時あんなにテンション高かつたんだ？」

「実は俺…そのキャラの性格が乗り移っちゃうらしいんですよ…」

本人にその自覚がないらしく、他人に言われて初めて知つたらしい。

二人は会計を済ませ、外に出る。その時一ノ瀬の携帯が鳴る。画面を開くと七星剣舞祭の予選の対戦相手を知らせるメールらしい。

「あれ？一ノ瀬さん、大会に参加するんすか？」

「はい…自分がどこまでやれるかを試したくて」

笑いながらメールを見る一ノ瀬、しかし突如としてその笑顔が凍り付く。

「ど、どうした？」

心配になり声を掛ける、一ノ瀬は黙つたままその対戦相手を見せる。対戦相手はなんと学園第三位の『ランナーズハイ速度中毒』、兎丸恋々だつた。

「あー…」

「ははっ…こつちでもついてないな、俺…」

乾いた笑みを浮かべる一ノ瀬、しかし目には涙を浮かべていた。そうしていると日向の携帯も鳴る。実は日向も予選にトーナメントをしていた、そのメールの中身を見た瞬間

「うわあああああああああ!!!」

日向は携帯を投げ捨てて五体倒地した。それに驚いた一ノ瀬だったが地面に落ちる前に携帯をキヤッチした。何かと思い彼もその内容を見る、そこに書かれていたのは

『日向慶一朗様の選抜戦第一試合の相手は、三年三組・東堂 刀華に決定しました』

和正のデビュー戦の相手は学園一位、《雷切》 東堂 刀華となつた。

9話

「いい加減に観念しろ！」

「だから！俺はやつてないって言つてるだろ！」

俺と一ノ瀬は二人の少女に迫られていた。

どうしてこうなつたのだろうか、あれは10分前のことだった。

俺と一ノ瀬は七星剣舞祭の対戦相手の事が憂鬱で、学園の中庭のベンチに座り、頭を抱えていた。

「…どうしよう」

二人はそう口ずさむ。そもそも、何せ二人の相手は破軍学園序列第1位と3位。能力や戦績を見た感じ、俺たちなんかよりも全然レベルも違うし何より経験の差がある。

相手はこの数年間、ただひたすらに己の一つの能力を研ぎ澄ませ、最強の『力』を持つている。それに対して俺たちは選べないので。どれだけ『個』が強かろうとも、所詮は

付け焼き刃程度の『力』。俺も天野やいろはさんなんかと高校に上がるまでに修行し、多くの『漢』を発見できたものの、相性や使い勝手で戦局が簡単に変わる。この前の珠零の時と同じように能力は運任せ、例えるならジャンケンをするようなもんだ。

「……」の兎丸さんの伐刀絶技《マツハグリード》。もし戦うとしたら豊臣や織田じや絶対無理だ…」

《マツハグリード》、ナックルダスター型の固有靈装^{デバイス}でその能力は動きを止めない限り自分に掛かる速度を蓄積して無限に加速する能力、本気になれば音速並みのスピードを持つパンチでワンパンされてしまう。早い話がガン○ムのスター○イザーだ。

「じゃあ何なら勝てそう？」

「慶次か真田かな…」

どの二人も攻撃判定が広いキヤラばかり、早い話が自分の間合いに持ち込めば勝率はまだある。だがそれはあくまで可能性の話、そううまくいくはずがない。

「はあ…」

結局は俺たちなんてその程度、惨めに先輩達の踏台になる位ならいつその事辞退すべきか。そんな事を考えていると

「あー！ いたわね！！」

「あいつらね！」

近くで女性の声が響く。そしてこちらに二人の人物が近づいてきた、一人は豊かな金髪で豊満なバストにスミレ色の目の少女と、もう一人は赤髪が掛かつた黒髪に銀色の瞳の少女だった。何やら金髪の女性が怒っているよう見える。

「やつと見つけたわよ！」

「えっと…どちら様で？」

二人はその人物に全く見覚えもなく面識もない。なのになぜ彼女達は初対面なのにこんなに怒っているのだろうか？

「黒髪に黒目・間違いないわね！」

「あの～さつきから一体なんの話ををしてらっしやるんですか？」

訳が分からず質問する一ノ瀬、ここで少女がとんでもない発言をする。

「あなたの隣の男が私たちの下着を盗んだのよ！」

「そうよ！」

「…へ？」

女性の話によれば更衣室で着替えを行なおうとしたところ、更衣室にフードと帽子を被った男がおり、下着を盗んでいたらしい。抵抗の際フードが剥がれ、黒髪黒目という

事がわかつたが男はすぐに逃走。

後を追つて着いた先が俺というが…。

「違う！人違いだ！」

「嘘よ！黒髪黒目なんてこの学園であなたくらいなのよ！」

言い忘れていたがこの世界では黒髪黒目はある意味珍しく、むしろ茶髪の方がが多い。仮に黒髪でも目の色が違つたりなど前の世界ではあり得ないことばかりだ。俺と同じ黒髪黒目もある一輝先輩はステラさん珠零とプロ伐刀者ブレイザの試合の観戦に行つてゐるため、学園にはいない。ちなみに一ノ瀬はこつちの世界に来たら茶髪になつていたらしい。

「お前…そんな事をしてたのか？」

「俺はやつてない！」

一ノ瀬に冷たい視線でこちらを見てくる、それでも俺はやつてない。あの後二人から迫られていた、一ノ瀬が一緒に弁明してくれてるがそれでもグルかもしれないとか言い出すのだ。そして今はというと…：

「おい…なぜこうなつた」

「すまん…咄嗟に言つた言葉がこんな事態を引き起こすとは…」

俺と一ノ瀬は選手控え室で試合の準備をしていた。

あの時、一ノ瀬が咄嗟に言つた言葉、じゃあ勝負で決めようじゃないか！と二人に言つたのだ。遊星のおい、デュエルしろよ的な事を言つてもそんなの通じるわけないだろつて思つたけど相手はそれを了承、もし『俺達』が勝てば無実にするという。逆にオレ達が負けたら自分はそのまま豚箱に直行、晴れて社会的死を迎えることができる。

：最近濡れ衣ばつか掛けされられるな…。

そして今回試合を行う際に、神宮寺先生に事情を話した。最初はグラグラと笑つていた。すぐに了承したのだが先生がある提案をしてきた。

「ならどうせやるなら、『タッグマッチ』をしてみてはどうだ？」

『タッグマッチ』

2on2で行われる特殊な試合形式で、どちらかのチームの二人が全滅させた方が勝ちというシンプルな内容だが、簡単そうに見えて実はこれが難しいのだ。

この試合で求められるのは互いの『協調性と能力の理解』、そこらの人と組み合わせても能力の相性が悪かつたら意味がない。良い例としてはステラさんと珠雲とかだろう。あの二人、能力もそうだがすつごい仲が悪いから絶対向いてないと思う。

そして俺達も例外じゃない。能力の理解はできてもお互いそれに合わせられるか、そ

して何よりの問題は何が出るかだ。わからなかつたら話にならない。

「…時間だ」

「はあ…行きたくないな…」

二人は控え室を出て、訓練所へと向かつた。

俺と一ノ瀬がステージへと向かうとまだあの二人組はおらず、神宮寺先生ともう一人、見慣れない人物が立つていた。長い髪を真っ赤な大きなりボンで結び、和服をだらしなく着崩した幼女だつた。こちらに気づいたのかパタパタと駆け寄つて一ノ瀬に話しかける。

「やつほー少年、またあつたねえ」

「…はい」

一ノ瀬の目が死んでいた。なにやらこの人と知り合いらしいが、すぐあとにあの二人組がやつてきて理事長に呼び出されパタパタと戻つていくが、帰り際にこんな事を言い残した。

「もしよかつたら今夜…うちの部屋で特別授業をやるからね」

ワインクをしてその場を去つていつた。日向はつい気になり、一ノ瀬にあの人との関

係を聞く。

「おい、あの人なんなんだよ。やけにおまえにご熱心だつたが…」

「…あの人の名は西京寧音、俺の試験官を務めた人だよ…」

西京寧音、日向はその名を知っていた。『King Of Knights』(通称K O K)のトップリーグで東洋太平洋圏最強と謳われる現役のスター選手だ。話には聞いていたがまさかこの学校にいるとは、しかし日向が驚いたのは一ノ瀬の試験官だつたという事だつた。

本人曰く、最初は普通の試験官が相手だつたはずなのに、突如として寧音が乱入。視界が暗転したと思つたら試験官が倒されていた、試験官バイト乙。寧音はこちらの話も聞かず、そのまま戦闘になつたが苦しくも勝利したという。それ以来、一ノ瀬は寧音のお気に入りらしく毎度激しいアプローチを受けているそうだ。

「あの時は本当に死にかけた…『幻想形態』でもあれほどとは…思い出したくもない」「ちなみにその時、何が出たんだ?」

「忠勝」

「え」

『本田忠勝』(通称 ホンダム)

『戦国b a s a r a X』の使用キャラで特徴はなんと言つてもあのロボットのような

鎧、稼働当初から弱キャラ扱いされ、『戦国最強（笑）』などという不名誉なあだ名が一時期ついたが、研究が進むにつれ上位へとのし上がったキャラである。

試験の時にはそのごつい見た目に驚かれたとの事。しかし寧音の重力の能力を受け付けないほどのパワーを持つており、最後は一撃 *b a s a r a* 技『戦国最強・最大出力』というファ○ネルで倒したという。もちろん戦っている最中はずつと無言。

そうしていると理事長が大声で呼びかける。

「いいか！くれぐれも死なないないようにやるんだぞ！」

「わかつてますよ。ですけどボコボコにしてやりますけどね」

「…好きにしろ」

「坊がんばれ！」

彼女達は自分の固有靈装^{デバイス}を出すべく呼びかける。

「打ち碎け！『エンバー・セリカ』！」

黄色髪の女性がそう叫ぶと自身の両腕に黄色い炎が宿る。そして両方の拳をぶつけ炎が振り払われるとそこには籠手のようなものが装着されていた。

「刈り取れ、『クレセント・ローズ』！」

黒髪の少女がそういうとどこからかバラの花びらが舞い上がり彼女を包み込む。風がやむと彼女の手にはいつの間にかやけにメカメカしい赤と黒で装飾された大鎌が握

られていた。

そして俺たちも覺悟を決め、己の固有靈装^{デバイス}を呼び出す。

「散らせ、『月華』」

「勝闘を上げろ、『戦国』」

俺の手に小型の竜巻が発生し、手に使いなれた刀が握られていた。背後を見ると『誅』の文字が浮かんでいた。とりあえずは安牌だなつと思った。そして肝心の一ノ瀬の方を見ると日向は思わず絶句してしまった。

なにせ彼が持っている固有靈装^{デバイス}は『輪刀』である。つまりこれから導き出される答えは一つ。

「我こそが日輪の申し子：駒よ、せいぜいよい働きをするがよい……」

（も、毛利じやねえか―――!!）

『戦国b a s a r a X』最強のキャラにして最悪の外道策士、『毛利元就』

降臨！

番外編 夜に誘われて 第1話

21世紀、科学の進歩により数多くの不思議な出来事の仕組みが解明された近未来。そんな解説が進む世界で、大きな黒い影に呑みこまれた者は魂を失い、死ぬか、生きていても『虚ろの夜』を彷徨い続ける、という噂が学生たちを始めとした若年層を中心に広まっていた。

人を食う影『虚無』によつて偽者(イシガク)の死を体感し生き残つた者は、超常現象『顕現(イグジス)

行使することが可能になる『偽誕者(イシガクザイ)

『虚ろの夜』の前に急増した顕現の行使者。その主軸となる武闘派の振興組織『忘却の螺旋（アムネジア）』、かつて『虚無』と相対した『夜刀』の残党、『夜刀』に代わつて虚無と戦う組織『光輪（リヒトクライス）』、野良の『偽誕者(イシガクザイ)』、そして得体のしれない者たち。今回の虚ろの夜に集う彼らもまた、それぞれの思惑、野望、倫理の元に立ち会うのだった。

そして今宵も、一人の少年が『虚ろの夜』へと身を投じた。

「…」はどこなんだ

一人、トボトボとすっかり暗くなつた公園を徘徊する日向。彼は自室で寝ていたはずなのに、気がついた時にはなぜか見知らぬ公園のベンチで寝ていた。

そして彼が持つ己の固有靈装デバイスである『月華』が何故か勝手に召喚されているという。消そうにも消せないので仕方なく手で持つてゐるのだ。

「まさか『あの男』が関わってるんじゃないだろうな…」

日向が言う『あの男』かつて夢の中で出会い、刺激が欲しくないかと問われ、日向を別世界に飛ばした張本人。俺だけではなく一ノ瀬という少年も同じような境遇だ。

（うう…お化けとか出ないだろうな…）

内心ビクビクしながらも明かりのある街の方へと向かっていく。
すると

ドオオオオオン!!!

（な、なな何だ?!）

突然の轟音に思わずビクッと体を震わせる日向。何事かと思い、恐怖を抑えながらその音の正体を突き止めるべく、現場へと急いだ。

日向がついた先には抉れたコンクリートに斬り倒された街灯、ボツキリと根元から折

れた樹木などひどく荒らされていた現場だつた。

(い、一体ここで何が……ん?)

その凄惨な現場を見ていると奥の方に人影を見つける。暗くてよく見えなかつたが、偶然か月明かりにその姿が照らし出される。

そこにいたのはゴスロリ仕立ての黒いドレスに脚まで長く伸ばした美しい銀髪、そしてその頭には天使の輪つかのようなアホ毛がついた幼女だつた。

(…………あいつ絶対ヤバいやつだ)

日向は確信した。こつちの世界に飛ばされて多くの事を経験したが、幼女だからといつて侮れない。こんな時間でこんな場所にいる時点でもうやばい奴にしか見えない。もしかしたら殺戮を楽しむサイコキラーという可能性もありうる。

(よし!俺は何も見なかつた!とにかくあいつが気付く前にここを離れなければ……)
こつそりとその場を離れようとするが

カラランカララン:

(げ!?)

足元に空き缶が転がつており、日向はそれに気付かず蹴つてしまい音を鳴り響かせてしまう。ギギギと鏗びついたブリキの人形の如く、少女のいた方に首を動かすと…

その場には誰もいなかつた。

(な、なんだ。どうやら居なくなつてたみたいだな……)

ホツと胸を撫で下ろす日向、さつさとこんな所から出て行こうとしたが「お前は何者だ？」

二三

(ホワアアアアアアアアアア!?)

突然、背後から声が掛けられ思わず声が出そうになつたが寸での所で堪える。振り返ると先ほどの幼女が立つてこちらを見ていた。

(お、おおおお落ち着くんだ、こおるになれ日向慶一郎! 下手なことすりや殺られる!)
ここは慎重に……

何とか心を落ち着かせ、お得意のポカーフエイスで少女と対面する。

「…日向慶一郎だ。こちらが名乗つたのだから、そちらも返すのが礼儀ではないのか？」
「ふむ…その通りだな。私の名はパディスター、オートノミック・ナーガ、自律神経回路の一人だ。」

(なんか難しい子だな)

最近の幼女は成長が早いのか既に厨二病を発症しているらしい。バディスタと名乗った少女は日向に質問をする。

「お前は何なのだ？お前からは顕現^{イグジス}が感じられない、偽誕者^{インヴアース}とも違う。しかしそれとは違う何かを感じる…お前は何者だ？」

「…質問の意味が分からないな」

(顕現^{イグジス}? 偽誕者^{インヴアース}? さつきから何を言つてるんだこの子は?)

日向にはバディ스타が言つて いる言葉が理解できない。伐刀者^{ブレイザ}の事を言つて いる訳でもない、このままここにいると面倒な事になり そうで早々に話を切り上げ立ち去ろうと結論づけた。

「質問はそれだけか？なら俺はもう行くぞ」

そのままその場を立ち去ろうとするが

ジヤキ！

日向の首元に剣が突きつけられた。恐る恐る振り返るとバディ스타の背中に、6本の剣が翼のように付いておりその内の一本が日向に向けられていた。

「それはできない、まだ私はお前の『ソレ』が何かは知らない。『ソレ』を知るために私と闘え」

(デスマネー)

もはやお約束となつて いるいきなりのバトル。恐らく言つても無駄だろうと思ひ、日向はうんざりしながら鞘から『月華』を抜き、構える。刀からオーラが漏れ出し、それ

が日向の背後へと周り『漢』ゲージへと変化する。

そして今回出てきたのは『月』。こんな薄気味悪い夜に出てくるなんてどんな皮肉だと思う日向だった。

「それは何なのだ？今まで多くの虚無人と戦闘をしてきたが初めて見るものだ。やはり『ソレ』は大変興味深い……」

「悪いがこいつは企業秘密なんでな。そう簡単に喋れるもんじゃないんだよ」「……チラツチラツ」

「……そんな物欲しそうな目で見られても教えないからな」

バディスタも武器である『紅翼 七花』を構え戦闘態勢に入る。

「能力の調査、確認を開始」

『幻想形態』には何故かできないから、そつちで何とかしてくれよな
 (してくれないと俺が犯罪者になつてしまふ)

【R e c u r r i n g V O I D E f f e c t】

【I s t C L A U S E】

【D I V I D E!】

先に飛び出してきたのはバディスタ。『紅翼 七花』を翼のように広げ飛び立ち、こちらに高速で接近してくる。背中の剣を伸ばし、串刺しにしようと襲いかかる。

「《帯刀・歩月》！」

日向は瞬速の踏み込みで剣を避け、一気に間合いを詰める。そのままバディスタへと近づき、居合切りへと派生させる。

「《逸刀・臘》！」

高速で鞘から刀を瞬時に抜き出し、居合切りを放ちバディスタを一文字に斬ろうとするが二本の剣がそれを阻む。

「えい」

「！」

そして残りの剣が日向の背中を刺そうと迫つてくる。日向はその場から跳躍し、何とか逃れる。しかし着地した所をバディスタは指先からビームを放つ。

「チイツ！ 《逸刀・新月 裏》！」

日向は円を描くように刀を振るう。それによつて風圧が発生し僅かに着地地点がずれビームが外れる。

(やつぱあの剣の多さが厄介だな…下手に間合いに詰め寄れないから厳しいぜ…)

『月』はスピードと接近戦を重視したスタイルなのだが肝心の間合いに踏み込むことができない。相手が少しでも隙ができたら一気に攻めることができるのだが。

「どんどん行くよ」

バディ스타は再び接近してくる。

「たてかいてくん」

バディ스타は背中の剣を円のような形に広がらせ、そのまま縦回転車輪をするように突っ込んでくる。

「ぐあつ！」

日向はこれをガードするも威力が大きく、そのまま吹っ飛ばされてしまう。そこにバディ스타がさらに追い討ちをかける。

「はっしゃ」

光の弾が吹っ飛ばされた日向に向けて発射される。しかし日向は空中で身を立て直し、居合で半分に断ち切る。そしてシユタツと地上に降り、態勢を立て直そうとするが「ガアッ！」

突如として彼の体に強い電流が走る。原因は日向の足元に置いてあつた小さな宝石から放たれていた。

（い、いつの間に…まさか！あの時、剣を突き出した時に！）

バディ스타が先制攻撃として剣を突き出したあの時に、既に設置されていたのだ。バディ스타はそこまで何が起こるのかを全て予測していたのだ。バディ스타はそのまま身動きが取れない日向に猛攻を加える。

「トラウフオーラス》！」

真上に飛び立ち、そのまま剣をドリル状に巻き日向を串刺しにしようとする。

(くつ！)

日向は苦し紛れに刀を振るつて剣に当て、ギリギリ軌道を変え串刺しにはならなかつた。しかし先程の電流であまり身動きが取れない。

「が…ハア…ハア…」

肩で息をする日向、体力を消耗し視界が少しおぼつかないようだ。

(くそ…こんな訳のわからない所で死んでたまるか！)

日向は刀を構え、そしてバディスタ目掛けて全力で駆け出す。

「うおおおおお！」

「あたつく」

彼女は剣を突き出してくるが日向は全ていなし、再び彼女の懷へと入つていく。残つてゐる数本の剣で彼女を守るはず。

(ならこいつはどうだ！)

「ハツ！」

日向は居合切りをするのではなく地面を碎くように斬り、その破片を彼女に向けて飛ばす。それを本能的にガードするバディ스타だつたが

「あれ？」

目の前にいた日向がいつの間にか消え、首を傾げる。しかし「やつとだな」

「?」

背後から声が聞こえ、振り向くとこちらに刀を振るおうとする日向が迫っていた。バディスターが破片に注意を向けた一瞬、その一瞬の隙をつき『帯刀・歩月』で瞬時に加速し、彼女の背後へと回ったのだ。

「ハア！『逸刀・新月』！」

「あうつ」

円を描くようにバディスターに斬り込む、更に強く踏み込み間合いを詰め繋げていく。
「まだまだ！『活殺・乱れ雪月花』!!」

「ひがいじんだい」

そのまま乱舞へと発展させ、残像を生み出すスピードで連続技を繰り出す。最後に下段から上段へと斬りあげ、バディスターはそのまま吹つ飛ばされていく。

(さすがにこんだけ喰らえば…)

しかし日向は焦っていたがバディスターは体が傷つきながらもゆっくりと立ち上がる。よく見れば何故か火花が飛び散っているように見える。

「れじゅむおペれーしょん…」

しかし、やはりダメージはあるのか動きがおぼつかないように感じる。

「もうそんな体じや無理だろう…諦めろ」

「それは無理な話。私は使命を果たさなくてはならない」

(聞く耳は無しか…)

日向は刀を構える。しかし日向はある違和感を感じた。

(なんだ? 何かおかしいぞ…)

彼女に違和感を覚える、彼女を注意深く観察するどこにある事に気付いた。

(背中の剣が…ない!?)

バディ스타のメインウェポンがない事に気がついた日向。しかし気がついた時には既に遅かった。上空から六本の剣落ちてきて、日向の周囲を囲むように突き刺さる。

(これは…まずい!)

すぐその場から《帶刀・歩月》で離脱しようとするがあの時の宝石のように電流が流れ、日向を拘束する。

(ああくそ…(りややばい!)

日向はもがいて抜け出そうとするが、拘束が強く抜け出せない。バディ스타はこちらに近づき何やら呪文のようなものを唱える。

「天高く舞え。この背に輝く閃光なる六の翼」

その言葉を受け、剣たちは強く光を放ち始める。

(間に合うか!?)

「コード ザツハイシオ』

詠唱を終えると剣から更に強い光が発せられ、どんどん大きくなつてゆきやがて巨大な光の柱となり日向を飲み込んでいった。

「こんぷりーとあんあさいんどあたすく…」

剣が彼女の元に帰つてくる。

(結局あの文字はなんだつたのだろうか…まあ聞けば良いことか)

バディ스타は爆心地で倒れているだろう日向を捕まえるべく、近寄る。
しかし

その場には誰もいなかつた。

「…え?」

「…どうやら死にたいらしいな」

背後から声が聞こえ、振り返るとこちらに刀を向けた日向が立っていた。服は少しボロボロになつており、あちこち傷だらけの様子だつた。そして彼の背後の『月』が輝いていた。完全に油断したのか判断が遅れ、隙が生まれる。

「月夜に足掻け！」

一瞬で間合いに詰め寄り、凄まじいスピードで斬る。残像を生むスピードで左右から挟み撃ちをするように逃げ道をふさぐ。そして刀を納め

「己の器を知れ！：『月華繚乱』!!!」

強烈な居合切りの一閃。それを受け、薄れゆく意識の中で彼女はこう思った。

（やはり…人間は侮れないな…）

【B R E A K D O W N !】

（ふう…案外やつてみるもんだな）

バディスターの気絶を確認し、その場に倒れ込む日向。あの時、光に飲み込まれる寸前に一輝の幻影技、第四秘剣『蜃氣狼』を真似て作った技『案山子抜け』を使つたのだ。『案山子抜け』とはその場に魔力で自分自身の分身を投影する事によつて身代わりとして引き受け、拘束から逃れるという技だ。しかし、いざ実戦で使おうにも、大会では拘束さ

れるなんて事がないから殆ど死に技となっていた。

(さて……これをどうしたもんかな)

もはや焦土と化した公園を見渡し、ため息をつく日向だつた。

「…おうち帰りたい」

ビルの屋上で一人、そう呟く長い茶髪を纏めた少年、一ノ瀬が今にも泣きそうな顔で
そう呟いた。

⋮⋮⋮
to b e c o n t i n u e d

番外編 夜に誘われて 第2話

強い風が吹くビルの屋上でフェンスに手をかけながら、今にも泣きそうな声で一ノ瀬が呟く。

「…おうち帰りたい」

事の顛末は学園での授業を終え、夜まで適当に暇を潰しそのままベッドで寝ていたら、気がついた時には既にビルの屋上で寝ていたのだ。

「なんでだよ!? どうしたらこんな所で寝てるんだよ!? 夢遊病患者でもここまで酷くはないだろうが！」

そんな自分に突っ込みを入れる一ノ瀬だつた。

「あゝあ…というかここは何処なんだよ…少なくとも東京…なんだろうか?」

場所を把握できていない一ノ瀬。とりあえず日向か理事長に連絡を入れようと思つたが財布も携帯を持つていなかった（何故か制服を着てる）。いつたいどうすればと途方に暮れていると

「おい…そこのおまえ」

「ん？」

声を掛けられ、後ろを振り向くとそこにいたのは黄色いパーカーを着た、まだ幼く小さい少女だった。

(いつの間に? 気配を感じなかつたぞ:)

一ノ瀬も飛ばされてそれなりに苦労ある人生を送つてきた。そのため気配を察知することぐらいは出来るのだが、この少女はそれを搔い潜つて一ノ瀬の背後についたのだ。

「おい…もしかして耳が聞こえないのか?」

「え?…あ、ああ。すまない、ちょっとボーッとしてた」

少女に声かけられ、正気を取り戻す一ノ瀬。そんな彼に少女は話しかける。

「?…まあいい。おまえ、なんでこんな所にいるんだ?まさか飛び降り自殺でもする気か?」

「ち、違うわい!」

突然、そんな失礼な事を言つてくる少女に一ノ瀬は全力で拒否する。そんな一ノ瀬に少女は質問をしてくる。

「どうか、ならおまえに一つ聞く。おまえは何者だ?」

「な、何者つてなんだよ?いきなり

〔?:言い方を変えよう。おまえは偽^{イシグアース}誕^{アース}者か?〕

「偽誕者？^{イングアース}伐刀者^{ブレイザ}の事を言つてゐるのか？」

「伐刀者？何を言つてゐるんだおまえは？」

「…んん？」

双方の話が食い違い、二人とも首を傾げる。

「まあいい。この『虚ろの夜』にいる以上、只者ではないという事だけは確かだな」「さつきから何を言つて：ツ！」

瞬間、一ノ瀬はその場から跳躍し離れる。

すると、先ほど一ノ瀬が立っていた場所に一閃が走り、地面がパツクリと斬れる。少女の手にはいつの間にか大小二つの刃物が握られていた。

「む？峰打ちで終わらそうと思つたのだが、避けたか」

「何が峰打ちだ！思いつきり斬れてんじゃねえか！？」というか、いきなり何すんだ！？」

少女は再び剣を構え、こう答える

「おまえが『忘却の螺旋』^{アムネジア}の回し者という事も否定できない。それに、おまえの様な『異端な存在』を放つておくわけにもいかん。大人しくいう事を聞け」

「ああもう！なんで俺の人生は毎度毎度こうなんだ！」

手を前に突き出し、大声で叫ぶ。

「勝闘を上げろ、《戦国》！」

一ノ瀬の体が一瞬虹色に光り

彼の体から雷が放出された。

「くっ！」

あまりの眩しさに、少女は手で目を覆う。そして光が収まりゆっくりと手をどけ、一ノ瀬を見る。

「…なるほど。それがおまえの得物か…」

一ノ瀬の腰の左右に三本ずつ、合わせて『六本の刀』を腰に掛けていた。

「先に仕掛けたのはそつちなんだぜ。本気で来い：Y o u, r e g o n n a b e s o r r y O K?（でなきや後悔するぜ？）」

一ノ瀬は腰から一本の刀を引き抜き、構える。

「おもしろい：いいだろう」

少女も二つの剣を構え、戦闘体制に入る。

「一ノ瀬幸村、推して参る！」

「我が名は『夜刀の姫』リンネ：名前を覚えて逝くがいい」

【Recurring VOID Effect】
 【2nd CLAUSE】
 【DIVIDE!】

両者一斉に駆け出し、剣を振るつた。

「…というわけだ。理解したか？」

「状況を把握。つまり日向は異世界から来た人間だと？」

「そういうことだ。話が早くて助かる」

その後、日向はボロボロになつていたバディ스타を抱えて焦土と化した公園から逃げる様に出て、少し歩いた所に廃ビルがありそこでバディ스타の治療を行つた。

そこで目が覚めたバディ스타に再び襲いかけられたが、バディ스타の知りたがつている『伐刀者^{ブレイザ}』についての情報を条件に自分の身の安全の保証と、ここが何処なのかを聞いた。

話を聞く限りここは俺の知つてゐる世界ではなく、しかも『虚ろの夜』と呼ばれる空間にいるらしい。また異世界かよ…、と頭を抱える日向。バディ스타曰く、『虚ろの夜』は

何度も起こっているらしいが、今回のことは今までのそれとは何か違うとの事だ。

「俺が元の世界に帰るにはその『深淵』とやらをどうにかすれば何とかなるのか？」

「否定。『虚ろの夜』の核である『深淵』を破壊すれば恐らくは」

バディスターがそう答える。日向は空に浮かぶ星々を見上げながら思う。

（しつかしこの世界は俺たちの所よりも遙かにやばいところだな。というかこの子、マジでロボット娘だったのか）

バディスターが言っていた『自律神経回路』、魔術が存在した古代の時代に作られた兵器で偽誕者と顕現の力を食い荒らす虚無の殲滅を目的として作られた存在との事。

見た目は人間の少女と殆ど変わりないが、彼女には感情がない。まさにロボットだ。

「はあ…やってらんねえな」

一ノ瀬は無事だろうか、と思いながら今も輝く星々を見てそう思つた日向だった。

一方その頃、一ノ瀬は謎の少女リンネと激しい戦いをしていた。コンクリートの地面は抉れ、一部のフエンスは破壊されているなど、前の面影がないほどにボロボロのなつた屋上で今もなお戦つている。

「なるほど…私も長い時を生きてはいるが、おまえのような奴は初めてだ」

「h u m? そんな風には見えねえけどな」

「少々複雑なんだ。それにも…まさか六本の刀を全え掴んで振るうとは…一体どんな握力をしているんだ?」

リンネは最初、一ノ瀬の六本の刀にそれぞれ能力が付属（エンドチャント）でもされてるのかと思つたが、まさか器用に指の間で掴んで振るうとは予想にもしていなかつただろう。

「Y o u j u s t w a i t ! （まあ見てな!）もつと面白いやつを見せてやんよ！」

一ノ瀬は六本の刀を構え直す。

「《J E T — X》!!」

『六爪』をX字に振るう。それにより、真空の刃が発生しリンネへと放つ。

「《空牙》!!」

それに対し、リンネは『無銘』に黄色いオーラを纏わせ、斬影を飛ばす。互いに空中でぶつかり合い爆発が起きる。一人は煙に覆われお互い姿が見えなくなる。

しかし両者はそれに構わず前に突つ込み、剣を振るう。互いの刃がぶつかり合い、力チカチと鳴りながら鍔迫り合いをする。

「やるじやねえか」

「そちらこそ…長く生きたこの身を嘆いたことはあるが、ここまで心躍る戦いは久しいぞ」

「いいねいいねえ、ゾクゾクするぜえ！」

一ノ瀬がリンネの剣を押し返し、吹き飛ばす。一ノ瀬は右手で掴んでいる三本の刀に
に雷を纏わせ襲い掛かる。

『MAGNUM STEP』!!

雷を纏つた『三爪』をリンネに突き出す。

『飛燕』!!

リンネは引かずそのまま剣にオーラを纏い、突きを避け一ノ瀬へと凄まじいスピード
で斬りかかる。

『やらせるかよ！』WAR DANCE』!!

一ノ瀬はすぐさま収めていた残りの刀を引き抜き、下から斬りあげるようにリンネの
『飛燕』を弾きかえす。そのままリンネを斬り裂こうとするが

「ツ!?」

一ノ瀬は確かにリンネを捉えた。だが刃が当たった瞬間、彼女は霧散する。

『残像だと!?』

そして自分の周りが暗くなるのを感じる。頭上を見ると月を背に、一ノ瀬へと目掛け
て斬りかかろうとするリンネの姿だった。

『チツ！』PHANTOM DIVE』!!

一ノ瀬は『六爪』を構え、雷を纏つた刀を振り上げ迎撃する。

しかし

「What!? これもか！」

一ノ瀬の『PHANTOM DIVE』がリンネに当たるも、景色に溶け込むようになれる。今のもリンネの残像だつたようだ。そして、『PHANTOM DIVE』が不発で終わつた事により一ノ瀬に大きな隙が生まれてしまつた。そしてその隙を背後からリンネが狙う。

(私には眩^{バラドクス}き闇を討つ使命がある。お前との鬭いは楽しかつたが、悪いが早々に終わらせてもらうぞ！)

「ハアアアアアアアアアア!!」

「グツ!?

『無銘』と『名無』の二振りの剣に黄色いオーラが纏い、長い刀身を作りあげる。その剣で隙だらけの一ノ瀬へと斬る。一ノ瀬は苦悶の声を漏らす。

「躲す事も受ける事も叶わぬ神をも薙ぐ、真なる刀！」

一ノ瀬に連撃で斬つていくりンネ。その言葉にふさわしく一ノ瀬はガードも出来ず

に次々と斬られていく。

「ハア！」

「ガア！」

強烈な一閃を受け、屋上の入口のコンクリートに土煙をあげながら突っ込む。リンネは間髪入れずに一ノ瀬にとどめを刺すべく突っ込んで行く。

「これで終わりだ！『神羅・焰一閃』!!!」

リンネはその瞬間、己の勝利を確信していた。

しかし

土煙を越えた先には

『六爪』に高圧の電流を纏い、『構え』に入っていた一ノ瀬の姿だった。

（誘い込まれた？！まずい！避け…）

気づいた時にはもう遅く、すでに攻撃モーションに入つたリンネは避けるどころかガードする事も出来ない。

「こいつで The End だぜええええ!! 『H E L L E N D D R A G O N 』!!!」

一ノ瀬は迫りくるリンネに対し、巨大な龍の形をした電撃を放つ。

そしてリンネは――――――

「日向。おまえの友である一ノ瀬？というのはどこにいるんだ？」

「さあな。携帯はおろか、財布がない以上あいつと連絡が取れないんだよなあ！」

日向とバディ스타は一時的に同盟を組み、『虚ろの夜』を終わらせるべく『深淵』を探し出そうと廃墟から出て無人の街の中を歩いていた。

「といふかあいつこつちに来てるのかすら分かんねえ。あゝあ、あいつが一発でかい花火でもあげりやすぐにわかるんだけどな」

日向が冗談交じりにそんな事を呟くと

「コイツデジツエンドダゼー！ オーモーイーガー

どこからかそんな声が聞こえる。

「…え？」

「日向、上のあれはなんだ？」

一瞬呆け、バディ스타に裾を引っ張られ正気に戻る。そしてバディ스타が上を指し、日向が見上げるとそこには上空を飛ぶ『青白く輝く龍』が飛んでいた。それを見て日向はすぐに察しがついた。

「ああ…いたわ」

「あれは一体…まさかリンネがあそこに…！」

「まあ…なにかしらアレは」

「あの龍を放つた人物…只者じやありませんね」

「…」

「お？ 何アレすつごーい！」

「あの光…まさか電光機関か!?」

「む！ 何やら同胞の気配が！」

斯くして役者は揃つた。

長い夜の戦いが今、始まる。

10話

『毛利元就』

『戦国b a s a r a X』の操作キャラの一人で彼を前にした相手は死ぬ。というのを冗談では済まさない程の強者。疑惑の判定を多く持つ愛されボディや、ガード不可の設置技にほとんど途切れない援軍の数々などゲームバランスを崩壊させた戦犯。

その強さは『AC北斗の拳』のトキが可愛く見えるほどの実力で、永パに簡単に持ち込める手軽さ。『戦国b a s a r a X』ではコンボが続くとダメージ補正が掛かるため即死には至らず、タイムアップまでそれを続ける事ができる。しかも、永パをされた側はコントローラーから手を離してジュースを買いに行けてしまうという。

そして一番の問題は「…」。

（こいつはとにかく冷酷無慈悲で、自分の勝利の為なら自分の兵すらも斬り捨てる奴だ。
こいつとだけはタッグを組みたくなかった…）

はつきり言うと『毛利』とだけは何が何でも組みたくなかった。ぜつたい俺の事を裏切るのだから。

「な、なんかあいつ雰囲気変わつてない？」

「そ、そうね」

どうやら二人組も一ノ瀬の変化に違和感を感じたようだ。

(…フレンドリーファイヤーを覚悟するしかないか)

日向は軽く絶望しながら考え、月華を構える。そして二人組の女性が大声で叫ぶ。

「自己紹介がまだだつたな！私の名はヤン・シャオロン、覚えとけ！」

ガツン！と籠手をぶつけそう答えるヤン。同じくして黒髪の少女も自分の名を名乗る。

「私の名はルビー・ルビー・ローズ」

鎌をクルクル回しながらそう名乗るルビー。

彼女たちが名乗ったからにはこちらも名乗り返さなければ、そう思いながら日向と一ノ瀬も名乗る。

「…日向慶一郎だ」

「我が名は一ノ瀬幸村、せいぜい名を覚えて逝くがいい」

日向はシンプルに自分の名を名乗る。一ノ瀬は輪刀を背に回し『Yの字』のポーズで答える。それを見て日向はつい笑ってしまいそうになつたがなんとか堪える。

そして双方、名乗りと武器を構える。

『Let, s Go Ahead!』

試合のゴングが鳴る。

試合が始まると同時に攻めたのは和正、『誅』の特性の速さを駆使し二人に肉薄するべく駆け出す。

(先にやるのは鎌使い、籠手使いは一ノ瀬に…て、ええ!?)

隣をちらつと見るとそこには一ノ瀬はおらず後方を見ると先ほどの位置から一步も動かずじつとこちらを見つめていた。どうやら俺も含めて高みの見物をするつもりなのだろう。

(初っ端からこれかよ! ああわかつたよ一人でやつてやんよ!)

今更退くことはできない。ならこのまま突っ込んでいくとヤケになる日向。しかしここで予想もしていなかつた事態が起つくる。

それは

ガシャン! ガシャン!

(ゑ?)

突如として二人の固有靈装^{デバイス}が音を立てて、変形する。そして二人は迫りくる日向に武器を向ける。

すると

ズドン!ズドン!

バゴオン！バゴオン！

ルビーの大鎌が狙撃銃のようにならへて變化し、ヤンの籠手は甲の辺りに銃口が露出し、突撃してくる日向に向けて一斉掃射する。

(は、話が違うつすよオオオオオオオオ
!?!?)

黒乃と寧音はその様子を観客席から観戦していた。

「一ノ瀬は動かずか：：というより、一ノ瀬の固有靈装^{デバイス}は鎧型だつたはず。どういうことだ？」

「さあね：私もあれは初めて見るよ」

一ノ瀬の固有靈装^{デバイス}の變化に驚く二人、ここで寧音が口を開く。

「それにしても…あいつらも中々面白いの使つてるねえ」

「ああ、世の中でもかなり珍しい可変系型の固有靈装^{デバイス}…それも今年は『8人』も入学なんてな…」

「あ～あかわいそうに…何も知らずに突つ込んで集中砲火浴びてるよ…」

(うおおおおお!?)

日向は迫り来る銃弾から必死の思いで駆けて逃げる。まさか変形して銃になるなんて予想にもしていなかつただろう。ちなみに一ノ瀬は光の壁でガードしながら未だに動かずその場でジッと待っていた。

(ちっくしょう!・これだけの集中砲火じや近寄れねえよ!)

まさしく銃弾の嵐とでも呼ぶべきか。日向は逃げながらもこの状況を打破する方法を模索していた。

「ルビー!・そつち行つたよ!」

「任せて!」

ルビーは変型した『クレセント・ローズ』狙撃銃ver.のボルトを手で引き、空薬莢を排出し新たに弾薬を薬室へと装填し逃げ回る日向へと向けて狙い撃つ。

(くそ!)

なんとか逃げ続けてはいるもののいずれスタミナが切れる。肝心の一ノ瀬もあんな状態では役に立たない。やはり接近戦に持ち込む他ないだろう。

(ええい、ままよ!)

日向は刀を構え直し、『誅』の能力を発動する。体からキラキラと粒子が漏れ、それが形となり人型に構成されていく。そう、それは日向と瓜二つの姿をした『分身』だった。

『誅』の特徴は所謂格ゲーの『ストライカー』を呼ぶ能力を持っている。

『…』

分身は何も言わずに刀を構える。分身は一撃技を持ってないが『誠』状態のスペックを持つている。自分とのコンビネーションを合わせ、連携技を繰り出すことができる。

「行くぞ！」

日向は逃げるのをやめ、分身と共に突撃を仕掛ける。

「え、増えた!?」

「幻術か！」

二人は少し困惑したが構わず迫り来る日向に撃ち続ける。

(C Tみたいなシユーティングゲームしてんじゃねえよ！)

日向の前方に分身が走り、迫り来る弾丸を弾きかえす。うち漏れた弾丸を日向が弾きかえすという守りに入りながらも着々と前に進んでいく。

(ジェットストリームアタック：は出来ねえけど！)

分身は速度を落とさず、そのままルビーへと斬りかかる。

『…』
『俊殺』

『狼牙』とは違う重い突き技を放つ分身。

「む！」

ルビーは即座に狙撃から大鎌へと変形させる。

「やらせるかよー！」

ヤンは前に出てルビーを守ろうと、襲い掛かろうとする分身に対し跳躍して殴りかかる。

（今だ！）

日向はその瞬間を見逃さず、分身の背中を踏み台にしヤンへと斬りかかる。途中、分身がものすごい憎悪を抱いた目つきで見てきた気がする。正直すまんかった。

『翔尾閃』！

分身を踏み台にした後、腰を低くしながら抜刀するよう素早くに斬る。

「ぐう！」

ヤンはそれを察知し籠手でガードする。しかしそれでも衝撃までは殺せず、日向と共にルビーと距離が離すことができた。

「お姉ちゃん！」

ルビーがヤンを助けに行こうとするが分身が行く手を阻む。

「…姉妹だったのか」

「へ、まあ姉妹といつても異母姉妹だけどな」

日向は刀を構え、ヤンは拳を前に出し対峙する。

(これでようやくフェアになれたが…)

問題はまだこいつの力量がわからない。それに拳と刀ではあちらの方が小回りが利きやすく下手に攻めればあつという間に返り討ちに遭うだろう。

(だからと言つてグズグズしてゐるほど余裕じやないな…こは)

「《瞬塵》！」

日向はコンクリートの地面を割る勢いで踏み込み、一気に加速する。

「うつし、来い！」

ジャキ！

薬室に弾丸を送り込み、迫り来る日向に向けて何発もの銃弾を放つ。しかし日向の《俊塵》は残像を残すスピードで全てを避けていく。

(うおおお!? 今ちょっと頬掠つた! ? まじあつつい!)

何とか紙一重でかわした日向はそのまま加速し、一気に肉薄し縦に一閃する。ヤンは体を逸らし、避けてそのまま日向の顔面を殴ろうとする。

「吹つ飛べ！」

バゴオン！

ほぼゼロ距離で籠手から銃弾を撃ち出すが日向は顔を少し横に逸らし、これを回避する。

(あ、あんなの幻想形態でも整形手術もんですよ!)

しかしそんな事を考へてる暇もなく、ヤンは再び殴りに掛かる。今度は刀で拳を受け流し、突きを放つも躱される。避け、斬り、殴り、受け流す、二人は互いにゼロ距離での攻防を続けていた。僅かにでもミスをしたら即敗北へと繋がるこの状況、互いに引かず斬撃と殴打の嵐をひたすら抜けながら戦っている。

そんな状態の中、二人の近くに何かが降ってくる。日向は目を見開き、驚く。

(うえ?!)

上から降ってきたのは日向の分身だった。ボロボロに傷付き、満身創痍の状態だった。

『…わり』

そんな事を呟いて、粒子となりその場から消え去る。そして奥の方からはルビーーがこちらに猛ダッシュして近づいてくるのが見えた。そして日向はそちらに意識を向けてしまい、僅かに隙を生んでしまった。ヤンはそれを見逃さず、一気に仕掛けてくる。

「もうつた! 『バーニング・ピラー』!!」

「?」

ヤンは籠手を日向の地面へと殴りつけ、銃弾を放つ。すると日向の足元から炎のように真っ赤なエネルギーが柱のように上がり、日向を真上に飛ばす。

「ルビー、今だ！」

「オッケー！」

ルビーは自分の後方に鎌の刃を地面へと刺す。そしてトリガーリードを引き、射撃を行う。
ズドオン！ズドオン！

そしてその射撃による強烈な反動を生かし、空中ジャンプからの高速移動を行う。何処から出てきたのか、薔薇の花びらを撒きながら日向へと突っ込んでいく。

「ハアアア！『カーディナル』!!」

そのまま反動による衝撃の乗った鎌の斬撃を連続で日向へと繰り出し、空中コンボヘと発展させる。日向も苦し紛れになりながらガードするも、どんどん押されていく。
「『バルカラール』!!」

「ガハッ!?」

ルビーは鎌を縦に振り下ろし、そのまま日向を地面へと落とす。日向は受身が取れず衝撃が直に体を伝わる。体がうまく動かない、上から日向に追撃を仕掛けようルビーが鎌を振り下ろしくる。
(もう…だめだ！)

鎌が自分の身体を貫く最悪のビジョンを思い浮かべながら、目を瞑つた。
しかし
(…あれ?)

いつまで立つてもダメージが来ない。そう思い、日向は恐る恐る目を開けるとそこには衝撃の景色が広がっていた。

それは

緑の鎧を着た一人の男がルビーの鎌を体が切り裂かれながらも受け止めていたのだ。
(ま、まさかあなたは!・雑兵!・雑兵さんじやないか!)

日向の言う雑兵、又の名を『捨て駒くん』とも呼ばれる存在。そしてこいつがここにいるという事は…そう思い、日向はチラツと空気となっていた一ノ瀬に目を向けると彼の周りには同じ格好をした雑兵が槍や弓を持った男たちがそこにいた。

(まさかあいつ…『援軍待ち』だつたのか!)

『戦国b a s a r a X』のシステムの一つ、『援軍システム』。格ゲーで俗に言う『ストライカーシステム』で毛利の強さの要とも言える物だ。このシステムは基本的にガード直以外なら何をしても召喚でき、ほぼ無限に出すことが可能とも言える。

そして毛利のストライカー、雑兵は相手が放つありとあらゆる攻撃に無理矢理割り込み、無効化するという無名の兵士とは呼べない性能を持ったキャラもある。しかも援軍要請によつてゴキブリの如く何度も呼び出し画面内を縦横無尽に駆け巡る槍兵を嫌という程見ることになるだろう。

「時は来た：見るがいい！　すべてが我が手の内よ！行け！」

一ノ瀬の指示で雑兵達がルビーとヤンへと襲いかかる。

「なんだよこいつら！」

「ちよ!? 多すぎでしょ！」

槍や刀、弓兵などが二人を包囲する。二人が倒してもどんどん地面から雑兵が湧き出し、足止めをする。

「…助かつた」

「能書きはよい、見事盤上を動いてみせよ」

（やだこの人ツンデレ属性持つてる）

くだらない事を考えながらも日向は立ち上がり、刀を構える。

「お前は鎌使いをやれ」

「あ、おい！」

二人は駆け出し日向はルビーに、一ノ瀬はヤンへと突っ込む。

「我が駒よ！」

一ノ瀬は雑兵（槍）を呼び出し、ヤンへと突撃をかます。

「うお！」

周りの兵達に気を取られていたのかそのまま槍兵の突撃を受け、一ノ瀬と共にルビーと距離が離される。

「お姉ちゃん！ ああもう！ お前ら邪魔！」

ズドオン！

ルビーは射撃の衝撃を利用し、鎌を一回転させ周りの雑兵達を上半身と下半身を真つ二つに切り裂く。そして道が開き、助けに行こうとするが
(やらせつかよ！)

「《無明剣》！」

『瞬塵』でルビーの目の前まで一気に間合いを詰め、三連続の突きを放つ。

「ぐ！」

鎌を盾にし、ルビーの足を止める。その瞬間を狙い、ルビーの手を掴み

「《俊足投げ》！」

「きやあ！」

そのまま背負い投げの要領でルビーを投げ飛ばす。無防備になつたルビーを日向は

追撃を仕掛ける。

「受けてみよ！『無明剣・贊』!!」

『無明剣』と同じ構えで突きを連続で放ち、空中で無防備となつたルビーへと襲いかかる。そしてトドメと言わんばかりに『虚空殺』を放ち、ルビーは吹き飛ばされる。

(ハア…ハア…)

日向は技を放つた後に地面に膝をつく。二人から受けたダメージが後から来たようだ。

(そうだ…一ノ瀬は…)

ルビーと戦つていたせいで忘れていたが一ノ瀬はどうなつてゐるのかと思い、向こう側に目を向けると

そこは地獄絵図となつていた。

「我が光よ、行け！ 我が光よ、行け！ 我が光よ、行け！ 我が光よ、行け！」

一ノ瀬がヤンの背後に『弾き手「壁』』というガーブの設置技を仕掛け、それに当たつて跳ね返つてくるヤンを輪刀で弾き『壁』が消えると槍兵を突撃させ、また弾き返し『壁』を設置。それをひたすら繰り返し、行つていた。

(ば、馬鹿野郎！ 現実世界で『戦国ゴールイン』を再現するんじやあねえ!!)

『戦国b a s a r a X』で毛利が最強と呼ばれる由来がこの永パ『戦国ゴールイン』。この永パは毛利自身はその場から決して動かず、その場で輪刀の叩きつけと『壁』を設置するだけで、ゲージ回収＆高火力コンボを叩き出せるのだ。

これには観客席で見ていた寧音と黒乃も思わず「うわあ！」と声を漏らす。

しかし

ズドオン！

（今のは…）

『壁』にヤンが当たる寸前に何処からか銃弾が放たれ、『壁』が破壊される。永パが成立しなくなり、そのままヤンは後方に吹っ飛ばされる。後ろを振り返ると先ほどまで倒れていたルビーが『クレセント・ローズ』を構えており、銃口から煙が出ていた。

（あんた運が良かつたな…もしこれがソロだつたら誰も助けてくれないんだぜ…）

少し同情する日向だった。ルビーは目の前にいる日向を無視し、よろよろと立ち上がるヤンへと駆け寄る。

（悪いがこれも無実を証明するため…恨むなよ…）

日向は刀を構え、輝く『誅』を背に分身を出しながら二人を倒すために駆け出す日向。二人はこちらが攻撃を仕掛けようとしてくるのに気付き、銃口を向けるが、二人の後ろにはもう分身が『最終・狼牙』の構えており、自分も『狼牙・零』を放とうとする。

(終わりだ!)

「日輪の加護よ！背後から敵を叩き、攻め落とせ！」

(ファツ！？)

突如として毛利の『一撃BASA RA技』である『毛利軍終局采配』を発動。一ノ瀬が大量の雑兵を召喚しルビーとヤン、そして日向とその分身を包囲し、手に持つた弓で全員に放つ。

(ちょ！やめ！痛い痛い！)

もちろんその矢は日向にも命中するが必殺技が発動されている場合はキヤンセルが出来ないためこのまま放つために、分身と共に駆け出す。一ノ瀬は真上へと飛び立ち、四人の頭上に『禁じ手「縛』』を放ち、召喚した兵士を薙ぎ倒しながら迫つてくる。

『最終・狼牙』!!!

『狼牙・零』!!!

(もうやめだけでよおおおお!!!)

日向の一撃技が先にが決まり、二人は倒れそこで試合終了だというのにそこから更に

ダメ出しで『縛』が決まり（＊日向も巻き添えの）10割技が炸裂し分身は消え、3人はその場で気絶し倒れこんだ。

「日輪よ！ 照覧あれ！」

そして最後に残つた一ノ瀬は輪刀を天に翻しながらそう叫ぶ。合計100割を持つていき、結果的には一ノ瀬と日向の勝利となつた。

「おまけ」

レドモン「ふう、なんとか今週中に書き終えたぜ……。レッドブルがなかつたら即死だつたな……」

ガチャ

レドモン「ん？ どうした……つてなんだ君か。そっちの方をちゃんと書くからもう少し待つてくれよ」

??? 「——」

レドモン「え？ 『幕末の方の番外編で俺をゲスト出演させてくれ』だア？ いやいや！ どう考えても無理でしょ、世界観とパワー・バランスが全く違うだろ！」

??? 「——」

レドモン『マブカプ3の大会で強化フェニックス倒したから大丈夫』だつて？そういう問題じゃないんだつて…そもそもアレはアライさんの活躍があつたからこそその強さだつたじやん

??? 「——」

レドモン「とにかく諦めろ！お前は無理だ！さつさと自分の持ち場へ帰れ！」

??? 「……」

バタン

レドモン「ハア…まつたく。さて、明日からも仕事を頑張るぞ」「バゴオオン!!」な、なんぞや！』

??? 「：（チエンソーを握りしめている）」

レドモン「な!? ま、待て落ち着くんだ！ つてギヤアアアアアアアア!?」

番外編 夜に誘われて 第3話

一ノ瀬 & リンネ side

「ふい〜〜」

一ノ瀬は固有靈装デバイスである6本の刀を消失させ、ノーマルへと戻る。

自分が放つた『HELL END DRAGON』によつて屋上の半分は消し飛んでいて、もはや前の面影がないほどに悲惨な状態となつていた。

しかし

「…なぜ外した」

リンネは無傷でその場にへたり込んでいた。彼女は一ノ瀬が技を打つ瞬間、死を覚悟したのだ。だが、一ノ瀬はあえてリンネの右側に射線をずらし彼女に攻撃が当たらないよう放つた。

「お前にはあの時、私を殺せたはずだ。なぜ生かした？」

「…確かに俺はあんたに殺されかけたさ。けどな、俺は殺されるのは嫌だが他人を殺すのはもつと嫌なんだ。ただそれだけのことさ…それに」

一ノ瀬はへたり込んでいるリンネに近づき、手を差し伸べる。

「お互い何やら事情があるらしい。ここは互いに情報を話すつて事で手打ちにしないか？」

「…好きにしろ」

そのように答え、一ノ瀬の手を掴んで立ち上がるリンネ。それを見て一ノ瀬は安心したかのような表情を浮かべた。

「なるほど…お前の持つその力、ブレイザ伐刀者とやらはこちらの物とはかなりかけ離れているようだな。随分とファンタジー染みた世界じゃないか」

「そりやどうも。あんたらのはどちらかと言えばダークファンタジーだけどな」

そんな言い回しをしながら話す二人、一ノ瀬は薄々気づいてはいたもののやはりいざ現実となるの実感が湧かないものだ。

（ああ…あの時と同じだ。勝手に飛ばされて、勝手に戦わされて、勝手に生きている。ひでえ話だな…）

初めて飛ばされた時の事を思い出し、内心愚痴る一ノ瀬。いい思い出もあれば思い出しあくもない事など様々な記憶が蘇りそうになつたがすぐにそれを忘れ、本題へと入る。

「それで? この『虚ろの夜』を取り仕切るその『なんたらの闇』とやらを倒せば元の世界に帰れるのか?」

「恐らくな。『眩^{バラドクス}き闇^{リヴァース}』のヒルダは今回の『虚ろの夜』で偽^{インヴァース}誕者^{リヴァース}を超える力を持つ存在

『再^{リヴァース}誕者^{リヴァース}』になろうとしているのだ」

(なるほど。要は俺たちの世界で言う『魔人化』みたいなもんか)

大方この世界の現状を把握した一ノ瀬、ここである疑問が浮かぶ。

「そういや、その『再^{リヴァース}誕者^{リヴァース}』にはどうやつてなるんだ? さすがに何も無しってわけじやないだろ」

それだけの強さをタダで手に入る訳がない、もしそうでなければ何か代償が必要となる筈だ。

「その通りだ。奴が『再^{リヴァース}誕者^{リヴァース}』になるための儀式をするのに必要な物が二つほどある。一つは既に私の知人が所有している免罪封具『^{インスレータ}断裂の免罪符』。そしてもう一つは

私の命だ」

s i d e o u t

日向&バディスター side

暗い夜の中、バディスターと日向が先ほど雷の龍が放たれたビルを目指して無人の街を駆けていた。日向はそれが一ノ瀬の技だと気付き、すぐにでも合流しようと向かっていたのだが……

「うう……」

「日向、『コレ』はなんだ？」

（なんぞやこの状況……）

道中、日向の目の前には一人の男が倒れておりバディスターがちよんちよんと指でつづいていた。男の格好はツンツンとした黒髪に、まるで第二次世界大戦の旧日本軍の海軍のような白い軍服を纏っていた。

「……おいあんた、大丈夫か？」

日向は流石にこのまま放つておくのはまずいと思い、倒れている男に近寄り声を掛けれる。少なくともこの『虚ろの夜』にいるという事はこの男も偽誕者インヴァースなのだろう。見たところ外傷は無いようだが、なぜ倒れているのだろうかと疑問に思う。すると男の口からまるで地獄の底から聞こえる様な声でこのように呟く。

「め……飯を……」

(腹ペコで倒れたんだこれーーツ!)

とりあえず日向は偶然近くにあつたコンビニに駆け込み、おにぎり数個とお茶を押借した。今は店員もいないし緊急事態だから仕方ないよね。

男におにぎりを手渡すと物凄い勢いで食べ始め、僅か数分で完食したのだつた。

「ハア…すまない、助かつた」

「あ、いえ…」

(スゲー食いつぱりだつたな。どこぞの皇女様とタイマン張れるくらいに食つてたぞこの人)

そんなことを考えていると男が日向に質問をしてくる。

「ああそりゃ、少年。君は今が何年か知つてあるか?」

「え?・ええっと…2012年頃ですよ」

(こつちだとそうなつてるはず)

変なことを聞くな、と思いながらも男の質問に答える日向。男はそれを聞いて驚いた顔をし、何か悩むように唸り声を上げる。

「もう…もうそんなに時が過ぎていたか。道理で内地がここまで変わつていたという訳か」

(…何かよくわからんが大変そうだな)

他人事の様に言うが実際その通りだ。俺はこの世界と何の関わりもなく、トラブルや問題に首を突つ込むほどお人好しじゃない。漫画の主人公だつたら全力で関わっていくのだろうが俺は主人公じやない。

そう思つていると男が日向に尋ねる。

「そういえば日向。君は何やら急いでるように見えたが」

「…はい、実は友人を捜しているんです」

「友人？どこにいるんだ？」

「あのビルにいるんだと、俺は思うんですけど」

日向は雷の龍が放たれたビルへと指を差しながら答える。男は「ふむ…」と何か考える素振りを見せ、しばらくして男が再び日向に問い合わせる。

「君たち…一つ聞いておきたいことがあるのだが

「何でしようか」

『電光機関』、『アーネンエルベ』、もしくは『ゲゼルシャフト』という言葉を一つでも聞いたことがあるかね？」

「…いえ」

(バディ스타は知らないか?)

(私自身、長い間を眠つていたから聞いたことはないな)

日向はもちろんどうやらバデイスタもその言葉に聞き覚えはないようだ。男はしばらく一人を観察し、納得したように頷く。

「…そうか。すまない、今のは聞かなかつたことにしてくれ」

「わかりました」

「了承」

（え、何？もしかして俺たち結構やばい事知つちやつた？）

そんな事を考えながら内心ビビつて いる日向であつた。

「もしよければ私も同行させて欲しいのだが」

「…いいんですか？」

「私もそのビルに少し用があつてな。ダメだつたかな？」

「いえ、そんな事はありません」

（むしろ大歓迎です！）

この先、一体どんな敵が現れるかもしれないなかでこんなにも頼もしい仲間ができるのはありがたい事だし、こちらも助かる。

「では、よろしく頼む」

「はい！えつと…」

「ああ、すまない。そういえば自己紹介がまだだつたな」

「アカツキ…そう呼んでくれ」

11話

気がつくと自分はいつの間にかベッドに寝ていた。どうやら保健室のようで一ノ瀬の『B a s a r a 技』をモロに喰らって気絶したらしく、そのまま運び込まれたみたいだ。

(あれ?なんか前にも似たようなことが…)

そんなデジャブを感じつつもゆっくりと体を起こす。まだダメージが残っているのか少し気怠く感じるが動けない程のものではなかつた。するとちようど部屋の扉が開き、誰かが入つてきた。

「あら。気がついたようね」

その人物は雪のような白い髪に、青い目をした美しい女性だった。誰しもが見ても惚れるような容姿を持つ彼女だが、その女性の顔には左目の瞼を跨つて痛々しい傷跡が残つていた。

そしてその女性の後ろにはもう一人は長い黒髪に金色の目、そして頭には猫耳を模したカチューシャのようなものを身につけている。
(制服着てるからうちの生徒みたいだな)

「えつと…あんた達は？」

『あんた』とは失礼ですわね！私の名はワイス、『ワイス・シユニー』よ！」

「…『ブレイク・ベドランナ』」

お嬢様口調の白い少女が『ワイス』で、どこかクールでミステリアスな雰囲気を漂わす黒い少女が『ブレイク』と名乗った。

「ああ：俺は「日向慶一郎でしょ？ルビーから聞いてますわ」：どれくらいの間、俺は寝ていたんだ？」

「ざつと3時間ほどですわ」

「他の二人は貴方より早く目覚めたわ。随分と派手にやつたそうね」

派手にやつたのは全部一ノ瀬なんだから俺はあんまり…。そんな言葉を言おうと思つたが自分もさりげなく一撃ぶっぱしてるので否定しようにもできない。

「試合の結果なんだけど、タッグマッチはチームで一人でも生き残りがいたら勝利になるからあなた達の勝ちって事になるんだけど…」

「味方を巻き込んだ勝利だなんて今までのタッグマッチでは前代未聞ですわ」

(ごもつともです)

二人の言う通りこつちはぐうの音も出ない。とは言え、形は何であれ勝利したことだから俺の身の潔白は証明できたから良しとしよう。

そう思つてゐると

「あ、あとあなたの下着泥棒の件なんだけど…」

「犯人捕まつたわよ」

「ゑ？」

ワイスが言うには俺たちが試合している最中、二人が街を歩いていると道に下着が何枚も落ちてたらしく、跡を追うと下着泥棒の隠れ家を見つけ、突入し捕まえたという。

男がなぜばれずに学園内に忍び込めた理由は、その男の持つ伐刀^{ブルアーツ}絶技の能力で、影を極端に薄くする能力で誰からにも認識されなかつたという。ルビー達がなぜ認識できていたのは興奮していて集中力が切れていたらしい。

「まあ、何というか…無駄骨だつたわね」

「……」

「ちょっと聞いてますの？」

日向はただただ口を開けて呆然としていた。

自分があれだけ頑張つたというのにこの仕打ちはないだろうと、そんな風に思つていたのだつた。

「某所にて」

「くそ！ 何なんだこいつは！」

『解放軍』の『使徒』である法衣を着た男がそのように悪態を吐く。彼の周りは炎で包まれ、そして彼のような格好をした多くの者が地面に突つ伏していた。

この惨状を作り出したのは彼の眼の前にいる一人の男。この男が『たつた一人』で十数人に及ぶ伐刀者を相手取つたのだ。

(何が複数人で攻めれば余裕だ、ふざけるな！ 情報と全く違うじやねえか!!)

実は前に、この男の力に目をつけた『解放軍』が仲間へと入れさせるべく拉致するために刺客を送つたのだ。しかし拉致しようとした刺客はボロ雑巾のよう^{ノーブルアーツ}に返り討ちにされ戻つてきた。刺客の証言ではその男の伐刀絶技は雷系統で、固有靈装^{デバイス}は白い長剣だつたと言われている。

しかし、今日の前にしている男の固有靈装^{デバイス}は証言の何一つとして掠りもせず、全く別の武器だった。男が手にしているのは重厚な赤い外殻にライターのような火打ち石が備え付けられた大剣であり、おまけに伐刀絶技も雷ではなく炎系統とまるで証言と一致していなかつた。

「もう実力の差が分かつただろ。さつさとこいつら連れて帰れ」

男が大剣を肩に乗せながらそのように言う。しかし今、彼が手ぶらで帰れば『解放軍』

の幹部達に処刑される事は間違いない。何としてもこの男を捕まえなければ…。

ブレイザー

「ふ、ふざけるな！そもそも貴様はなぜ認めようとしない！我々伐刀者は選ばれた新人類！世界を統べる者になれるんだぞ！」

「それがくだらないんだよ。何が新人類だ、笑わせる」

「何だと!?」

男の発言に彼は怒りで震える。なぜこんなにも素晴らしい力を持つてているというのにそれの本質を理解しようとしないのか。それなのにこの男はくだらないと嘲笑う。

「…全くゲームと似たシナリオみたいだな」

「ゲーム？何のことだ」

「…てめえには関係ないことだ。それよりも、さつさと帰れ」

「そんなこと出来るか！ここで貴様を何としても捕まえる！全ては新世界のために！」

彼は自分の固有靈装デバイスであるナイフを構える。それを見た男はため息をつき、手に持つ大剣を構える。

「なら選べ、道を開けるか…くたばるか！」

男はそれを言うと同時に剣に炎を纏わせる。

「《ガンフレイム》！」

そのまま剣を振るう、すると地面に波状の燃え盛る炎が使徒に向けて放たれる。

「《トルネードセイバー》！」

対し、使徒はナイフを振るうと目の前に巨大な竜巻を発生させ《ガンフレイム》を暴風で打ち消す。

「ハハハ！相性が悪かつたな！俺の伐刀絶技『ノーブルアーツ』を前に「お喋りするほど余裕か？」何！」

使徒の放つた竜巻から男が炎を纏わせた剣を持ち、そのまま地面を這うような形で突き進み突進する。

「《グランド」

「ゴハッ！」

使徒は油断していたのか剣が腹に叩き込まれる。しかし男はそれで終わらせずに地面を燃やしながら加速する。

「《ヴァイパー》！」

その勢いを利用し空中へと殴りあげ、使徒は炎に包まる。だが男は無防備になつた使徒へさらに追い討ちをかける。

「《タイラン」

無防備になつた使徒の腹に右手で炎を纏わせたアツパーを放ち

「《レイブ》！！」

左ストレートで使徒を殴ると同時に巨大な火球を同時発射する。使徒はそのまま爆炎を諸にくらい、遠くへと吹つ飛ばされていった。

「死にはしないさ…多分な」

男はそれを言うと同時に『封炎剣』を地面に突き刺す。そして適当にあつた瓦礫に座り周りの惨状を軽く見渡す。

『《ドラゴンインストール》を使わなかつたとは言え…まだ完全に扱いきれてないな…』

男は自分の手を見つめながらそう呟く。

「ヘヴィだぜ…つてソルならこう言うんだろうな。まあ…俺はただの元一般人だつてのに、何でこうなつちまつたんだろうな。いつたいどこで間違えたんだ?俺の人生…」

男は黄昏ながらそのように呟くが、その問いに答える者は誰もいない。

『今?』はまだ、誰も答えてはくれない。

彼の名は『皆方総司』

日向や一ノ瀬と同じように『こちらの世界』に飛ばされた『罪』の力を持つ男だ。

12話

医者からは体に異常はないと言われ、保健室から出ると先ほど対戦したルビーとヤン、それと一ノ瀬が部屋の前のベンチに座っていた。二人は今回の騒動での早とちりに反省していたらしく頭を下げて謝罪してきた。

自分としてはもう過ぎた事だし、自分の身の潔白と真犯人が捕まつたから最初から許すつもりだった。それを二人に告げると明るい笑顔で「ありがとう」答えてくれた。

しかし一ノ瀬、テメーはだめだ

ビクッと一度、体を震わせた後に物凄いスピードで俺の前にジャンピング土下座をしてきた。冗談のつもりで言つたのにここまで過激な反応をするとなるとやはり気にしていたのかもしれない。ちなみにヤンとルビーからは「それだけの実力があるんだから優勝狙えるよ！」と言われた。

しかし二人は知らないからそんな事を言えるのだ。俺が戦う相手は学園最強：無名で刀をたかだか三年程度しか握っていない素人が勝てるはずがないともう自信で決めつけているのだ。

三人と別れ自分の部屋に戻りベッドに大の字で倒れこむ。ポケットに手を入れて、携

帯を取り出しある画面を開く。そこには選抜戦の辞退を表明するための特設サイトだ。朝の時にも一ノ瀬と話した通り、勝ち目がないのなら最初からやらない方がいいのか？そう思っていた。

ミナが攫われた時とは違い、今の俺には『逃げる』という選択肢が存在するんだ。少なくとも、多くの生徒の眼前で惨めな敗北を晒すよりは遥かにマシだろう。

そう思いながら辞退表明のメールを送るためのボタンを押すが

『本日をもちまして辞退表明の受付は終了いたしました』

俺たちが戦っている間に既に受付の時間は過ぎていたようだつた。その夜、俺は枕を涙で濡らしながら寝ただつた。

（数日後）

いよいよ始まつた『七星剣武祭代表選抜戦』。この日までに多くの努力を積み重ねてきた者たちや学園最強の頂を目指す者が集まるこの大会。そして伐刀者ブレイザとして名誉ある『七星剣武祭』の今年の代表選手か誰になるのかと観戦しに来る生徒や一般客が、会場を賑わせていた。

いくつかの試合を終えた後、今大会で最も注目されているステラさんがいよいよ試合

に出てきたようだ。相手は珍しい鎧型の固有靈装、そしてステラさんも妃竜の罪劍を発現させる。

試合開始と思いきや、ステラさんが妃竜の罪劍から炎を放出。幻想形態ではないため、距離が離れていても物凄い熱気と膨大な魔力に会場が包まれる。しばらくすると相手はステラさんとの実力の差を見せつけられ、勝ち目がないと思つたのか棄権をした。

どうやら真の伐刀者は氣迫で倒すらしい……。

——そしていよいよ

「……」

（うおおおおお……胃がキリキリする……）

日向は選手控え室でベンチに座り、緊張しながら自分の試合が来るのを待つていた。普段（？）いるはずの部屋だというのに今日はイヤに緊張感ある雰囲気を漂わせている。（真剣でやるのはあの時以来か…）

ミナが誘拐された時以降、殆どの訓練は幻想形態で行つていた。いま思えば実像形態での戦闘は三年ぶりだろう。

（正直、怖い…）

あの事件からもう既に三年。いくら戦いに慣れたとはいえ、まだ自分自身に『怯え』が存在する。痛み、苦しみ、恐怖…あの時の感覚が未だにこびりついて忘れることが出来

ない。

(やつぱり…俺は逃げれないのか?)

こうなつたのも全ては『白い男』の思惑なのか?

それともこれは既に定められた運命だったのだろうか?

そんな事を考へてゐるといつゝ間にか試合の時間になつてゐた。日向はゆつくりと立ち上がり、憂鬱な気持ちになりながら闘技場へと向かう。

その時

「日向!」

部屋から出た時、誰かが俺の名を呼んだ。後ろを振り返るとミナが立つていて。試合を終えたらしく、疲れているのが分かる。

「今から…試合?」

「…うん」

「緊張してる?」

「…うん」

今の俺はこの人生で一番怯えた声で答えてゐるはずだろう。下手をすれば死ぬかも

しない、そんな恐怖が自分自身を蝕んでいるのだ。彼の頭には只『逃げたい』という言葉でいっぱいだつた。

しかし

「大丈夫」

ミナが傍に近寄り、日向の手をぎゅっと握りしめる。彼女の手がとても暖かく感じ、

彼女の目は俺を見据える。

「勝てるよ。日向ならきっと」

ありきたりな言葉かもしねれない。

だが

「ありがとう」

その言葉に日向は少しだけ救われ、吹つ切ることが出来た。

「行つてくる」

「うん」

日向はそう告げ、闘技場へと向かっていく。

「はあ…こんな事になるんだつたら辞退すりやよかつた…」

重い足取りながらそのように呟く日向。彼自身、まだ『恐怖』は完全には抜けきつて

はいない。しかし、今の彼には『逃げたい』という言葉は消え、それ以上に『負けたくない』という感情が『恐怖』を勝っていた。

(けど…せいぜい足搔いてやるさ)

試合が終わつた。今、自分の目の前には『龍』の一撃必殺技『青龍』によつて対戦相手である東堂刀華が倒れていた。会場はシーンと静まり返つており実況も言葉を失つていた。

「幕末故に致し方なし」

(ああ…俺の人生、これからどうなるのだろうか)

日向の言葉にハツとした実況席が大声で喋る。

『な、なななんど!! 今大会で優勝候補として上がつていた学園最強『雷切』を破つたのは、初出場の1年、日向慶一郎だアアア!!!』

それを機に観客席から多くの歓声が上がり、会場が大いに盛り上がつた。

(ハハッ、もうどうにでもなれ…)

この先、俺はどうなつていくのだろうか、しかし軽くヤケになつてゐる日向にそんな事を考へてゐる余裕などなかつた。

『さあ、第三試合が終わり、第四試合を開始したいと思います！実況は引き続き、放送部の月夜見が、解説は飛び入りで西京寧音先生が担当します！』

『よろしく。うちのお気に入りを見に来たよ～』

『え、お気に入り？…まあいいでしよう。それでは選手の紹介です！赤ゲートから姿を見せるのは破軍学園生徒会役員の一人にして七星剣武祭代表有力候補！二年Cランク『速度中毒』兎丸恋々選手！先ほどの試合で生徒会長の東堂選手が倒されて少し興奮状態に入っているしく、今の彼女は何をするか私たちにも想像できません！』

赤ゲートからブルマ姿の少女が出てくる。彼女こそが生徒会役員、兎丸恋々だ。

（うわあ、すつげえ人だかり！緊張してきた…こういう時は『人』を手のひらに書いて…つて違う！これは『入』じゃん！）

一ノ瀬はゲートの入口前で自分の名が呼ばれるのをテンパリながら待っていた。

『次に青ゲートから姿を見せるのは今大会初出場の選手！一年Bランク『一騎当千』一ノ瀬幸村選手！』

「は!?」

ゲートから出ながら、実況の説明の中に何故か聞き覚えのない言葉が出てきた事に驚く一ノ瀬。

なんだ一騎当千つて：

『ちなみにこの二つ名は寧音先生が付けたものです』

『いえ、驚いた？』

(ちょ!? 何で勝手にやつてるのさあの人は!?)

いつの間にか付けられた二つ名、もうどこから突っ込めばいいのやら…。

『実力は未だ未知数！ 第三試合の日向選手のようにジャイアントキリングを成すのか！ それとも兎丸恋々が会長の仇討ちを取るのか！ この試合、予測不可能です！』

(好き勝手言つてくれるよ…ハア)

そんな事を考えながら、対戦相手である兎丸恋々と対峙する。

「ねえ？ 試合が始まる前に一つ聞きたいことがあるんだけど？」

「なんでしようか？」

「噂で君が実技試験の時に西京寧音先生を倒したつて…本当？」

「さあ…どうでしようね？」

やはり噂になつてゐるらしく、正直に話すのも面倒なので適当にはぐらかす。もしバレたりしたらどこかの新聞部がしつこく話を聞きにくるかもしれないしな。

「そつか…まあ戦えばきっと分かるよね！」

そう言い、彼女はナックルダスター型の固有靈装^{デバイス}し、ステップを踏みながら加速する

準備を整える。

(さて……から先は運だめしだな)

一ノ瀬は祈るように自分の固有靈装デバイスを呼び出す。

「勝闘を上げろ『戦国』」

一ノ瀬の体が虹色に光つたと思うと、彼の手元に光が集まる。やがて形を成していき、その大きさは2mもあるうという『巨大な刀剣』へと変わる。

「へへ！ちよいと遊んでやるか！」

一方、試合を終え周りからの視線を感じながら一ノ瀬の試合を観戦する日向。そして一ノ瀬の持つ武器ですぐに察しがついた。

『前田慶次』

リーチが恐ろしいほど長く、高い火力を持ちながら牽制を行つて戦いそのまま一撃必殺技へと移行するテクニカルタイプのキャラだ。一時期は口ケテ前で『ぶつぱで五割』とはしやぎ過ぎて本番では自重させられた哀しい男で有名だった。

(頑張れよ、一ノ瀬)

両者は睨み合う。

『LET, s GO AHEAD』

試合開始のファンファーレが鳴った瞬間、先に前に踏み出したのは一ノ瀬、『超刀』を

構え一気に間合いへと詰め寄る。それを事前に察知していた兎丸はバックステップで避けようとする。

一ノ瀬は試合が始まる数日間、去年の大会の記録映像を見て兎丸の研究を行つていた。そこから分かつたことは『加速させたらどうすることもできない』という結論に至る。その際に彼は2つの作戦を立てた。

「うおおおお！」

一ノ瀬は雄叫びを上げながら右手『超刀』を振るう、と同時に背中に掛けていた『鞘』を左手で掴み『超刀の柄』に嵌め込む。

「うえ？！」

本来の『超刀』の長さはおよそ2m。しかし一ノ瀬は刀の柄を鞘に挿入する事により、さらに長さが倍となる『朱槍』を作り出す。兎丸もリーチがさらに長くなるのは予想していなかつたのか驚きの声を上げる。

『な、何と！まさか可変形型だつたとは？！』

『すごいねえ。まるで斬馬刀だよ』

一ノ瀬の振るつた『朱槍』は兎丸の足を捉え、兎丸はそのまま足を払われ転ばされる。この時点で作戦1の『走らせない』は成功した。そのまま次の作戦2へと移行する。

「そら！頼むぜ！」

一ノ瀬が大声を上げて兎丸の倒れている地点に手を向ける。

すると

『『キキイ!!』』

「え、ちよ! うわああああ!」

突如として倒れ伏していた兎丸が空中へと吹き飛ばされる。いつたい何が起きたのか、そう思い観客や実況席が兎丸が倒れていたところに視線を向けると『も、もぐら!?』

『三匹いるからダ○ドリオかな?』

そこには闘技場の地面からひょっこりと顔を出していた三四のもぐらだつた。どうやらこのもぐらが兎丸を下から押し上げたらしい。いきなりのもぐら登場に困惑する兎丸と実況席、観客もそれに驚いたが日向だけはその正体に気が付いていた。

(あれは…慶次の対地援軍!)

前回のタッグマッチで毛利がやつた援軍システムたはまた異なつたもので…というか毛利そのものが全くの別ゲーだつたというのもあるがこれこそが本来格ゲーにおけるストライカーというものだ! とはいっても呼び出すのは人ではなく動物であり、分かりやすく言えばサムスピのナコルルの鷹、『ママハハ』みたいなものを想像すればいいだろう。

一ノ瀬のは既にこの時点では作戦2の『立たせない』が成立した。

しかしこの局面で対地援軍で相手を浮かすという事は…

(いや、仮にそうだとしても、ここは人目があるんだ。やつてしまえば後々取り返しがつかなくなるぞ…)

頭をぶんぶんと横に振り、脳裏に思い浮かぶ最悪の光景を振り払う。日向はそうならない事を祈りながら試合を観戦する。

一ノ瀬は兎丸が空中へと吹き飛ばされるのを確認した後、構えをとり何やら力を貯める。そして万有引力で地上へと落ちてくる兎丸に

「そらよつと!!」

「ガツ…」

バツドを振るように『朱槍』を兎丸の腹部へと当て、今度は横へと吹き飛ばしてき、それを一ノ瀬がブーストを使つて追うような形で駆けていく。

「ちよいと通るよ！」

そのまま兎丸を越えるようにジャンプし、飛ばされている兎丸の背後へと一気に回り、強烈な掌底を打ち込む。その衝撃で兎丸は苦悶の声を漏らしながら再び吹き飛ばされる。

観客や実況席はこの時点までは一ノ瀬が『善戦』していると思つていたのだろう。し

かし、その考えが甘かったという事はこの後の展開ですぐに理解するだろう。

『えく…』

『これ絶対入つてるよね』

実況席と観客席は『その光景』を見て啞然としていた。解説の寧音を除き、誰一人として口を開かず唯々見る事しかできなかつた。

『その光景』とは…

「ちよいと通るよ！そら！ちよいと通るよ！そら！ちよいと通るよ！イヤよイヤよも好きの内つてね！そら！楽しいねえ！」

一ノ瀬が吹き飛ばした兎丸をジャンプで飛び超えて瞬時に背後へと回り込み、掌底を叩き込む。それによつて再び吹き飛ばされる兎丸の背後に回り込む…それをたた延々と繰り返していた。試合が始まつてまだ3分経つているが決して『ソレ』が途切れる気配は一切ない。

観客席で見てゐる日向は『ソレ』を見て頭を抱えていた。前の世界でも嫌というほど見せられた『ソレ』を日向は知つていた。

(せ、『戦国走り幅跳び』まで再現しやがつた…)

『戦国走り幅跳び』

慶次専用の即死永パ。『恋の峠越え』キヤンセルによる空中ダッシュで画面を往復する『戦国フルマラソン』の亞種。しかもこのコンボ、『戦国BASARAX』での永パは基本的ににはタイムアップまで続くがこの『戦国走り幅跳び』のみがHPを削り切つて倒す事の出来る高火力コンボなのだ。とはいっても100 HITできればの話だが。

たつた3分の間とは言え、それだけの時間の間に人を吹っ飛ばすような掌底を連発していたら誰だってそれには耐えきれないはず。しかし兎丸はまだ辛うじて意識は残つているため審判も勝利判定が出せず、まさしく生かさず殺さずとも言える状態だ。

（もうやめたげてよお!!）

きつとこの会場にいる一同が心でそう思っているに違いないだろう。そしてその思いが通じたのかここで空中ダッシュが止んだ。本人も気が済んだのかようやくコンボが途切れさせ、勝負がついた

と思つたが
ガシャン!!

一ノ瀬は何を考えたのか『朱槍』を抱え、自由落下している兎丸へと突きを放ち、そのまま斬り上げた。

「うおっしゃあああああいいい!!」

(えええええええ
!?!?)

何という事をしてくれたのでしょうか。一ノ瀬はあろうことかボロボロの丸丸に対し、一撃必殺技『祭りだ！ワツショイ！』を発動し、トドメという名の死体蹴りを行つた。そしてドサッ！と音を立てながら落ちる丸丸、これには思わず解説の寧音も苦笑い。本来ならば七星剣武祭代表有力候補を倒した事で大歓声が起きるはずだというのに、日向の時とは比べものにならないほど会場は静まり返つていた。

「へへ！いい感じだ！楽しい祭りだつたな！」

それだというのに『超刀』をブンブン振り回しながら踊る一ノ瀬が唯一一人、愉快そうに笑っていた。

12・5話 やがて集いし者たち

夢を見た。

あの時まで自分が普通の生活をしていた頃の夢を。いつも通りの風景、学校で授業を受けてたり、体育の時間でではしゃいだり、昼休みは友人と昼飯食いながら駄弁り、放課後はゲーセン寄つたり…全部が当たり前だった。

だけどその日常はガラスが碎けるような音を響かせながら壊れた

その日常を壊したのは全てはあの『白い男』

憎い、ただ憎い

もし、次に奴と会うことがあるというのなら俺は——

「……きて……じ……起きて総司君！」

「…………ん」

誰かに自分の名前を呼ばれ目を覚ます。気がつくと選手控室のベンチで寝ていたよ

うだ

（ここ）は『巨門学園』、『破軍学園』と同じく若い^{ブレイザー}伐刀者を育成し教育する機関である。

そして彼、皆方総司もその学園の生徒の一人である。彼の目の前には豊満な胸が視界を覆っていた。

「ふむ、今日も逞しいおっぱいだ」

「目覚めて早々何言つてるの!?」

バシーン!と少女の持つタオルで頭を叩かれた。その衝撃でようやく目が覚め、欠伸しながらベンチから立つ。総司の目の前には白い肌、美しい顔立ちと金髪のショートヘアに赤い眼鏡を掛け、男を刺激する豊満なバストな少女。

「もう、試合前っていうのに寝ちゃダメだって言つてるでしょ?」

「違う、俺はただ闇に身を委ねていただけだ」

「中二病っぽく言つてるけど寝てる事には変わりないよね!?」

彼女の名は『篠原鈴』、総司の同級生でこの世界での幼馴染もあり、総司の『能力』を知っている唯一の理解者だ。

「まつたく、声を掛けてあげるのなんて私くらいだよ? いい加減友達作りなよ」

「いや…作ろうにも相手が俺を避けるんだもの」

「あ…ま、まあ確かに親善試合であんな事したからね…」

この学校に入学した時にクラスメイト同士で親睦を深め合うために行つた親善試合。その時に俺の能力で出たのは重厚な鎧型の固有靈装『バイス・ボチュムキン』だった。相手はク

ロスボウ型の固有靈装^{デバイス}だつたが全く歯が立たずほぼ一方的に攻め、最後は覚醒必殺技『ヘヴンリーポチヨムキンバスター』で倒してしまつた。

その試合以降、クラスのみんなから避けられるようになつてしまつた。

「まあいいや。それよりもわかつてゐるの？もうすぐ試合なんだからビシツとしなきや」

「そうは言つてもな、俺はやる気がないんだよな！」

二人は『七星剣武祭代表選抜戦』の予選選手で総司も試合に出るのだが、あまり乗り気ではない様子だ。

「俺は別にこんなお祭りに参加するつもりなんざ毛頭ねえのに。お前が一人じやイヤだつて言うから参加しただけだぜ？」

「だ、だつて一人じや不安で緊張するんだもん！」

「予選で俺と当たるという可能性は考えてなかつたのか？」

呆れながらもそう答える総司。

「それに！今年は破軍学園で無名のルーキーがあの『雷切』を倒したんだよ！だからこそ総司の力が必要なんだよ！」

「へえ、そりやすごいな」

去年の七星剣舞祭でベスト4という実力を持つ雷切が一回戦で負けるとは。本人の実力が落ちたか、それともそのルーキーが強かつたのか。

(まあ俺には関係のない話だかな)

そう思つていると

「あ、そうだ」

恋が何か思い出したのか制服のポケットから携帯を取り出し、動画サイトのとある動画画面を見せる。

「ねえねえ見て。これは先日、破軍学園で行われた試合なんだけど」「ん？どれどれ…」

総司は気になり、その動画を開いて見ると

「うわ…何これえげつね」

「でしょー」

そこには長い太刀を持つた男が、対戦相手であろう女性を吹き飛ばしては回り込んで吹き飛ばす…それをひたすら繰り返している動画だつた。最初は繰り返しで再生してののかと思つたが試合記録を見る限り、本当の事らしい。

(あれ…待てよ。俺はこれをどこかで見たことがあるような…)

動画の男の動きに、前の世界での記憶で引っかかる物がある。そんな風に感じた総司。

『うおっしゃあああああいいい!!』

「…ハッ！」

男が女性に槍？のようなものでトドメを刺した所で動画は切れた。総司はそれを見て自分の中にあつたモヤモヤがようやく分かつた。

（そうだ！今の技は：間違いない、戦国b a s a r aの技だ！）

なぜこの男がそれを出来るのか？そんな疑問が浮かぶなか、一つの答えに辿り着く。

『一年・皆方総司君。試合の時間になりましたので入場してください』

選手呼び出しのアナウンスが鳴り、総司は現実へと引き戻される。

「あ、もうすぐ試合が始まるよ」

「…ああ」

先ほどとは声のトーンが変わりながらも立ち上がりながら答える総司。

「なあ、鈴」

「ん、何？」

「全国、行つてやるよ」

「…え？」

そう言い残し、バタンと扉を閉めて試合会場へと向かつた。閉める前に鈴が何やら言つていたが今の中にはどんな言葉も聞こえていなかつた。

（もしアレが俺の予想通りなら：全国大会に行けばわかるだろう。なら俺がやるべき事

は：）

そう考えながら、ステージへと足を運んだ。

試合会場に着くと周りは観客席で埋まり、ステージの中央には対戦相手が既に立つており、ニヤニヤとした顔でこちらを見ていた。鈴がいうには確か相手は去年の七星剣舞祭の代表選手だつたらしいが。

「おいルーキー！ 悪いことは言わない。黙つてリタイアしろ！ そして俺の踏み台となれ！」

「……」

何やら相手がピーピー喚いているが総司は顔を俯かせ、その言葉に耳を貸そうともしないかった。

「…永久に廻れ 《ギア》」

静かにそう呟きながら己の固有靈装^{デバイス}を展開する。彼が身につけていたものは紫色に蝙蝠の羽がついた籠手で、口元には一昔前のパイプ型の煙草をプカプカと吹かしている。

それを見た一部の生徒たちがザワザワと騒いでいた。「親善試合のとは違う」とか「鎧型じやないのか？」と。相手選手は大剣型の固有靈装^{デバイス}を手にしていた。

「もう一度言うぞ！ ミンチになりたくなかつたら今すぐ棄権しろよな！ ギヤハハハハ

!!

「……」

しかし総司は男の言葉を無視し、黙りながら体から『赤いオーラ』のようなものを放する。

そして

『Let, s Go Ahead!』

試合開始のファンファーレが鳴る。

「ギヤハハ！忠告はしたからな！後悔 s 『星となれい!!!』 ブベラア !?!?」

それは一瞬だった。

観客らは確かに二人を見ていた。

しかし、今起こつて いる自体は何なのだろうか。総司の姿が消えたと思つたら対戦相手の顎に強烈なアッパーを叩き込み、気付いた時には男が天井に突き刺さっていたのだから。

総司はアッパーを放つた体勢のままこう呟いた。

「邪魔するな 血で血を洗う 原始人」

それは俳句だつた。だが内容は無茶苦茶で季語もなく、風流も感じられなかつたが観客全員はその姿を見て、知らない間にこう呟いていた。

「「「ダンディ：」」」
【DESTROYED】

「とある病院」

「ふう…」

一人の白衣を着た青年が自動販売機で買った缶コーヒーを片手にため息をつく。彼の名は『北上悠人』かつて『白い男』にこの世界に飛ばされた者で能力は『AC北斗の拳』の力を持つ男だ。今ではこの病院で医者をしていると同時に『廉貞学園』の生徒という少々複雑な身分にある青年だ。現在はちょうど治療を終え、休憩している最中だ。

「どうやらお疲れのようだな」

そんな彼に話しかける人物がいた。悠人は声の方に顔を向けると見知った女性がいた。

「ああ、薬師さんでしたか。お疲れ様です」

「ふふつ、そつちもな」

彼女の名は『薬師キリコ』同じ学園に通う生徒であり彼女も同じくこの病院で医者をしている。医療ではどんな病気であろうとも治すことから医者の間では『死神殺し』とも呼ばれており、騎士としての実力も高く本格的な活動をすればAランクを取れるほど

の強さを秘めている。

彼女は先ほどまで3時間にも及ぶ手術を行った後で、ふこし疲れている様子が見れた。

「君の方はどうだったんだ?」

「いやまあ。最初は僕の治療法に驚かれて、襲いかかってくる人とかいましたよ」

「それもそうだな。目の前で人体に指を突き刺す行為なんてされたら誰だつて驚くさ」
彼女言う通り、悠人の治療法は『経絡秘孔』と呼ばれる人体の生命源を突くことによつて人の持つ生命力を極限にまで引き出す事で病気を治療するのだ。

「そういえば一部の患者からこう呼ばれているそうだぞ。いかなる病をも直す『聖人の手』を持つ医者がいると」

「なんですかそれ?…だけど僕の技術は」

「君は既に多くの人を救っているのだから、誇つていいのよ」

少し暗い表情を浮かべる悠人を励ますように答えるキリコ。二人が話していると

「せ、先生!」

一人の看護婦が慌てた様子でこちらに息を切らしながら走つてくる。

「どうしたんですか?そんなに急いで」

「た、大変です!463号室の患者が突然暴れ出して…」

「463号室の患者…確かにこの前うちに搬送された解放軍の奴だつたな」

その時は、意識不明で全身に大火傷と肋骨が数本折れていたりなどひどい状態だつた事を覚えている。

「ふむ…治療したばつかだというのに随分と元気な奴だな」

「感心してないで行きますよ。看護婦さん、案内してください」

「は、はい！」

二人は看護婦の後を追いながら463号室へと向かつた。

三人が問題の463号室に着くとそこにはナイフ型の固有靈装^{デバイス}を片手に暴れる一人の男がいた。全身包帯だらけでミイラ男と化していた。

「くそくそくそ!!あの野郎!ぶつ殺す!絶対見つけ出してぶつ殺してやる!」

誰かに憎悪の言葉を吐きながら今もなお暴れている所を見つけた。

「まずいな…このままでは他の患者達にも被害が及ぶ。早いうちに止めなければ…」

「待つてください。薬師さん」

キリコがそう言いながら前に出ようとするが、悠人がそれを手で遮つて止める。

「先生はさつきまで手術をしていたんでしよう? 疲労が溜まっているいま、何かあつた

ら大変です。アレは僕が引き受けましょう」

「…いいのか？」

「ええ、構いません。あの人には少しお灸をすえましょう」

そう答えるながら悠人は室内へと入っていく。

「おい君！」

「ああん？」

大声で男に叫ぶとこちらに、殺意を籠めた視線を向けてくる。

「それ以上暴れるというのなら、僕はあなたにしかるべき行為をしなくてはならない！
今すぐ投降するんだ！」

「へ！たかが医者程度が新人類である俺に敵うと思うかよ！」

「その言葉はもう聞き飽きたさ…天の道を光らせ『北斗』！」

その言葉と共に少年の手が光る。それが形となつてゆきやがて銀色に輝く、北斗七星の紋章が刻まれた籠手を『幻想形態』で顕現させる。

「ツ！テメエ伐刀者だつたのか！」

「これが最後の忠告です。武器を收めて、投降してください」

悠人は穏やかな声で、男を宥めるように言い放つが

「ふざけるな、テメエなんぞに指図されてたまるかよ！」

男は悠人の言葉を一蹴するように叫ぶ。

「…そうですか。ならば実力行使といきましよう！」

悠人は男目掛けて駆け出し、男はそんな悠人を迎撃するべく鎌鼬を発生させ八つ裂きにしようとすると悠人はそれをジャンプで回避する。

そして

「あああああああ!!!」

逆さになりながら相手の左右のこめかみに指を突き刺し、すぐに指を抜き出し男の背後に着地する。

『北斗懺悔拳』!!!

「なーて、てめえ俺に何しやがった?!?」

男は頭をさすりながらそう叫ぶ。

「あなたは今から3秒後、今までに味わったことのない痛みに襲われるでしょう。……その痛みを持つて懺悔しなさい」

「な、何を訳のわからない事を…ブゲボウ!？」

突如として、男の腕がありえない方向へと曲がっていく。しかも腕だけではなく、足、鼻、背中などありとあらゆる骨格が音を上げて軋んでいく。

ボキ！バギ！ゴキ！

「アバア!? ガヒュ!? た、助け…！」

「言つたはずです。痛みを持つて懺悔しようと…」

「あ…あべし!!」

男は断末魔を上げながら全身から血を吹き出し、倒れこんだ。

あの後、男はすぐにI.P.Sカプセルへと入れられたが秘孔　頭維（四合）を突かれた
せいで治つたとしても一年はベッドでの生活となるだろう。

自分のデスクに座つて一息ついていると、キリコが缶コーヒーを渡してくる。
「すまないな、損な役をやらせてしまつて」

「いえ、ああでもしなかつたら周りにも被害が出てましたし…」

「そうか… そういうえばお前は今年、『七星剣武祭代表選抜戦』に出るのか?」
「はい… というか友達に半ば無理やりエントリーされただけなんですねけどね」

ハハ…と苦笑いを浮かべる悠人。

しかしこの時の彼はまだ知らなかつた。

自分以外にもこの世界に飛ばされた人間がいるなど、想像もしていなかつただろう。

『役者は一通り揃つたみたいだね。ふふ・さあ、君達がどんな物語を生むのか、楽しみにしているよ』

白い部屋の真ん中で本を片手にクスクスと愉快そうに男が笑っていた。